
一方通行でリリカルIN

とれ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一方通行でリリカルIN

【Nコード】

N4223K

【作者名】

とれ

【あらすじ】

一方通行（仮）の能力を得てリリカル世界へ転生した主人公。色々陰謀と設定が渦を巻き始めて作者が混乱しつつあります。頑張り主人公、最強になってストーリーを簡単にしてくれ！！

原作など影も形もございません。

1 - 15話から書き方変わります。2章始めました。

60万PV有難うございました！！

キャラ紹介1（前書き）

一人に懸ける量が長すぎた・・・。
次は少なめにしよう。

キャラ紹介1

名前：トレイルⅡ デインⅡ ウォース

ランク (SSS < SS < S < A A A < A A < A < B < C < D < E < F) (スキル補正無し、デバイス込み) :

魔力 C、近接戦闘 F、遠隔戦闘 D、耐久力 E、敏捷力 E

デバイス :

無し。自ら演算を行うウォースには必要が無い。微妙な調整や計算を必要とするスキルなので、通常のデバイスでは役不足。

スキル :

アクセラレータ
一方通行

レアスキル。全ての要因のベクトルを操作することが出来る。これにより指向性のある事象の向き・大きさのコントロールが可能となる。このスキルを発動させることで魔力以外のランクを大幅に上昇させることが出来る。ただ、このスキルは山田太郎の記憶を基にしているのでオリジナルとは若干の差異がある(多発における精神力の磨耗など)。

ミーティア
一筋の流星

アクセラレータ
スキル。一方通行を応用した遠隔攻撃。砲撃魔法の初歩であるスフ

ィアの到達速度を限界まで高めたもの。発射の際には体と触れていることが必須条件で、衝撃波からの防御、スフィアの状態把握、発射後における外的要因の影響など、単純そうではあるが計算はめんどいらしい。これの多発バージョンもある。

???

レアスキル。ノレービアがこっそりと与えた二つ目のレアスキル。
内容は謎。どうやら自動的に発動するスキルのようだ。

説明：

この作品の主人公。生前は山田太郎と名乗り平々凡々な人生を歩んでいたが、とある事件でリリカル世界へ転生することとなった。風貌は、青髪ショートで可愛い顔立ちをしている。ただ、常にだるそうな素振りをしているので魅力半減状態となってしまう。偶に熱血になるのは転生前の影響。只今5歳だが既に中等科へ通っているのも転生前の影響。本人は少し不満があるようだがそんなもんは知らん。最終目標は理解^{アンノウン}できぬ存在の殲滅。この方針はぶれていないようだ。

名前：レノリア[＝]アークス

ランク：

魔力 D、近接戦闘 C、遠隔戦闘 C、耐久力 D、敏捷力 D

デバイス：

ストレージデバイス。名はホーリーキャット、呼名はネコさん。ノレービアが気まぐれで作ったレノリア専用デバイス。形状は腕輪。幻想魔法と遠距離魔法の効率が恐ろしく良く、現在の管理局の技術では再現不可。ただめんどくさがりノレービアの仕事なので、他の特徴は無い。腕輪タイプなので夏は暑い。

スキル：
ファンタスマゴリア
幻想世界

スキル。五感を惑わす魔法の得意なレノリアの大技。魔法陣内の存

在を惑わすことが出来る。最大直径50メートル。無駄の無い術式
+得意系統ではあるが、最大径での発動は彼女の最大魔力をほぼ全
て持っていくほどの消費が必要。

説明：

ヒロイン候補その1。元々は恋愛を司る神だったが、上位神である
ノレービアへの粗相を原因に人へ転生させられた可愛そうなヒト。
ただ本人はあまり気にしていない。風貌は青髪ツインテールで猫目。
まりほりの茉莉花に似ているとの事（ウォース談）。だが、性格は
明るく笑みを絶やさない性格で照れ屋、時にブラック。ウォースの
支えになろうと必死な姿がラブリー。近接の鬼であることは犠牲者
にしか分からない。スポーツ観戦時は人が変わるらしい（カミナ談）
。

名前：博麗霊夢

ランク：

魔力 A、近接戦闘 D、遠隔戦闘 C、耐久力 B、敏捷力 B

デバイス：

ストレージデバイス。名はカミムスビ、呼名も同じ。形状はお払い
棒。博麗家に代々伝わる由緒正しきデバイス。千、万の魔法が登録
されている、博麗家のノウハウが全て詰まっているともしえるデバ
イス。ただ博麗の血を引くものしか扱えない。また彼女のレアスキ
ルもこのデバイスが無いと発動をしない。霊夢はこれを布団たたき
に使うこともあるらしい（魔理沙談）。

スキル：

侵り込めぬ空間にじゅうけつかい

レアスキル。準備を必要とせず、技名の詠唱のみで発動する強力な一盾状魔法シールド。二層の盾を形成し、それぞれが魔法攻撃と物理攻撃を防ぐことが出来る。サイズはイメージ次第でどのサイズでも一定の防御能力を持つチート技。比較的近接攻撃に弱いようだ。

逃れ得ぬ束縛むそくふういん

レアスキル。侵り込めぬ空間と同じく技名の詠唱だけで発動する鎖魔法チェーン。ただ即発動ではなく、魔法陣が取り囲む過程があるために少しテンポがずれる。しかし魔法陣の展開位置を広く取れば良いだけなので致命的な弱点ではない。唯一のバットポイントは消費魔力量。その為、魔力には定評のある霊夢もあまり多用はしないらしい。

説明：

ヒロイン候補その2。由緒正しい博麗神社の跡取り。天才的な戦闘センスを持ち神童と呼ばれ続けたが、ミスカトニツク入学後はそこまで飛びぬけた存在でもないと思っている。比較対象に偏りがあるのは間違いない。腰までの黒髪を赤白のリボンでくくりポニーにしている。常にクールな表情を浮かべ色々と考え込む姿が見られるが、ぼーっとしている時が殆どのようなようだ(魔理沙談)。当然、東方の霊夢似(ウォース談)。理解できぬ存在を駆逐する部隊に入るとはほぼ確定しており、その為の教育も受けてきたが、実際目の前にしたときにはシヨックで動けなかったことを今でも気にしている。ほんのりウォースを気にするようになったのはこのときからと思われる。意外に料理好き(魔理沙談)。

名前：霧雨魔理沙

ランク：

魔力 A、近接戦闘 E、遠隔戦闘 A、耐久力 D、敏捷力 A

デバイス：

ストレージデバイス。名はファイアポルト、呼名は箒（笑）。5歳の誕生日に買ってもらった箒型デバイス。通常は指輪型で、使用時に箒の形になる。汎用デバイスとしては最高速度を記録した最先端品。魔理沙はミラーなどところがあるようだ。

ストレージデバイス。名は八卦炉、呼名も同じ。霧雨家に伝わる至宝。火を司るデバイスで、攻撃魔法、特に砲撃魔法への適正が極めて高い。腕輪型で、彼女は常にこれを身に付けている。ちなみに夏はあt（ry。制御できない時期、山に穴を開けてしまったことは、代々良くあることらしい。

スキル：

マスタースパーク
極大射撃

レアスキル。魔理沙の代名詞であり、詠唱のみで発動してしまう。通常の砲撃魔法も強力だがこれと比べると段違い。通常の盾状魔法シールドなら軽く吹き飛ばしてしまう。尚、このスキルの際には八卦炉を使用する。

???

レアスキル。マスタースパーク
極大射撃の発展版。

説明：

ヒロイン候補その3。砲撃魔法でミッドでは非常に有名な家系に生まれた秀才児。霊夢とは幼馴染で、唯一素直な自分を出せる対象であった。ミスカトニクに入ってからは、グループを形成し以前に増して明るくなったそうだ（霊夢談）。とんがり黒帽子に、白黒ス

タイル。髪は金髪ウエーブで腰まで伸ばしている。当然東方の魔理沙似（ウォース談）。少し帽子が大きいのか、おでこまで隠れている外見はかなりグット来るらしい（カミナ談）。同じ砲撃使いのウォースとは気が合い、休日には結構つるむことが多い。さばさばしているが乙女チック（霊夢談）。

名前：カミナ「グローリー

ランク：

魔力 B、近接戦闘 A、遠隔戦闘 F、耐久力 B、敏捷力 B

デバイス：

アームドデバイス。名は東方不敗（笑）、呼名も同じ。東方不敗の二つ名をとる男より渡されたもの。名前がなかったのでカミナが適当につけた。近接専用デバイスであり、形状はグローブ型。彼は右手にはめており、戦闘も専ら右手を多用している。特徴は魔力変換で、使用者の魔力を以下の特性を持つ魔力へ変性させる。？魔力吸収、？魔力硬化、？形状変化。要するに魔力を、魔力を吸収する武器へ変化させることが出来る。

アームドデバイス。名はエニ「ハーツ」、呼名は手袋。左手が寂しかったので適当に買ったデバイス。性能は微妙だが丈夫。形状はグローブ型で、強化が主な用途。

スキル：
ゴットフィンガー
灼熱五指

レアスキル。カミナの必殺技に相当する。右手の東方不敗を使用し、詠唱により発動。右手に牽引されるような形でブーストがかかり、

右手には巨大な赤い手が顕在する。これに触れると多大な衝突ダメージと、当然魔力によるダメージを与える。魔法への攻撃の場合は与えたダメージの一部を吸収し、更なる加速へとつなげることも可能である。カミナは飛行魔法が不得意だがこの技で空を高速移動することも出来る。

???

レアスキル。灼熱五指ゴットフィンガーの発展版。

説明：

親友候補。辺境からやってきた規格外野郎。能力のバランスがよくスキルも上等。本人は竹を割ったようなサツパリとした性格をしているので、ウオース達の傍にさえいなければカリスマがえらいことになっていただろう。グループの中のバカ要素として定着してしまつた今ではどうしようもないが・・・。容姿は、(ry。純粋な近接格闘はかなりのものだが、レノリアには負けるらしい。偶に手合わせをしているようだ(レノリア談)。同じサツパリとした性格の魔理沙に惚れているのは間違いない(ウオース・レノリア・霊夢談)。魔理沙は気付いていない(ウオース・レノリア・霊夢談)。スポーツ観戦が好きなのでレノリアとは仲がいい。霊夢は苦手。自称ウオースの大親友。

名前：アーウエットルードネス

ランク：

魔力 B、近接戦闘 C、遠隔戦闘 C、耐久力 C、敏捷力 C

デバイス：

ストレージデバイス。名はLEVEL5、呼名無し（呼ばない）。両手首、両足首、首に装着している。戦闘スタイルが疾風迅雷なので、発動を出来るだけ高速化させるための工夫が随所に見られる優良デバイス。数を増やしているのもその為。

スキル：

サリニツヨク
強化増強

レアスキル。地味だが非常に強いスキル。自身が制御する全ての魔法の強化・弱体化を行える。主人公ほどではないがこれもチートレベル。

説明：

ライバル候補。安定の基本能力とチートなレアスキルで常にトップに君臨し続けていた天才。口は悪いが性格はそこまで曲がっていない。闇大好き子というわけではない。見た目（ry。同級とつるむことはあまり無いが、呼べば集まる友人はかなり多いらしい（友人A談）。動物とスイーツを好むことは以外にもオープンにされているので、そちら方面の話題でのお誘いは多く、女友達も多いようだ（友人B談）。張り合いのある相手がいなくてずっと暇していたが、ウォース達が現れて少し最近興奮気味（友人C談）。

キャラ紹介2

<デイン家>

トレイル^{アンノウン}＝デイン＝ウルザ

肩書：第8世界理解できぬ存在殲滅軍総司令、臨時大将。二つ名、蹂躪。空戦SSランク。

説明：苦勞の耐えないおっさん。最近増えている白髪に敏感になっている。いい父親。トレイルを名乗りだしたのはこいつの代から。

トレイル＝デイン＝メリッサ

肩書：第8世界理解できぬ存在殲滅軍副総司令、臨時中将。二つ名、精密射撃。空戦Sランク。

説明：セラスの世話が一番のご褒美。ツンデレ。

トレイル＝デイン＝ゼノン

肩書：国立ミスカトニツク魔法学園初等科在学

説明：ウォースの二つ上の兄。飛び級で弟に学年を抜かれてしまい、彼も非常に優秀なのだがあまり気にしていない。最近研究方面に関心を持つようになってきた。

トレイル＝デイン＝セラス

説明：ウォースの三つ下の妹。メリッサの過剰な愛を100%受け止めているタフな女の子。将来が楽しみ。

ミシユラ＝デイン

肩書：元管理局^{ダイクイーアール}這い寄る闇、特別一尉。二つ名、東方不敗。

説明：ウルザの父。とある事件で局と家族を離れた近接格闘の達人。二つ名の由来は様々有り、正解は不明。今は何をしているのか不明、少なくとも一時期はカミナの師であったことは間違いない。

< 慈善団体 神の導き >

名前：不明

肩書：神の導き代表。元管理局首都航空隊、陸曹長。

説明：白髪長身眼鏡の変態おっさん。過去に家族を局に殺されその記憶が抜け落ちてしまったときがあったが、思い出した後局を抜けこの神の導きを設立。元が有能であり、運(?)があったのでノリに乗っている。有望な若者を追い回すのが趣味。なんか悪い事を考えている。レアスキル持ち。勝ち運、連打、チャンス。充実の30台。

ノヴァーIIホールナー

肩書：神の導き代表秘書、警備部部长、広報部部长、財務部部长、総務部部长、人事部部长。二つ名、幻夢の天使。

説明：真面目なピンク髪眼鏡美少女。ミスカトニック主席卒業で、内政と戦闘なんでもござれの超人。でも家事は出来ない。レアスキルフィールド・オブ・ファンタムの幻影の領域は領域情報の上書きが出来、代表とのお忍び行動が簡単に出来る様になっている。クーデレ。回復、ピンチx。花の20台。

ネリーIIティアンカート

肩書：神の導き 警備部特務三課所属。

説明：低身長青髪青目のポニー。上目遣いがキュートな団体最強の剣士。デバイスはアームデバイスで、短剣型を二本。舌足らずなのか話す際は数単語ごとで区切る。代表やノヴァが頭を撫でると丸くなる。ピンチ。もうすぐ輝く10台。

< 管理局 >

ファウン＝エノアス

肩書：管理局情報部第三課、三等陸佐。二つ名は砂漠の虎、では無い。陸戦Aランク。（昇格試験受けていない）

説明：だらしのないバルドフェルドの様な風貌のおっさん。残念ハードボイルド。長身ひげ。多分悪い奴ではないはず。外見はたるそうだが、やる時はやる超優秀な人物。局の上ともパイプがあり将来の元帥候補でもあるらしい。レアスキルを持っているが部下もその実体はつかめていない。

アーセン＝ルドワード

肩書：管理局情報部第三課、二等陸尉。陸戦Bランク。

説明：ファウンの部下。いつも尻拭いばかりやらされる不幸な娘。エリートコースの情報部で三佐の元で働けることを喜んでいたが今は微妙な思いを抱いている。休日は友人とカラオケに行つてストレス発散しているらしい。

<その他>

ノレービア

肩書：神界 第2級神、未来確定式『アリトアラユル』製造責任者
説明：ウォースをリリカルワールドへ送り込んだ張本人。外見は小さくなつたり大きくなつたりしてるのでどれが本物が良く分からない。金髪・ロングヘア・美女（美少女）は固定。非常に上昇志向が強く今の状況に満足していない。色々と画策を行いある程度は結果を残せしている有能な神様。部下が結構有能なのでサボることは出来るみたい。

アンノウン
理解できぬ存在

肩書：二つ名、災厄、滅ぼすもの、絶望の波、星喰い、喰らい尽くすもの

説明：この世界の人類の敵。ウォースの生まれた歳に存在が確認され、それから増え続けている。基本戦略は、巢（通称：ハイブ）の建設 増殖 土地の蹂躪（一回数千以上の固体が出撃する、占領地は数ヶ月かけて全てを喰い尽くす） 巢の建設 エンドレス。星の侵略が完了すると次の星へ移る。目的や思考など色々謎に満ちた存在。数と進化速度が半端無い。特定の形態での発生が通常。形態は全部で下記11種確認されている。

？

光線級、全高3m。正確な長距離攻撃を仕掛けてくる種。数はあまり多くは無いが射程が異常に長いので、常に盾状魔法を展開する必要がある。逆に盾状魔法さえきっちり張れば恐るべき存在ではない。

？

重光線級、全高21m。光線級の親玉のような存在。通常の盾状魔法では守りきれないが個体数が少ないので発見し次第、誘導弾で撃ち殺すことが常。一定の犠牲は出るが数が多くないので犠牲は多くない。

？

突撃級、全高16m。非常に硬い殻を前面セットした形状で、かなりの速さで突っ込んでくるタイプ。地上建造物への被害が大きい。殻は固いがそれだけである。最近では跳躍級が多数乗っている場合が多い。

？

要塞級、全高66m。中に理解できぬ存在を収納して現れる最大の理解できぬ存在。初期は少数確認できたが最近は見られなくなった。ただの的。

？

戦車級、全高3m。数が尋常なく出現してくるタイプ。近接戦闘の能力がかなり高い。大きく強力なあごと、素早い動き、そして数で圧倒してくる。空戦魔導師としても数が良いから大変という悩みはある。最近数が減少中。

要撃級、全高12m。腕の硬さと、スピード、サイズ、生物認識能力、どれをとつても優秀ではあるがNo.1のものが無く器用貧乏。最近あまり見られない。

闘士級、全高2.5m。魔法を使えない人間と同じ程度の戦闘能力。はつきりいつて敵ではない。最近は見られない。

頭脳級、全高200m。巢の中に存在する、理解できぬ存在のエネルギー供給ポイント。戦闘能力は無い。

母艦級、全長1800m。地下を掘り進み理解できぬ存在の通路を作成すると共に、体内に多数理解できぬ存在を収容する種。戦闘能力は無い。

飛行級、全長5m。大きな翼と光線級の様なレーザー射出口を数十持つ。長〜中距離攻撃が可能且つ、唯一の飛行能力を持ち、更には初歩的な盾状魔法も使ってくる。近距離では噛み付いても来る。現在最も武装局員の被害が多い種。

跳躍級、全高3m。巨大かつ柔軟な足と戦車級のより大きい顎が特徴的な種。走るスピードはあまり速くないが、最大で5m程の跳躍で空中の武装局員に噛み付いてくる。最近突撃級に乗っかっているものを良く見る。母艦級とのコンポで甚大な被害に遭うことがある。

奇形種、大量発生しておらず、偶に見かける種。ウォースと霊夢が遭遇した種もここに分別される。

キャラ紹介2（後書き）

アンソウ
理解できぬ存在に新種を追加しました。
通常種だけでは弱すぎますからね。

1-1話 ついつい魔が刺したでは済まない(前書き)

注意：初小説、自己満足あらずじ、キャラ・設定崩壊が甚だしいこととなります。あと恐らく主人公TUEEEEになるかと思えますので、ご理解頂ける方のみのでの撰取をお願いします。

追記：『』が念話、『』が会話です。大体は。

1-1話 ついつい魔が刺したでは済まない

何でこんなことになってしまったのだろうか……。

俺の前には美人&イケメンが多数、俺のしでかした案件について話中。時々ちらちら向けられる視線が、俺の体にチクチクとささってくるの！！

やめて、俺の体のライフはもうゼロよ！！

……なんて馬鹿な思想に逃避行をかましているけど、原因は変な正義感の故だったのだ、といかにもな感じで語ってみる。あれがまさか文字通り人生を変えてしまうこととなってしまったのだが、今更どうしようもない。

その内容は、

？俺は普通のオタリーマン、何の不自由のない24歳、名前は山田太郎、『ふつつう』って突っ込みはもう慣れた。

？今日もお疲れお仕事終わって、わが休憩場への道のり途中、なんだかフラグ立ての場面に遭遇。

？だがしかし！！フラグに遭遇とあってしまっは、それは当然突

っ込むべきだ！！

・・・の結果、可愛い炉利っこを車から助けて、代わりにスプラッタとなったのさ。

でもまあ、しゃあないさ。俺は普通のオタリーマンで、確かに人並みの正義感しかないけれども、体が勝手に動いちゃったもんに、そこまで後悔も無いってことよ！！

で、人生終了 死後の世界あるならバツチ来い！！との状況だったんだが、なんでか冒頭の状況になってしまっているのさ。

なんでも、俺があそこで飛び出してしまったのは計算外で、そのエラーのせいで色々な所にバグが発生しそうらしいのよ。

『んなもん、知らんわ〜、再計算処理乙！』とか言いたいけど、言ったら粉みじんにされそう、もう死んでるけど。

そんな訳で俺の処分を決めるため、精神体だけひっぱってきて、この息の詰まりそうな場所に置かれてるんよね。

「えーとっ、山田太郎君っていったかなあ、今回の件は君も不幸だったと思うけど、うちらとしても結構面倒なことになってしまったの。お願いだけど理解してね。」

なんかおつとりした言い方で一番偉そうなめっちゃ美人なおねえさんが話してきた。ボンキュッボンで気遣いオーラが漏れ出している、テンプレそのままのお姉さんキャラだ。

「私は名前はノレービア。気づいていると思うけど神様の一人よ。役職はそうねえ、君が理解できるように説明すると、企業でいう役員ってとこかなあ、この問題では責任者やっています。まず状況を説明するから、質問はその後ね。」

ほー、役員ってことは、結構偉いんだな、っていうか、こんな人が役員って。大丈夫かよ、神様組織さんよ。

「まずあなたもある程度の説明があつたかと思うけど、事態は結構深刻。至急フォローがいる場所へはうちの実働部隊を派遣しているけど、圧倒的な人員不足が発生しています。普段では滅多に動かない課長や部長クラスも対応を行っていて、それはもう大変。」

課長や部長クラスねえ、確かにあいつらの仕事は主に文句を言うことだからな。

「そこであなたへの処分内容が決定しました。現在手のまわりそうも無い、QRS - 37894へ行つて貰い、フォローを行つて下さい。」

まあ、予想どおりだな。

要するに、派遣社員ってことかな。畜生、生前は正社員だったのに。

「当然、必要とされるスキルは渡ししますが、今はあなたに割ける我々の力もあまり多くないので一つだけとします。何がいいですか、あと質問等がありますか??」

うーん、能力ねえ。何がいいだろ。まあ、あれでいいか。強そうだし。それよりも、

「ふーようやく喋れたぜ。俺一応主人公だよな、ならさつさとセリフ作れよな!!」

場が「？」で埋め尽くされるが、俺悪くない。

「まあ、いいや。えと、能力だけど、ラノベのとある魔術の禁書目録に出てくる一方通行の能力って大丈夫です?」

「え、あ、はい。データベースで検索した結果、あなたに割ける神力で可能な能力と判明しました。早速計算式に取り込み、インストール・・・、完了。では、あなたの精神体の式への取り込みを開始します。」

「え、ちょ、待って、質m「精神体の式への取り込み完了、転送します。では神のご加護がありますように」、っってお前の言うせりふじゃNEEEEEEEEEEE!!」

そしてとある病院……

「OGYAAAAAAAAA」

赤ん坊の泣き声……。

「よくやった、メリッサ！！男の子だ！！」

そして、喜ぶ男性が……。

「ああ、これでデイン家も安泰ね。」

息絶え絶えの女性の声……。

『おめでとつございます、マスター』

光るデバイス……。

うん、リリカル世界で赤ん坊か、、テンプレ乙。

1・1話 ついつい魔が刺したでは済まない(後書き)

暇つぶしでテケトーに書いてみた。あまり後悔はしていない。あと、ガラスハートだからきつい批評には耐えられず、Mに昇格してしまいかもしれないので、お気をつけください。

3/20家の名前など変更。

8/17修正

1 - 2話 俺の存在意義（前書き）

やる気があるうちに初期設定固めてまおう。

追記：『』が念話、『』が会話です。大体は。

1 - 2話 俺の存在意義

デイン家（ノレービア視点）

『現状発生しているエラーのうち大掛かりなものはギリギリの所で対処ができているわ。ただ、元から仕事がある皆さんがイレギュラーであるこの案件にかかりきりという事は不可能だから、貴方の仕事の解任ということまずないわ。それにしてもまさかこんな事が起きると思ってもみなかつたわ。これまで式には確実に起きる事項を取り込むことで絶対の安定を誇ってたから……。貴方に関してもそうよ。貴方はあそこで死ぬことなく、今の会社に死ぬまで勤めることが予想事項で確定事項だったのにあんな行動に出るなんて……。行動自己判断型生物の乱数の恐ろしさが今回の件で再認識され、式の再構築も至急案件としてあがってしまった、この忙しさはもう少し続きそうだわ。……って、聞いてます、山田君？』

『……。ああ、聞こうとしますよ、ノレ様。でも、この体、もう、限界かも……。ZZZZ』

はあ、こちらが無い時間を割いて説明をしているのに。でも仕方が無いわね。精神体は成人でも体は生後3日。精神体へのエネルギー供給のパスはまだ完全ではない上に、まだぎこちない念話を行っては……。

さて、皆さんこんにちは。

私は、山田君、いや、今はトレイル＝ディン＝ウォース君と呼ぶべきよね。長いからウォース君でいいわね、をこの世界に送り込んだノレービアです。ちゃんと覚えています？

何故話かけているかというと、彼が眠ってしまったからね。決して手持ち無沙汰になってさみしいからではないわよ。

・・・それにしても、可愛い寝顔ね。送り込んだ当時はひどく混乱があつたようですけどなんとか落ち着いたみたいだわ。

それにしても彼がこの世界を知っているとは驚いたわ。

彼の世界ではこの世界の設定に非常に近い世界がアニメの舞台となっているみたいなのよね。

2日前（ノレービア視点）

『デバイスねえ、リリカル世界っぽいけど、まさかなあ。でも「マ

スター」とか言ってるもんなあ。なのは様とかにもあえんのか?」

『なのは様?何、それは??』

ようやく事態も少し落ち着いてきたので山田君の様子を確認してみると、彼は赤ん坊なのに顔をしかめて悩んでいました。なので思考を探り、話しかけてみることにしました。

『うわ、、なんだ、なんだ??・・・ん?この声は役員おねーさんの声か??』

『なんなのよ、その呼び方は。おねーさんにはノレービアという名前があるのよ。あと、これはあなたの心に直接話しかけているのよ。ロックしているので他の人には聞こえないけどね。』

この世界では念話が通常的に使用されているので、ちょっと細工を試してみました。それにしても、役員おねーさん、って……。

『すいませんでした、ノレービア、様?』もっとフランクでいいわ

よ』『、じゃあノシ様で。』まあ、それでいいわよ』『、で、質問を答えなくてもいいなかったからそれについてさせてもらっけどいい?』

『いいわよ。』

『まず、?ここはリリカルなのは世界なのか、?俺のやるべきこととは何なののか、?禁止事項はあるのか、?使命を果たした後の処分はどうなるのか、?そのほか伝達事項・注意事項は?』

『一杯あるわねえ、でも当然よね、死んじやったかと思ったら、神様の前に送られて、そして説明もなしに新たな世界に送られ、拳句の果てに気づいたら赤ん坊だもんね。私なら耐えられん』分かってんなら、もう少し配慮しろや!!』、、、ごもつともで。』

フランクで良いと言ったのは私だけでも、私に対してこんな物言いをしてくるなんて、、、なんか良いかも

『コホン、じゃあ、答えるわね。』

まず?だけど、これはYESであり、NOよ。データベースを用いたところ凄い偶然なことに貴方の認識どおりの世界でした。ただ、

あなたが起こしたエラーにより所々差異が発生しており、恐らく不自然な点も多くあると思うから、既存知識を絶対視しないでね。

？は必要なときに伝えるわ。貴方のエラーがどこまでの影響を示すのかがはつきりしていないのが理由ね。ただ、何かが起こるとするのは確実なので、何も指示しないということは間違いなくないわ。

？は特にないわね。私たち神の存在をばらしても殆どの人は信じないしね。『俺の行動がまたエラーを起こさないのか？』、確かに貴方という存在はこの世界には組み込まれてはなかったので、エラーは発生するでしょう。ただ、この世界の中のみで完結するような式に組み替えるから、そこは問題はないわ。あなたは我々の指示以外の行動は基本的にはフリーよ。

？、これも特にないわね。普通にその後の人生を楽しんでね。ただ、世界を移動するようなことは我々からはしないから、元の世界に戻るといふ期待はしないでね。

最後に？だけれども、今貴方の心に話しかけている、この手段を覚えてもらうわ。これで私はいつでも指示を出せるようになるからね。じゃあ早速頑張りましょう……。

『……了解』

再びディン家（ノレービア視点）

あの後、1時間くらいで神念話を会得して（結構早いわ）、話せるようになったけど、まだ早かったかしら、でも、彼には期待しているから、時間があるときには息抜きもかねて覗いてみましょう

（？視点）

……ん、あああ、よく寝た。この体はマジで良く寝れるよな。山田時代でも良く寝たと思うが、一日の7割も寝るとは、……悔りがたし、幼年体……！

あと……！（？視点）とか書くなよ……！俺は主人公だろ、例え正式に新たな名前が無くとも、なんか別の方法があるだろ、全く。俺の新たな名前は、トレイル＝ディン＝ウォースね。これでいいだろ。長いからウォースでいいけどな。

それにしても、まさかりリカルワールドとは。

父さんはトレイル＝ディン＝ウルザ、管理局のお偉いさんみたい、

母親はトレイル「デイン」メリッサでこれまた管理局のお偉いさん。
デイン家は代々管理局へ優秀な魔導師を送り出している家系だよ。
俺にも期待がかかるんだろうな。

でも、俺には神様方の指令もあるからめんどい事この上ないわ！

あー、楽に生きたい・・・。

1 - 2 話 俺の存在意義（後書き）

8 / 17 修正

1・3話 レノリア登場（前書き）

ほんとに自己満足の文章なんで色々とフリーな表現をしています。たぶん読みにくいと思います。そこは気合と根性と私への悪意で乗り切ってください。悪意はもしかやもしかやと食します。

追記：『』が念話、『』が会話です。大体は。

<1時間ほど前>

デイン家（俺視点）

『はあ??? 特訓???? この体で????、俺に死ねと???』

今俺状況、俺生後一週間、ベットで就寝中 ノレ様念話で起こして
くる 『特訓やるわよ?』 俺 『HA?』

『まさか、そんなことも分からないほど、馬鹿だつて』失礼言わな
いで! 精神体だけよ! 流石にそんな可愛い肉体に無茶はさせな
いわよ!』、、ああそうですか、残された肉体は意識が無く死亡
『それも無いわ! 代わりの精神体を入れておくから。』、、あい
あい、好きにしてちょうだい・・・。』

ふふふふふ、精神体を抜くから代わりを入れるんか・・・。
もうどうでもええわ。

場所不明（俺視点）

で、今の虐待風景に至る酷いです！何が虐待ですか！！これは特訓です！！」

おいおい、そこにまで突っ込むなよ、全く。

さて、今の現状をご説明しよう。

まずこの暑苦さ「誰がですか！！」・・・ああ、めんどい。この私の特訓をしていただいている方が、ノレさま「ノレービア様とお呼びな」あああああああ、うっせええええ！！ちよっとは黙れやこの馬鹿女が！！」

「うっ、、、すいません。」

涙目で謝るこいつはノレ様の部下のレノリアって神様だ（課長クラ

スらしい、一応偉い部類だそうだよノレ様)。頭がちがちの奴だが、度胸は無いから凄んでやれば怯む。神様の癖に情けない奴だ。この謎な場所にノレ様に連れてこられ、説明された。

ちなみに精神体の格好は山田太郎と同じだ、つい最近まで使ってたのに何か懐かしい。

「・・・いや、レノリア、私はノレービア様からこの人間を託されたのです！こんなことで凹んではいけないです！！、さあ、トレイル！！ディーン！！ウォース！！特訓を再開しますよ！！！」

なんか、一人で鼓舞してい

「つてちよ、ひゅつづつづつ、まてばく」どかああああああんん！！」「うわーーーー！！！」

・・・、俺はミサイルみたいな魔法に延々と狙われ、俺に与えられた特殊能力である一方通行の練習を行っているのだ、たぶん。

「・・・はああ、中々うまくいきませんね、ノレービア様から頂

いた資料からはベクトル変換の能力と記載があるのに、全然力場への干渉がありません。・・・でもノレービア様の指令！このレノリア、絶対成功させてみます！！さて、ガンガン打ちまゝまでやこら！！」・・・す。ん？？なにか聞こえましたか、知りません！この空間では精神体なら死ぬこともないですし、時間の経過も時の神の加護を受けているので非常に緩やかです！！こういう、魔法やスキルは感覚さえ精神体でつかめば肉体へ戻った際にできる様になるので、頑張ってください！！、恐らく。」

ふふふふ、まりあほりっくの茉莉花に劇似でかなりタイプな姿なのに、なんて鬼畜！！

ああ、あっちもSキャラだったな、残念ながら。

こちらら言ってることは分かるさ！確かに特訓にはいい環境であることは認める、が！、スキルの使い方が全く分からない状況で、使用特訓などできるか馬鹿やるー！ー！！

結局、ノレ様が俺に一方通行の使用方のインストールを行って
いなかったことが、特訓開始10日後に発覚した、散々ぼろぼろに
された後に。

そらそうだな、やり方わからなかったら使えるはずないしな。ま
あ、思うところはあるがそれは後回しだ。

そしてインストール完了後俺の頭は本当の意味で覚醒をした。

一方通行を使える能力とは、使いこなせる能力も含み、緻密な演算
を可能とする頭脳も当然例外ではなかった。俺も薄々そのスペック
の高さには気づいてはいたが(ミサイルの回避時などで)、まさか
ここまでとは思わなかった。意識的に切り替えられるが、周囲の在
り様が座標と物理法則で一瞬に解析ができるようになり、そのベク
トルの種類・向き・大きさが把握できるようになった。そして、肝
心であるその操作方法も。

「これが一方通行の世界……!!」

「今日は、回避という手段をとるはずがねえ!!」

俺の胸に次々と着弾が観察されたミサイル型魔法は、完全に計算で絡みとられ、俺の能力により、ベクトルの変換がなされた!!

「おおおおうう、漸く成功しましたね。私の努力のおかげです!」

全く同等のスピードで向きだけを変えた魔法が、レノリアに向かっていく。当然慌てることもなく、その魔法を同等魔法をぶつけ消滅させて言った。

・・・何がお前の努力だ。

「さて、次は応用編です。」

その後、色々な魔法で実験を行ったが、全てで成功。目で捉えきれないもののために、オート反射の設定も使いこなすことも出来、最後のほうは逆にスピードを上げたものを反射してやることで、終にはレノリアが半泣き状態になっていた。

10日間の仕返しもこめての反射群だったが、見てくれは可愛い女の子が泣いているので、ちょいつと慰めてやったら、ナデポ状態になっていた。

あるえー？？、こんなはずではー？？でもらっきー？？

特訓終了後にノレ様がおどとして精神世界にやってきたので、恨み目線をベクトル増幅してぶつけてやったら、涙目になっていた。

涙目ノレ様が可愛かったから、ニヤニヤして観察していると、レノ

リアがむっーって効果音が響きそうな顔をして睨んでたから、レノリアのほっぺたを引っ張ってやった。

レノリアはじたばたしてたけど少し機嫌が良くなり、特訓を完了した。ノレ様は涙目のままだった。そんなに怖かったんかよ。睨み目増幅の処方には気をつけるとするか。

1・3話 レノリア登場（後書き）

うん、何か文章構築の難しさを実感してきた。

他作者様方は凄いですわ、ほんとに。

1 - 4 話 魔法学園入学試験（前書き）

この辺から独自色を……。いや、暴走ともいうのかな。

追記：『』が念話、『』が会話です。大体は。

1 - 4 話 魔法学園入学試験

デイン家 (俺視点)

一般的な転生ものなら、生まれたては自我がないようだけど、俺の場合は精神体の特訓により超発達した演算力(脳力ってか?)が肉体に馴染みつつあるから、生後1ヶ月の状態でも自我がある状態になりました!

これってあまり良くないんだよな、実際は。

だって、赤ん坊として不自然な行為は出来ないじゃん、そうになると食事や排泄の際はプライドを捨てる必要が出てくるのよ。

幸いわが母、メリッサは金髪清楚な美少女(17歳らしい、親父は25歳)だから嫌悪感はない。むしろ性的な部分で問題が出ると最初のころは心配したが、精神ではなく体が母であると認めているからかな、むしろ安心するから、その点はホント良かった。

あとは慣れだ、もう何も聞くな。

それでもやはり不自然ではあるらしい。そりゃそうだ、学園都市最高の演算能力が可能な脳と24まで育った脳が入ってるんだもの、そこは仕方ないし、仕方ない。

ただ、仕方ない×2で済ませるのもなんなんで、ノレ様と相談し、3歳まで意識を早送りしてもらうことにした。

『俺』としてはぼやーっと過ごす事で、時をあいまいに認識させ、長時間を意識を薄めようという試みだ。

これが上手いこと働き、俺は今3歳となり100%覚醒状態となった。流石に劇的变化はまずいので2歳半くらいから徐々に早送りスピードを緩めた。両親は少し疑問を抱きながら、デイン家に天才が生まれたことに喜んでいた。

そして俺は、魔法学院に通う段階へと駒を進めた。そこで劇的な出会いが待っているとは気付かずに……。

魔法学院 (俺視点)

「ようやく、魔法が習えるぜ。『魔法』、く、くううう、いい響きだ！ー！やっぱり、男ならこのロマンを追いかけてなんぼだろ！ー！」

『なんぼってなんですか。でもそんなに魔法の習得を待ち望んでいたのなら、何故もっと早い段階で親に頼まなかったのですか。2歳くらいで習得する子だっているのでしょうか。』

俺が魔法へのリビドーを溢れさせていると、レノリアが話しかけてきた。

最近レノリアと話す機会のほうが多い。ナデポが原因かもしれないが、ノレ様は普通に忙しいのが原因のようだ。ちなみに指令はまない。

ちなみにレノリアとの神念話では普通の友人として接している。向こうもそれで問題はないようだ。決して俺が鈍感であるということはないはずだ。きっと。

『あー、まあ、それも良かったんだけどな。出来るだけ普通にしないと、非普通は楽に生きれないもんだ！ー！』

『・・・あなたはそういう人でしたね。』

なんだ、そのがっかりしました的なテンションは！

だってこれから俺はこの世界のバグに立ち向かうことになるのだ。そりゃあもう壮絶な人生になるだろう。なら今のうちにその大変さを引き釣り落とす工作を行わなければならない！！

うんこれ即ち、我がモットーなり』

『はいはい、途中から漏れていますよ、全く、貴方という人は・・・。貴方の能力』一方通行』はこの世界では最強に近い能力です。ノレービア様が貴方に何故ここまで能力を与えられたのか不明ですが、少なくとも貴方の言うとおり平穏な人生を送るためではないと思いますね。』

俺のテンションを下げな！！

あと壮絶人生フラグを立てるな、全く！！

そうこうしている内に、俺は試験会場にたどり着いた。

そうこの学園はミッドチルダでトップの学園であり、当然試験というものが存在する。もちろん内容は最難関を誇る。ディン家は常にこの学園で学を修め、管理局へ入局することが常であった。

俺は入局するかどうかは知らんが、最高の学には興味があったので両親の言われるがまま、ここの受験をすることに決めたのだ。

試験は俺の天才的頭脳による筆記で一次試験は通過しており、今日の実技試験を受けに来ているのだった。

ちなみに当然お受験勉強はしており、家庭教師は俺の飲み込みと理解のスピードに舌を巻いていた。あと一年入学を遅くする予定が一年繰り上がったそうだ。

試験内容はレアスキルのあるものもないもので別れ、無い物は魔法の才を測る試験が待っていた。

俺はどっちでも受かるような気はしていたが、他称自称最難関らしいので、レアスキル持ちの列に並んだ。

時間が経ち、俺の番になった。試験官は俺のプロフィールと二次の結果を眺め、俺を見た。

「トレイル＝ディン＝ウォース君、かのディン家の次男ですね。お兄さんもこの学園なので受かるといいですね。・・・あと、ここだけの話だけど、君は一次の成績がきわめて優秀だったから、二次の結果がどんなでも合格は間違いないからね。」

はいはい、自称他称乙。

「さて、だから緊張はしなくてもいいよ。君のレアスキルはどんなものなのかい??」

・・・さてと、なんと答えるかな。出来れば手札は多めに持ちたいから過少申告が確定だが、さてどうするか。まあ、これでいいだろ。

「俺の能力は魔法を跳ね返す能力です。」

「ほう、跳ね返す能力だね。『恐らく魔法の一つ反射魔法リフレクションのことをレアスキルと書いているのだろう。書類にはレアスキル持ちとも書いてないし、恐らく親に内緒で魔法を覚え、レアスキルとも思っているのだろう。でも一応見てやるか。』・・・さてでは私が魔法を打つのでそれを反射してくれないかな、大丈夫、非殺傷設定で

威力は低いものにするからもし失敗しても怪我はしないよ。」

きつと彼は、^{リフレクション}反射魔法だと思ったんだろうな。あまり驚いていないし。ただ、^{リフレクション}反射魔法と俺の反射は一味違うぜ！

魔法学園¥試験会場（試験官視点）

「さーて行くよ、^{シュート}弱射撃魔法×3！！」

^{リフレクション}反射魔法を使えるというのならこのくらいは反射出来るだろう。それにしてもこの魔法は難易度がかなり高いのにな……。流星はデインといったところか。

・・・おい、そつえばデバイスはどうさ、いや、もう魔方陣を描かねば、、、ああ、もう、まにあわん、危ない！！、、、え????？」

デバイスもなく、魔法陣もない彼に襲い掛かる、^{シュート}弱射撃魔法は、笑みを、、、浮かべた彼に、、、、衝突した！！！！

私の悲鳴にも似た声に会場の視線が集まり、対応をとろうとするがもう遅い!!

……かに思われたが!!

「何だと!!??」

彼に衝突したはずの魔法は、行きに辿った軌道をなぞるかのように、正確に私に向けて跳ね返ってきた!!!

「……うっ、プロテクション防御魔法!!」

私は若干の反動を感じ、私の放った弱射撃魔法シュートであると確認する。
強い混乱が会場を包む中、私は叫んだ。

「……トレイルⅡディンⅡウォース、二次試験、レアスキル魔法ミ反射合格ライ!!」

魔法学園¥試験会場（会場視点）

「トレイルⅡディンⅡウォース、二次試験、レアスキル魔法ミ反射合格ライ!!」

まだ混乱を抜けていない試験官から大声で告げられる。会場は少しの驚きと混乱がありながらその能力について理解をしてゆく。

その能力はまるで、鏡に魔法を放ち、鏡に映る魔法が鏡の奥から飛び出てくるように、返ってくる。魔法反射^{ミラー}!!
恐ろしく強い能力!!

当たり前だがこのレアスキルはトレイル^{II}デイン^{II}ウォースが初めての所有者であり、その後すぐに彼の名前は広まった。

そこに一部始終を見ていて近づく女の子が一人。

魔法学園[¥]試験会場（俺視点）

「トレイル^{II}デイン^{II}ウォース、二次試験、レアスキル魔法反射^{ミラー}合格!!」

はっはっは、試験官の奴、何て顔だよ。いやあ、あのあせった顔最高ですな!! いやあ愉快愉^k『性格が悪いですよ!!』、うっさい!

まあそれにしても、、勝手に能力に名前付けんなよな、魔法反射^{ミラー}

って。まあいいけど。

そこに、

「うわー、あんたって凄いスキルを持つねえ。私のバインドも跳ね返すのかしら。」

清涼感のあるはっきりとした通る声が耳に入った。

まだざわめく会場の中、耳に飛び込んできたその声を俺は気になり、くるっと振り向き、目を見開いた。

「なーに???そんなに驚いた顔して???そんなにこの格好が珍しいのかしら?この服装は神に仕えるものが着る巫女装束というのよ。」

・・・そう巫女装束だ。

ただそこには彼女なりのアレンジが入っており、白い襟に黄色のリボンが胸を飾り、頭には大きな赤のリボンが添えられていた。特に目を引くのが大きな白い袖であり、彼女の特徴である脇が覗いていた。

そう、どこからどう見ても彼の『博麗霊夢』だった。

1 - 4 話 魔法学園入学試験（後書き）

協巫女参戦！！

御察しの通り、わしの趣味です。でもゲームは未プレイ。

まあ、インデックスは一方通行×かみやんまでしか読んでないし、リリカルは二期のみの視聴であります。

だから下手な内容でも許してくださいってオチでした！

8 / 17 修正

1・5話 赤白と白黒（前書き）

追記：『』が念話、『』が会話です。大体は。

1・5話 赤白と白黒

魔法学園¥試験会場（俺視点）

俺は突然現れた、博麗霊夢？に声をかけられ固まっていた。そこに更なる珍入者が現れた。まあ、霊夢がいればこいつもいるでしょう、と半ば若干理解していたが。

「おーー、霊夢、どうかしたのか？試験も終わったし帰ろうぜ。」

どっからどう見ても、霧雨魔理沙でした。

「あら、魔理沙。えーつとねえ、そう、この子。面白いスキルを持っているのよ。そして私が話しかけたと。」

「へー、霊夢にそこまで言わせるのなら私も興味があるぜ。ん、こいつか。んー、なんだかなよっとしていて弱そうだぜ！」

「見た目で弱いかどうかは分からないでしょ！、、、確かになよつとはしているけど。」

こいつら放つとくと言いたい放題である。仮にも初対面の相手に言う言葉ではないだろう。まあ、両方ガキだし、確かに俺の外見は、原作一方通行にそっくりだから、白髪・NOT筋肉質だから、なよつとしてないことないけどな。

まあ、霊夢は前世では結構好きだったから、寛容な心で許してやるか。

そこに更にNEW登場人物が。いやNEWではないか。

「君たちが、彼の『博麗』と『霧雨』ですか。さっきの試験結果見ましたよ。噂に違わぬ出来でした。バインドに秀でる博麗とシュートの霧雨。そして両者ともゼロタイムあの威力と精度。卒業後は入局してウオースと一緒に私の部隊に来てくれないかしら。」

わたくしの母君です。今日の試験は親と同伴が多い。こいつら二人は子供だけのようだが、俺のようなケースのほうが圧倒的に多い。そりゃ、最難関学園の二次試験だもんな。そーいや門の前には予備校の先生らしき暑苦しいおっさんが大声出していたわ。あれはあれで、関係者以外のやる気を下げさせるから効果はありそーうだ。

「あなたは、、、ディン、、、!!、ああもしかして、『精密射撃』
様ですか?」

「よく知っているわね。その通りよ。」

「彼の高名な『精密射撃』^{ロックオン}様にお声をかけていただけなんて、大変な名誉です。ありがとうございます」「ありがとうございます」

ちなみに後ろが魔理沙な。便乗しやがった、まあいいけど。霊夢は5歳くらいの癖に大人過ぎんだよ。俺は仕方ないけど。

あと母上様は、結構、いやいや、かなりの凄腕魔導師だ。空戦のSランクがついている。名門ディン家に嫁いでこれだけの実力は軽く持っており、その正確・緻密且つ容赦のない射撃で二つ名、『精密射撃』^{ロックオン}でかなり有名だ。

「・・・さて、試験も済んだし、勧誘もしたし、ウォースとお話し
することもあるから、もう帰りますね。二人ともウォースを宜しく
ね。」

OHANASHIキターー。間違いなくレアスキル黙ってたこと
だ。ヤベエ。

「では、ウォース君またね。「じゃーなー」。「」

「ああ、また会おう。・・・おれが五体満足ならな。「」??」「」

帰り道、俺はここまで我慢に我慢したとあることをぶつけることに
した。隣には普段より150%増して機嫌の良い母上様がいらっし

やり、帰宅後の予定はまるっきり不明なので、懸念事項の解決は今のしかない、マジで。

『で、あれは何??』

『・・・唐突ですねえ。まあ仕方ないでしょうが。』

俺はストーカー神さ『誰がですか!!』・・・なんかデジャビュ。まあ、いい。ツインテール神様のレノリアに問いかけた。

『博麗霊夢に霧雨魔理沙。こいつらは俺の世界のゲームの登場人物だ。決してリリカルなのはアニメの人物じゃねえ。これはエラーじゃないのか。俺への指令にかかわることじゃないのか??』

『うーん、全くもって正当なる疑問事項です。では私が説明可能

な範囲内で説明しましょう。まず、彼女二人の存在はエラーかどうか、ですがこれはYES、エラーです。間違いなくエラーです。次に貴方の指令に関わるのかですが、これはNOです。『何故だ？』
『……なぜならノレビア様より指令が無いからです。』むう、
『だがエラーなんだろう』。『そうです、エラーです。でも指令が無ければ貴方は特別な行動の必要はありません。指令が有るか無いか、これが全てです。』

言っている内容は非常に簡潔且つ単純だ。しかし、理解できん、納得いかん。

恐らく判断基準について俺に開示できないのか、レノリアが知らないのかだ。これ以上聞いてもこいつは話しそうには無い。

『……ち、じゃあ、いいよ。俺も特別視はしないようにするよ。』
『有難うございます。』

少々フラストレーションを溜めて、帰宅。OHANASHIのことを一瞬だけでも忘れられたことには感謝した。

・
・
・
帰宅後???
あああ、
なんにもおぼえてないなあ。

1・5話 赤白と白黒（後書き）

8 / 17 修正

1 - 6話 理解できぬ存在（前書き）

追記：『』が念話、『』が会話です。大体は。

1 - 6話 理解できぬ存在

デイン家 ¥ロビー (俺視点)

漸く母上様とのOHANASHIという名のしごきが終わったぜ。黙ってたのは悪いとは思うけど、360°四方からの途切れない射撃を2時間打たれ続けるっていうのは、かなり脳に負担がかかったわ。AUTOでも良かったんだが、いつ不具合出るか良く分からないうし、何よりすぐ終わると思って、マニュアルでスタートしたのが悪かったのかも。途中でAUTOに切り替えようとする余裕も無かったわ。でもあのしごきを乗り切れたってことはきつとこの先役に立つはずだ『ポジティブですね。』『ああ、そうとでも捕らえないとな。』

俺は色々考えつつレノリアと軽く会話しながら、今は両親と夕飯中だ。兄貴はもう学園の寮で暮らしているし、妹は自分の部屋にいるようだ。

母上様をチラ見すると明らかに機嫌がいい。OHANASHI中も俺が反射すればするほど機嫌が良くなっていたしな。で、ドンドン威力と数が増えるんだもんな、あれは間違いなくSだ。母親に向かってSとか言うのは甚だ遺憾なのが……。

それにしても珍しい。母さんはともかく、父さんまでこの時間帯に

帰ってくるってことはあまり無い。ていうか、俺の記憶の中では今日が初めてだ。いつも夜11時以降に帰ってくるのに、今の時間は7時半なのだ。・・・何か来るのか??? OHANASHI Ver. 2とか????

「・・・さて、ウォースよ。メリッサから聞いたがレアスキルを持っているようだな。」

キタ (。。() !!!!!!! 『結構余裕ですね。』常に冷静な俺に惚れたk 『はいはい。』ちっ。』

「それも練度は中々のものらしいな。私も見てみたいが、またの機会としよう。」

OHANASHIフラグ回避!!! ふふん、なんだ、驚かせやがって。

「そういえば、お前は赤ん坊のころから私たちの斜め上をいくよう

な行動ばかりしていたな。赤ん坊は泣くことが仕事だというのに、全く泣かず我慢をして、逆に心配させたり、かと思えば急に泣き出すようになったりとな。」

加速のせいですね、分かります。

「受験勉強に至っては、最終的には教師の回答速度を上回っていたそうだな。全く、彼はミッドでも最高峰の大学に在籍しているのに、本当にたまげた奴だ。」

確かに頭かきむしっていて、「そうこれは夢なんだ、夢だ夢だ、なんで5歳やそこらのガキに遅れをとらなければいけないんだ」とかブツクサ言っていたな。ああ、結構頭いい人だったんだ。まあどうでもいいけどな。

「そして今回はレアスキル。攻撃と防御に秀でているらしいな。少なくともメリッサの弾幕に耐えられるようならお前は大丈夫だな。」

・・・大丈夫??何が??母さんが特に特に得意な分野であるこの筆舌に尽くしがたい料理のことでs『ギロツ!!』・・・いやいやいや、何?俺の心の中ってシェアされてんの??

「今日私が帰ってきたのは、他でもない、重要な話が有るからだ。聡いお前なら感じていただろう。私とメリツサは、そうだなお前が生まれた辺りから頻発している事件、まあ局内では、理解できぬ存在事件と呼ばれているが、その担当をしている。理解できぬ存在とは言葉の通りだが、我々にとって理解できぬ存在であり、こいつらが引き起こしている問題の対策をするのが私たち理解できぬ存在対策室となっている。」

理解できぬ存在??これは間違いなくエラーのことだろう。やはり顕在化していたか。なのに指令無しとはな。ふ、舐めやがって。

「それで、だ。その理解できぬ存在事件は現在ミッドチルダ近郊ではここ数年の我々の働きにより大きな問題は片付けられた。そこで今後のミッドチルダ近郊の理解できぬ存在事件に関しては地上本部

にまかせ、対策室の面子は外の事件を解決することとなったのだ。所謂、長期出張に入ることとなる。ああ、ちなみにこの事件については関係者しか知らないこととなっている。なので、お前は関係者になることが決定したな。」

勝手に決定するな、とはいえんな。何しろエラー関連なんだもん。そうか、そうか、分かりました分かりましたよ。本来なら俺のやる仕事を、俺の気付かぬ間に親たちが一生懸命こなしてたつて訳ね。それで、ミッド内の問題ははあらかた片付いてしまっていたと俺の出番が無くなる程に。畜生、こりゃあ、ちっ！ホントにもう頭上がんねえじゃねえかよ。

「お前はまだ小さい。学園も来年入学の予定だったのだ。かといって何年かかるか分からん出張に連れて行くことは出来ん。・・セラスは仕方ないがな。しかし、今日お前は学園に入学を決め、レアスキルにより実力を示した。もうお前は、親が寄り添わなければならぬ段階ではないと判断し、保留していたこの件を承諾することにしたのだ。・・内心辻褄が合ったと喜ぶ私を許すな。幾ら優秀でもお前はまだ5歳なのだ。子供を見捨てて仕事を優先する親はどう言い繕うとも決して許されるわけではない。ただ、理解してくれとは言わんが、受け入れてく「いつてらっしやい、父さん、母さん。俺は大丈夫だ、だってあの母さんの射撃に耐えたんだぜ。もう何が来たって怖くないさ。・・安心して行って来てください。あーあ、セラスが羨ましいな、父さんと母さんとずっと一緒なんだろ。」

俺も付いて行こうかな、なんてな。「……………すまんな。」

あーあ、柄じゃねえ。ホントによう。俺がやるべきことを代わりにやってくれる人たちに向かって許すも糞もあるかよ。……………いつてらっしゃい、ちゃんと帰ってこいよ!!

デイン家¥両親の寝室 (親父視点)

「……………全くもって出来すぎた息子だ。これは何とんでも帰ってこなければいけなくなったな。」

「ええ、当然です。あの子の成長した姿を、この目に、入れないと、、、。。。」

俯くメリッサを胸に抱いてやる。背中を撫でてやるが私の手も震えていた。

何故だ、何故、あんなものが、この世に。。。

<約1ヶ月前>
管理局¥デオラン中将私室

「・・・これは、何かの冗談ですか??」

私はデオラン中将、理解できぬ存在対策室の組織上の上官である、
に呼び出され、説明の前にとある映像を見せられていた。それは他
次元惑星のパトロール隊がたまたま発見し撮影した映像であり、そ
れを見て私は言葉を漏らした。

惑星上には大型のグロテスクな生物がびっしりと覆い尽くされてい
た。

我々はいいつらとは顔なじみだが、この数は有り得なかった。そし
てこいつらはある一定数以上になると、他の星に巢の元のようなも
のを発射する。これは近隣の小さな惑星で確認できたものだ。当然
その惑星は破壊した。

だが、このサイズの惑星となると話は別だ。更に、この星には管理
局の駐屯部隊も多数存在しており、また現地人のレベルも比較的高
い星であったはずなのだ。それが、こんな、ことになる、とは
・・・。

「君らもよく良く知っている通り、こいつらは理解できぬ存在だ。^{アンソウン}言語を理解できず、目的を理解できず、なによりもその存在を理解できない存在であるこいつらが、この次元では我が物顔で蹂躪を繰り広げている。なぜか長距離通信を阻害されており、このような状況になるまで気付かなかったが、見て見ぬ振りは当然出来ん。この星を基点に周囲の星に巣を打ち出されていることも確認できたからだ。そして最悪なことに、その、発射された巣の軌道が次元を超えたことも確認できた。最早一刻の猶予も無い。至急対策室を中心に部隊を編成し、任務に取り掛かれ!!」

「……はっ」

^{アンソウン}理解できぬ存在。ウォースがその映像を見たのならば、再度絶句をするだろう。何しろそいつらは『Beings of the Extra Terrestrial which is Adversary of human race』、即ち、

BETAだったのだから。

部屋を出、改めて先ほどの内容に対し、強い衝撃と絶望を感じた。

こいつらが、次元を渡るだど??冗談じゃない……。確かにミッド近郊の星には巢らしきものの飛来を確認できたら打ち落とすようには通達が来ているが、これも確実ではない。次元を超えてくるなら、いきなり着弾の恐れもあるからだ。それに奴らはすさまじい勢いで進化をしていく。最初は魔法に対する耐性は無いように思われたが、今は違う。かなりの耐性を持つようになっていく。奴らの種類も増えているし、このままだと、宙を移動するタイプが出てくることを完全に否定は出来ないのだ。

ウォースが生まれて5年。私はミッド近郊に出現するこいつらを狩

りに狩りまくった。血を浴び、奴らの攻撃を受け、仲間の亡骸を踏み越えて……。

地獄だった。

だが、平和なクラナガンに帰ってくると、この人たちの笑顔を守らねばならないと強く感じ、自らを奮起した。理解できぬ存在アンノウンについては情報管制が引かれており、関係各所の人間しかその存在を知らない。もし一般人が関係してしまうと記憶操作をかけられることになる。漏れた人間が口外しようとも誰も耳を傾けはしない。我々には絶対的存在である管理局がついており、そんな敵など相手ではないと信じているからだ。

そう、だから、我々は……。

<ウオースの学園二次試験当日、18時>
管理局¥理解アンソウンできぬ存在対策室（親父視点）

緊張の面持ちで皆の前に立つ私の姿に、皆はある程度覚悟はしているだろう。これから命令する内容は死刑宣告であるのだと……。

「皆、この5年間、理解アンソウンできぬ存在という突然現れたお客さん相手に、よくここまで素晴らしい接客を行ってきたくれた。私はこの対策室の隊長として皆に感謝する。設立当時はたった4人だったこの対策室も、今では100人を超える大所帯となった。……最も、長期出張者が半分以上を占めるがな。」

私はそこでいったん切る。……ホントに、大所帯になったものだ。皆の笑顔が目を瞑れば頭の中を駆け巡ってきやがる。……ああ、もう、そんなに暴れるなよ、お前ら、全くもう……。

「……、えとすまん。湿っぽくなってしまったな。」

……だがな、皆の接客に不満を感じたお客さんたちはこのミッドチルダの近郊から殆ど引き上げてしまったようだ。これは皆の成果だ。おめでとう。

……そこで、だ、少し前に話したと思うが、第8管理世界から私たちの接客術を見込んで、是非とも向こうのお客さんの対応をして欲しいという依頼があった。何でも向こうの数はそれもうたいした数らしいので、かなり悲鳴を上げているようだ。恐らく私たちが加わってもシフトが回らない可能性もあるとのことだ。だからこの任務は特別賞与と賃金アップが約束されており、更にはバイトや正社員も増やしてもらえろというおまけつきだ。金のないやつは良かったな。

……では諸君!!!……本日1830から1週間有給休暇を与えろ!!!その後、この任務を果たしたいものは、この部屋に0900に集合せよ!!!そうでないものは私の携帯にメールを入れとけ、別の部署に絶対入れ込んでやる。

以上!!!解散!!!!!!」

<ウォースの学園二次試験当日から1週間>
管理局¥理解アンノウンできぬ存在対策室（親父視点）

副隊長のメリッサが私に任務参加者の報告をしにきた。

その姿は結婚前に比べてかなり洗練されたものになっていた。目つきも変わった。良い意味でこの5年で成長したようだ。結婚前は戦場では物怖じをする可愛い少女だったのだが・・・。
まあ、良い。今では私の背中を守る優秀なパートナーなのだからな。

「ウルザ部隊、登録人員128名。内、長期出張者70名。残、58名全員がこの任務の受領、ここに確定いたしました！」

・ ・ ・ 全く、 、 全くもって ・ ・ ・ 。 ・ ・ ・ 良いだろう、 私たち
はこの任務を達成し、 必ず、 必ずこの平和なミッドチルダに戻って
くる!!

それまで待っている、 ウォース。

1 - 6 話 理解できぬ存在（後書き）

8 / 17 修正

1・7話 神という存在（前書き）

追記：『』が念話、「」が会話です。大体は。

1 - 7話 神という存在

神界¥ノレービア神の屋敷¥ノレービア神の間（俺視点）

俺の目の前にはノレ様とその御付らしき方々がずらり。俺に視線を投げまくっています。

ナンカデジャビューナンデスガ???

……いやいやいや、こつこつ状況を望んでいたんじゃないか！俺は……。

デイン家¥ウォース私室 (俺視点)

『おい、レノリア、ノレ様と話がしたい。至急にだ。』

『貴方はいつでも唐突ですね。．．ええっと、ノレービア様によ、て、い、を見ると．．．、はい分かりました、面談可能な日程は48日と8時k』至急だつて言ってるだろうが！』．．．いえいえ、ウォース、貴方の気持ちも分かりますが、ノレービア様にも予定があるんですよ。貴方はしっかり認識していないようですが、ノレービア様は神界でも上位から10指に入る位の方です。そうそう会うことなどは出来ません。』

『いや、分かってる、分かってるんだが．．．。』

そう、以前にノレ様は、会社でいうと役員クラスであると言っていた。だからかなり偉いのだろうという事は理解していた。また、ノレ様だけでなく、このレノリアも神であるだけでなく、神界では課長クラスらしいので、こいつも結構偉い奴なんだろう。そうはあまり思えないが。

『でもな、レノリア。・・・父さんと母さんは、俺の、俺の作ってしまったエラーと戦っているんだよ。あとあの雰囲気だ、恐らくは今回の出張、かなり厳しいことになると思う。・・・命に関わるようなだ。・・・だから、だから、。畜生が!!!!。・・・どうして俺に指令は来ないんだよ!!!俺がやることだろ!!!!。・・・なんだけだよ、どうして・・・』ウォース・・・・。分かりました。私の出来る範囲内で頑張ってみます。このレノリアに任せてください!!!』すまんレノリア、頼む・・・・』 『はい。』

神話話では顔は見えないが、それでもレノリアの真剣な表情は伝わってきた。ホントすまん、レノリア。これからはもう少しだけ敬ってやるよ。

神界¥ノレービア神の屋敷¥ノレービア神の間（俺視点）

そして冒頭に戻る。

いやあ、レノリア頑張ったんだなあ。・・・まさか、・・・まさか
意気込んでから5分も経たないうちにノレ様の前に精神体でいるこ
とになるとは思わなかったわ。・・・やっぱ結構偉い奴なんでは・
。

「・・・さて、緊急且つ至急且つ速やかに報告せねばこの世界存続
の危機である事項について、とレノリアからは意見書があったのだ
けれども、ウォース君、・・・何があつたのかしら??」

・・・あの野郎、後で絞める!!

「・・・私の名前は山田太郎、式を乱した張本人であります。現在はトレイル・ディン・ウースと名乗り、とある世界でノレービア様に頂いた能力を引っさげ、式の乱れによる問題解決の指令を待つております。」

「貴様、さつさと用件に入」「待ちなさい、もう少しでしょう」
・・・はっ!」

取り巻きの中でもが体のかい奴が止めに来たが、ノレ様が遮ってくれた。・・・サンキュー。

「・・・ありがとございます。昨日、私は両親より5年前、私が式を乱した頃より頻出している問題の対応に追われているとの話を聞きました。そして今後は自らの命をかけてその件に当たるという内容を聞きました。」

・・・このくらいの脚色はいいだろ。

「これは明らかに、式の乱れによるものです！！そして、その式の乱れは私に対応するのではないのですか？・・・私は何のためにこの能力を頂き、あの世界で生きているのですか？・・・私は、・・・私のせいで死んでいく人たちの背中を見たくはありません！！！！・・・どうか、どうか私に指令を、・・・与えてください・・・」

「・・・話は分かりました。まずはノレリアの虚偽報告が判明しましたので、彼女には第2級罰を与えます。」「・・・えっ、、ちょっとまって」あと貴方の質問については現在の優先度が低いので、しかるべき際に回答します。「ちょ、・・・ちょ」それでは次の案件

です」

「ちょっと待てや」「この場をどこのどこのと思っているー!」「!?!?!」

キレかけた俺を、今まで聞いたことの無いような声でノレ様が遮る。

「……貴方は神と争うためにここに来たのではないでしょう。先ほどの言は無かったこととします。下がちなさい。」

「くっ!!.....は.....い。」

デイン家¥ウォース私室（ウォース視点）

.....俺は馬鹿だ。

「分かってくれたのなら許します!!」

「……え???. . . . ああ???.??.?」

何故だか幻聴が、、、、、あと、、、、姿まで見えるし……

「あはははは、何ですか、そのうめき声は???. . . ああー、ああー、涙流してしまつて、もう。 . . . 大丈夫ですか??」

「. . . . お、お前、何で?、2級罰は??」

「. . . . あと、神念話じゃない. . . ?!」

「第2級罰、・・・それは神格の撤廃です。要するに、神様じゃなくなつたわけですね。ああ、ちなみに私は神力が高かつたので、受肉し、また人生を歩めることになりました！」

「・・・なんだ、こいつは、・・・珍しく俺が心配してやつたと思えば、満面の笑みで登場しやがって、畜生!!!」

「・・・あああもおおお、俺の貴重な涙返しやがれ!!!」「いやいやいや、2級罰って大変なことなんですy『ガバツ!!!』、つて、ちよ、まつ、入ってます入ってm、ぎぶぎぶぎぶg・・・」

< 5分後 >

「……ふうふううう、酷い目にありました「当然じゃ馬鹿」……
ううう、酷いですう。」

「……ああ、マジでよかった。こいつがいなくなったらどうしようかと思っただぜ。なんだかんだで長いこと一緒にいるからな。全く心配かけさせやがって、……。もう一遍絞めとくk」止めてください、次やったら泣きますよ!!」……。なんちゅーか、まあ止めとくか……。

それにしても……。

「よくもまあ、人間になれたな。……つか、神様になる前って人間だったんか??」『また人生』とか言ってたし。」

「あー、そういえばその辺りの説明はしたこと無かったですね。

神様っていうのは信仰対象なので、勿論人だけではなく動物・自然・

概念などがあります。私は人間ですね。ノレービア様は概念です。

そして神様の格を決めるのは神力です。生物が死んだ際に、その生物の精神体が最も信仰している対象に集まり、これを神は吸収し、神力とします。だから多くの信仰を集める存在が格の高い神になることが出来ます。また、同じ命でも精神体の質というものがあり、高度な知性を持つ生物の精神体は大きな神力に変換されます。これは想いの強さと知性の高さが相関関係にあるからと考えられています。

また、神によつては集まつてきた精神体を神力とはせず、逆に神力を与えて新たな神を作る場合があります。これはその精神体に向けて信仰が大きいと判断した際に行われることであり、自らの下位神を充実させることで総合的に上位神である自分の神力を上げるといふ例も有ります。要するに信仰の対称にもトレンドがあるのでそれに対応をしましょう、ということですね。

あと極々稀に、神から神力を貰わずに神となる精神体があります。これはよくは分かつてはないのですが、生前に多くの信仰を集め、その信者の精神体を体内に蓄積させ、自らの精神体を神のレベルにまで昇華させたという説が有力です。まあ、説ですし、稀なのであまり根拠は無いですが。

あ、あと神力ですが、これは神様のエネルギーです。基本的に願いの大きさに相当する神力を消費すれば何でも出来ます。山田太郎の精神体をウォースに入れ込んだのも、一步通行の能力を付加させたのも神力によるものです。」

「ふーん。じゃあ、神になるためには、？既存神に認めてもらう、？生前で信仰をものごつつ集める、という手段しかないのか？」

「まあ基本はそうですね、これ以外は私は知りません。ちなみに私は前者です。あと引き上げていただいたのはノレービア様です。・なの、今回はこのようなことになってしまい、ホント、申し訳ないです。・・・が、後悔はしていません！！」「レノリア。・・・」
「。・・・なんて顔をしているのですか？正直私も神様生活に飽きてきたので丁度良かった」

『へー、そうなの？？丁度良かったの？？すみませんでしたねえ、神様にしてしまっ！』

・・・あちゃあ、ここでノレ様登場かよ。レノリアも運無いなあ。

『あつ、えつあ、ち、ちがいますよ、これは言葉のあや、そう、そうです！！言葉のあやって奴ですよー、信じてくださいー
ー。』

『・・・ふふふふ。大丈夫。そんなに慌てなくても分かっているわ。・・・でも今回の一件は貴方にしては手段が粗かったわね。もっとスマートに出来なかったのかしら。・・・それとも今の状況になることまで予測しての行動？」「えつ、ち、ちがいm」ふふふ、冗談よ。』

完全に遊ばれているなあ、レノリア、見ていて飽きん。

『・・・ふー、レノリアで遊ぶのもこの辺で止めときましよう
「酷いです!!」ならもう少しやる?』すみません』・・・ふふ。
・・・さて、ウォース君、さっきはごめんなさいね。ああいう公式の
場では流石の私も立場的にいい加減なことは出来ないの。レノリア
もそこら辺よく知っていると思っていたのにこんなことになるなん
て『あぁうう』・・・まあ、過ぎたことを蒸し返してもしょうがない
から、早速本題に入るわよ。』

・・・っ!?!?・・・そう!!俺は質問をぶつけに行ったのだ。レノリ
アの件で忘れていたけど。

『えっと、何故貴方をエラーにぶつけないかという質問だったわね。
・・・うーん、これは見てもらったほうが速いわね。・・・えー
っよ、ううね、はいっよ。』

『!!!!???'』

ノレ様の神力によるものだろう、俺達（俺＋ノレ様＋レノリア）の精神体は知らないところにワープした。

『ちなみに立体映像よ。移動する方が力使っちゃうからね。』

・・・恐らくは以前特訓に使った部屋みたいなところに立体映像を撮影しているのだろう。

・・・ん????地響き!????いや、これは、何か大型生物が来る……………!!!!!!

あ！、・・・あれ、・・・は???!!

『そう、あれは貴方の世界のゲームに出てくる、人類の敵、『Beings of the Extra Terrestrial Origin which is Adversary of human race』だつたわよね、確か、・・・まあ略してBETA、・・・この世界の大型エラーよ。』

『・・・これが、エラー。なんてグロテスクな・・・。そしてこの数！・・・各個人の戦闘能力も侮れないレベルです。高い魔力を持っています・・・』えっ!??ま、りよ、く??』『そうよ。ウォース君の知っているBETAはそんなもの持つてないと思うけど、この世界には魔法があるわ。思い出して御覧なさい、BETAの特性を。奴らは飲み込んだ情報を吸収解析し、自らに反映させてるのよ』『そうだ!』・・・今では奴らは次元跳躍能力まで会得しているわ。・・・でもエネルギーの関係上、使用しているのは巢の排出時だけみたいだけどね。』

驚きの事実を確認し、俺たちは元の俺の部屋に戻る。・・・まさ

かBETAが敵で、魔法を使えるとは……。

『さて、貴方の問いに戻るわ。何故貴方に指令を出さなかったのか、
……もう分かるでしょう、貴方は現時点では奴らと戦っても大した戦功を残さず死んでしまうからよ。』

『……………』

……ノレ様の言うとおりだ。今の俺では間違いなくやられる。
……そう間違いなく。

『ショックを受けているようね。……でも貴方では無理だけど、
貴方の両親なら戦える。本来、トレイル・ディン・ウォースは知能
障害を抱えていて、あの二人の足かせとなる運命だったのよ。そこ

に貴方の精神体を組み込むことで、彼らの戦功は著しい伸びが見られたわ。貴方は知らずの内に、エラーの対策をしていたのよ。』

『……でも、……それはノレ様がやったこと、俺は、……何もしていない』なら、今やることは分かるでしょう。』?!』……戦える、……いや、……奴らを殲滅できる力を手に入れなさい。そして、両親を含め今戦っている人たちを救いなさい。それが貴方の役目で、私からの指令です!』

……そう、俺はこんなところでぐだぐだ言ってるって良い人間ではないのだ!

この世界を守るためにここにいるんだ。

今が無理なら明日できればいい!!明日が無理なら明後日出来ればいい!!

一番やってはいけないことは無理だといって諦めることだ!!

確かに敵は強く、多い。一刻一秒で多くの命が削られていつているのだろう。

しかし、助けられるのは俺しかない！！

ノレ様達は他の案件があるのだろう。

そう、だから俺がここにいるのだ！！

なら、確実に殲滅できるだけの能力を手に入れ、俺が助ける！！俺が救う！！

その為には……。

『分かりました、ノレ様。俺は何にもわかっていなかった。今やるべきことは、無謀な勇気を振りかざすことではなく、力を、経験を、能力を、……奴らを倒す絶対的な何かを身につけることだ！！』

「・・・説明不足だったことは詫びるわ。しかし私は貴方に重圧をかけたくなかった。きっと貴方はこのことを知れば自分を苛め抜くでしょう。それを私は阻止したかったのよ。・・・ただ、今は貴方の傍にはレノリアがいます。レノリアは非常に優秀なパートナーとなり、また貴方の無茶を止めてくれるでしょう。貴方達なら必ずやこの苦境も乗り越えたと信じているわ。・・・レノリア、・・・今まで有り難う。・・・私は貴方を下位神と出来て本当に幸せでした。」

「・・・ノレービア様、・・・私、わたしは・・・」貴方はウオース君と一緒に頑張りなさい。私も今までのように貴方達のことについて目をかけることは出来なくなってしまうわ。貴方達だけでやるのです。・・・でも、しんどい政務の間にまた話しかけるからその時は相手してね。じゃあね。」

「・・・へっ、なんだよ、言いたいことだけ言って帰りやがって・・・。」

最初あったときは何だこいつはとか思ったけど、ふん、流石は役員様、よく考えてやがるわ、全く。

「……さて、……いつまでもうじうじしてられません！私にはノレービア様から貴方のパートナーを仰せつかりました。なので、これからは共に行動をいたします！まずは学園ですね。……これはわたしの力でちょちょいっとすれば何とかなるのでまずはOKです！！」

「……って、学園までついてくんのかよ！！、何だよ」ちよちよ
いっ『って、おい、お前、答える！！！！』

うー!!
・ ・ ・ 騒がしいお供が出来ちゃったが、ま、頑張るしかないでしょ

1 - 7話 神という存在（後書き）

神の記述はオリジナル設定です。
なんか上手いことまとまったと思ったので載せてみた。後悔はして
いない。

8 / 17 修正

1 - 8話 親心(前書き)

p v 4 0 , 0 0 0、ユニーク4 , 0 0 0突破です。

こんなしょうもない文を読んでいただき、感謝&感謝!!

追記：『』が念話、『』が会話です。大体は。

1 - 8 話 親心

<入学式前日>

魔法学園（俺視点）

あれから、少しどたばたがあった。

レノリアが『ちよいちよい』を行うためだろう、部屋を飛び出した直後、うちの母上様とぶつかり、一騒動。

ただ、レノリアの幻影魔法で乗り切り、何故か俺の幼馴染ということになってしまった。・・・というかいつの間にか俺より少し小さいくらいに背が縮んだんだよ。

あとうちの母さんを騙せるって、かなりの腕前だよな！・・・まあ元は神様だし、・・・今度能力を聞いとくか。

それにしても、レノリアの奴、幻影が上手くいつているから、調子にのりやがって。母さん達の出発前のあれは何なんだよ・・・。

<両親出張出発日>

デイン家¥玄関（俺視点）

出発前の見送りのため玄関に来ている、幼馴染：レノリアという設定・・・らしい。実際は俺の部屋に勝手に作ったようわからんスペースから俺と一緒に出てきた。元神様、なんでもありだな・・・。

ちなみに近所の人たちにはあまり触れ回ってはいない。これも情報管制の一環なのだろう。

「ウォース君は私に任せてください！！メリッサ様はどーんと安心してお仕事頑張ってきてくださいね。」

なにが、ウォース君だ。あとお前に任せるようなことは何も無い。

「ありがとうございますレノリアちゃん。良かったわねえ、ウォー
ス。こんなに可愛い幼馴染がいて。ただ私がないからって、レノ
リアちゃんに甘えてはだめですからね。ちゃんと貴方は……、
いや、貴方なら大丈夫ですね。……レノリアちゃんウォースを宜
しくね。」「……はい。」

……ふうー、……なんだかなあ……。

<入学式前日>

魔法学園¥男子学生寮前（俺視点）

あの後俺はさらっと両親と言葉を交わし、二人は局に向かったんだ
よな。なんて言うか、あっさりしてた。もっと涙涙になるかと思っ
たが、案外皆冷静だったのかな。

……いや、違っただろ。

少なくともあの親父の言葉通りなら……。

<両親出張出発前日夜>

デイン家¥ウルザ私室（俺視点）

「なんだ、珍しいな。俺に話って何？明日からのことか？」

俺は夕食の際、親父から部屋に来说いと言われていた。俺はそれに従い、夕食後1時間後に親父の部屋をノックした。

親父の返事があり部屋に入った。親父の部屋はあまり入ることは無いが、それでも何時もきれいに整頓されている記憶しかなかった。それは出張前の今日も変わらず、少し本が机の上に積み重ねられている程度だった。本は恐らくだがアルバムのようなようだった。そのうちの一冊を広げながら親父は珍しく酒を飲んでいた。

「・・・おお、来たか。・・・まあ、ここへ座れ。」

親父は俺に自分の隣を指差した。親父の机は執務室にあるようなしつかりした机なので二人の体が収まるサイズはあるがそこには椅子が無かったので、部屋の隅にあった椅子を転がせてもって行き、横に座った。

親父が眺めていた本はやはりアルバムだった。それも俺と兄貴のものが多いように感じた。

「・・・はっはっは、どうだ、懐かしいだろう、これはお前達がまだ2歳と4歳の頃の写真だ。といってもお前は覚えていないかもしれないがな。これはなあ、珍しく私とメリッサが同じ日に休みをとれたから、テーマパークに行ったときの物だ。俺はすっかり覚えてるぞ！なんたって、このアルバムは全てそのときのものだからな！！はっはっはっは！」

・・・加速のときだから鮮明ではないけど、よく覚えてるさ・・・。

親父馬鹿みたいに写真取るんだもんな。確かに、仕事が趣味の親父としては珍しく打ち込んでいるものだから仕方は無いとは思っけど、あれはやりすぎだろ。母さんも途中は止めようとしていたけど、最後はあきれて放置してたなあ。

・・そして、まあこの頃位からかな。・・・親父達が休みを取れなくなってきたのは・・・。

「はっはっは、そしてこれはお前達がジェットコースターに乗った後の写真だ。乗っているところのものもあるぞ、30枚くらいな。お前らときたら、ゼノンは泣き叫ぶのに、お前はけるっとしてるんだものな。どちらが兄か分からん、・・・ん、どうした、ウォース?・・・黙り込んで。つまらんか?自分の昔の写真を見るのは??・・・まあそうだろうな。しかも一緒に見ているのが酒臭い父親だからな。まあ、仕方ないk「いや、違うよ。・・・懐かしくてな、・・・そう懐かしくて・・・」・・・そうか。」

分かってるさ、俺も脳内は餓鬼じゃない。分かってる、この後あまりよくない話があるから、親父が場を和ませようとしているってことは。・・・でも!、・・・でもな!・・・畜生、・・・体に精神が引っ張られてんのかな、・・・堪えがきかない・・・。

『シュツ……プハー……』

親父がアルバムを置き、タバコに火をつけ、吸い込み、吐いた。俺はその動作をぼんやりと見ていた。そういえば、これまであまり親父の姿を見ていなかったな、と今更になって気づいた。

「……さて、ウォース。……お前は本当に私達の自慢できる息子だ。勿論、ゼノンもそうだ。お前達は本当に良くできすぎた。……ゼノンもな、……昨日、食事をしたのだが、話の先を感じ取り今のお前のように暗くなりおった。全く、お前らときたら、少しはこう、親父の思うとおり踊ってみてくれてもいいんじゃないか？……まあ、俺がへたくそなんだろうな。……ふふふ。」

「……ああ、下手糞だな。……それもとびつきりだ。口が笑っていても、目が……はじめて見る様な優しい目をしてるんだよ……。」

「まあ、議題は言うまでもないが、今回の出張のことだ。お前には先週話したが、私達は別管理世界まで狩を行ってくる。・・別にいらんのだがな、かなり大勢で出迎えてくれるらしいから、少し時間がかかるやもしれん。・・・年単位でな。」

そこで親父は一旦切り、煙を吸う。

・・・吐き出した息には、煙と、微かなため息が混ざっているように感じた。

「お前は先週の食卓での話しの最後に、セラスの話題を出したな。・
・セラスは今回の出張に連れて行く。これはもう決定事項だ。・
・まあ。お前は納得いってないのじゃないかと思ってな、今日ここに呼んだのだ。」

そう、セラスは今回の親父達の出張についていく。まだ2歳で母親と離れたくはない年ではあるだろうが、今回の出張は危険だ。会った記憶はないが爺さんもこの星にいるらしいので、そこに預けるなどしたほうが良いだろう。俺もそこは少し気になっていた。・・・

親父は俺が駄々こねているとでも取ったのかもしれないが……。

「勿論、危険だということは承知している。命に関わることが起こるかもしれない。……だが、これはメリッサが、お前の母親が強く望んだのだ。……全てのリスクを理解してな。」

ん????あの母上様である母さんが?公明正大、常に規範を尊び、仕事と私事をきちつと分ける、あの母さんが、・セラスを・???

「ふっふっふ、驚いているようだな。それも仕方ない。あいつはお前らの前では厳しい母親を上手く演じているからな、流石のお前でも気づかんだろう。……メリッサはな、お前達を、それはもう言い表せん程愛しているんだよ。普段は顔には出でないがな、あのスキルは大したもんだよ。……まあ、その愛ゆえに、まっすぐ育てほしいという感情を抑えれず、お前達には厳しくあたっているんだよ。……決して最近問題になっている虐待ではないんだということとは理解してやってほしい。」

・・・正直半々のような気が・・・。

「それでだ、今回の出張に際し、メリッサは子供3人全てを連れて行くと俺に進言してきた。・・・あいつはお前らと離れられないのだよ。・・・思い出してみろ、俺とメリッサは同じ部隊なのに、あいつだけが早く帰宅していただろう。仕事量はあまり変わらないのにだ。何故だと思う？それだけ傍にいたいと強く思っているからだ。」

確かに、・・・親父に比べて母さんのほうが俺達と接する時間は圧倒的に多かったな・・・。

「あいつはな、元々デイン家の人間ではない。俺と結婚することでデインの名を得た人間だ。お前はあまり気づいてはいないようだが、デイン家というのはな、代々優秀な魔導師を排出しており、管理局、いや、ミッドチルダ内ではかなりの名家なのだ。そこに名前も聞いたことの無いような人間が嫁いできた、となったら周囲の圧力はどれほどのものだったのか。これは傍にいた俺にも正確にはわからない。」

確かに、今回の出張は世界の危機でありそのリーダーが親父らしいから、デインの名は知らんが、少なくとも親父への期待は高いのだろつ。

「また、今と違い嫁いできたときのメリッサは、悪い意味で少女過ぎた。俺からすると可憐なメリッサはすばらしかったがな。ただ、それではデインとしては問題があった。更にその頃から俺とあいつは理解できぬ存在事件を担当するようになり、心労も倍増し、もう局を止め静かに暮らそうかと本気で考え始めたときだ。・・・ゼノンが生まれた。」

兄貴か・・・。

「俺はゼノンがある程度大きくなったら局を辞める決心をしていた。それをゼノンが生まれて半年後程にメリッサに伝えたのだ。すると・・・、『ウルザさんは何を言っているのですか！私達のような力のある人間が管理局を止めると、どれだけの人たちが危機に瀕して

しまつと思つているのですか！私は確かに折れそうな時期がありました、もうだめだと思つた時期もありました。でも！ゼノンを生んで、まだ半年ですが分かつたんです！・・・私はこの子を守りたい、・・・そして、この子が安全に暮らせる世界を作りたい！・・・ごめんなさい、ウルザさん。私は管理局は止められません。』・・・だだよ。・・・ははは、俺は脱帽したよ。・・・まさしく母は強し、つて奴だな。・・・」

母さん・・・ふっ、なんだよ、・・・かわいらしい時期もあつたんじゃなかよ。

「その後のメリッサは人が変わったかのように働いた。昔の少女の面影は強い意思で仮面の下に隠しながら。そして、お前とセラスを生んだ。家庭のこともしつかりやった。・・・無理をしているようにだが、お前達の傍にいたために仕事をこなし、仕事をこなすためにお前達から気力を貰っている、とか話していたから、上手いことやっていたんだろうな。逆に仕事ができなくなるとお前達への依存も深くなる傾向が見られたが、それは見過ごした。特に悪いとは思わなかったからだ。・・・そして今回の出張に話は戻る。・・・長期の過酷な任務だ。メリッサには最早、お前ら抜きでは耐えられないのだろう。あいつは涙まじりで俺に進言してきたのだ。」

……俺には何もいうことが出来ない……。

「俺は当然反対した。当たり前だ。戦場に子供を連れて行く親があるか。……だが、そう言い放った俺は、5年前、絶望のどん底にいた頃のメリッサをそこに見てしまった。……そこで俺はようやく理解した。……こいつは、変わったかと思っていたが、實質何も変わっていなかったのだ。……ただ、……ただ自分の子供の影で怯えている、少女に過ぎなかったのだと……。」

俺はうつむくことしか出来ない。……少なくとも母さんの仕事の一端は確実に俺が原因なのだから。……今だけは、今だけは……。

「正直メリッサほどではないが俺も動揺していた。しかし、近日に今回の作戦の概要を決定する必要があった。その際、メリッサは必ず必要だ。そこで俺は条件を出した。『ゼノンはずでに学園に通っているので引き抜くことは出来ない、同行を認めない。？ウオースは今月末の試験で合格すれば、ゼノンと同じ条件となるので、

同行を認めない。？セラスは年齢を考慮し、同行を認める。ただ、世話は全てメリッサが行い、仕事に支障を出さないこと。』・・・この言にメリッサは頷いた。あいつも5年前のままではないのだ。自分のポジションは理解している。・・・あとは特別なことは無いお前は合格し同行は無くなった。・・・以上がセラスだけを連れて行く原因だ。・・・内容的に5歳のお前に話すことじゃないけどな。・・・俺はもう、理解の相違だけはしたくないんだ。」

・・・ああ、サンキュー親父。俺もすっかりしたさ。・・・まあ俺はガキじゃねえからいつまでもうじうじは言わないがな。・・・でも有難うよ。・・・ん??

「の割には、試験後に俺のレアスキルが見つかったとき生き生きしていたぜ。出来れば落ちてほしかったんじゃないのか?？」

特訓のときも、時間が経てば経つほどニヤニヤしていたしな。普通そこはいちやもんつけられなくなるからテンション下がるだろ。

「……ほう、……メリッサがそんな態度をしたのか。……
ははは、……あいつも少しずつ成長してるのだな。「ん？何でだ
??」はははは、親が子供の成長を喜ばずして何が親だ。」

……あーあ、勝てねえわ……。

「……いいかかげん俺の話を聞け……!!!!!!
!!!!」

「う、うわっ！！」

やべえ、長時間妄想に浸ってたみたいだ。．．．それにしてもこいつは何だ、いきなり大声出しやがってって、．．．って、またかよ。

「はあああああ、ようやくこっちに戻ってきやがったか。暗い顔しながら考え込みやがって！男子たるもの、この明るいおてんとさんの下で喜怒哀楽はいいけどよ、『暗』なんて表情見せるんじゃないわえ！！」

．．．はああ、アニメ同様暑苦しい。

「おいっ！お前！！ちゃんと聞いているのか、こらっ！」お前は誰だ？

一応聞いてやるう、解はもうわかっているが．．．。

「ほう、俺様の名前を知りたいのか?!...ならば教えてやろう
!!北のはずれのジ―八村、そこで生受け育った大魔導師!!未来
は大英雄かそれまた世界征服か!!...そう、人呼んで、紅蓮の
魔導師力ミナ様とは俺のことだ!!!!」

『紅蓮』、...通りで暑さ150%増しだ...。

1 - 8話 親心（後書き）

はい、カミナ様が同居人です。

8 / 17 修正

1 - 9 話 流星軍（前書き）

総合評価の推移をチエックするのが楽しくなってきたとれです。

皆様方お気に登録&採点ほんつとにありがとうございます!!

なんつーか、執筆（そんな大したもんじゃない）意欲に繋がります。

ではそろそろ主人公を動かそうかと意気込んで書き始める9話でございます。

1 - 9 話 流星軍

<入学式1週間後>

学園¥魔法実技室（俺視点）

学園は楽しい。

いままで碌に友人というものを作ってこなかった俺が悪いのだが、友人と過ごす生活というものは中々に良い。

これまでは、同年代とのあまりの精神年齢の差に嫌気がさしていたが、今のグループは違つとはつきり断言できる。ちなみに面子は、レノリア・カミナ・霊夢・魔理沙と俺だ。

カミナが名乗りを上げた時に、相部屋となつたレナ麗魔理の3人とたまたま合流をして、いつの間にか打ち解け、そのまま一緒に行動することになっていた。

何故かこいつらは（レノリアは除く、・・・まあ当然だな）精神年齢がやたらと高い。これもエラーのせいなのだろうか。

俺は更なるエラーの探索を試みたが、他には見当たらなかった。恐らくは俺の出生時期が関与するのだろう。こいつら3人は俺より

も誕生日が遅かったのだ。当然他にもこの条件に該当する奴はいる
と思ったが、生憎俺らの年齢でこの学園に合格できるようなスペッ
クの奴は早々いるわけではないようだ。同時期入学の奴らは全員俺
らより年上だった。

まあ、そんな理由もあり俺らが固まることはある意味必然であつた
のかもしれない・・・。

あと・・・。

「マスタースパーク
極大射撃!!!」

「逃げ得ぬ束縛!!!」

「ゴットフィンガー
灼熱五指!!!」

「ファンタズマゴリア
幻想世界」

・・・こいつらやりすぎ&強すぎ&目立ちすぎ!!

頭一つとか言うレベルじゃねえ・・・。桁違いだ・・・。技の絶対値だけなら既に実践可能レベルだろ、多分。

・・・ほらほら、先生驚きすぎて固まってるじゃんよ。ちょっとはこつ、・・・なあ。やり方っていうもんがあるだろ。・・・あと常識? 順番? 優美さ? そして何よりも!! (ry

・・・んーえっと、・・・ごほん、・・・解説コーナー！！
はい、突っ込み禁止

まず、魔理沙の極大射撃だ。マスタースパークこれは収束時間無し放出で一期なのは
のSLBクラスは有るように見える。

・・・うん、有り得ねえ。

魔理沙は今、2つのデバイスを使っている。箒型と八卦炉だ。前者
を通常的に使用しているようだが、極大射撃の時だけは八卦炉を使
う。元々霧雨家は八卦炉を代々受け継いで使っており、射撃魔法と
しては霧雨家もデイン程ではないが有名らしい。・・・これは後で
調べて知った。

ただ、魔理沙は霧雨家でも特に優秀らしく、この年齢としては過去
に例がない程の射撃威力を誇ることだ。その才を認められ、代
々家長が所持する八卦炉を渡されているらしい。・・・要するに、
才ある家系で更に飛び抜けている奴が魔理沙なのだ。・・・普段は
馬鹿そうなんだが・・・。

次に、靈夢の逃れ得ぬ束縛だ。これもマスパに劣らない程のえぐさがある。

これは対象を指定して起動すると、対象の周りに多数の魔法陣が展開し、取り囲む。もうこの時点で回避は絶望的で、解除による脱出か術者への攻撃しか逃れる方法は無い。だが、この展開は無詠唱。すぐにこの絶望的な段階にまで駒を進められ、詠唱により四方八方から強力なバインドがかかる。かかった後の解除は常識的な手段では不可能であり、その理由がこのバインドはレアスキルが関係しており、純粋な魔法だけではないからだ。

・・・そう、一人なら完全に封じ込めてしまう能力がこの逃れ得ぬ束縛なのだ。

ただ弱点はあり、この術式を使用している間は他の中規模以上の魔法の行使は出来ない。これは以後に分かったことなのだが、普通はそんなこと気づかない。靈夢は頭がよく、そこら辺は上手いこと隠してしまうからだ。

ちなみに魔理沙同様、博麗家も優秀な家系であり、靈夢は秀でた魔導師らしい。魔理沙と靈夢は家同士の付き合いがあり、物心付いたときからの幼馴染らしく、この二人のペアの息は気持ち悪いほどあっている。

あと、規格外男、カミナの灼熱五指だ。ゴットフィンガー

これは奴専用デバイス、なんでも師匠(?)に貰ったとからしいが、グローブ型で右手にはめている。左手にもグローブ型デバイスを装着しているがこの技は発動出来ないらしい。まあ汎用デバイスだ。

とにかくこの技は右手専用で、詠唱と同時に発動し、右手を上半身サイズほどの手の形の赤い魔力(?)が覆う。紅蓮式式のクローのでかい奴だと思ってくれていい。

これが、馬鹿でかい手が、なんと、馬鹿馬鹿しい事に、魔法を溶かしてしまう。そして取り込む。その一部が加速魔法に使用され、なんだか有り得ない突破力を示す。

地味に攻めてよし、守ってよしの技で、カミナがこんな考えられたシステムを使用していることに納得がいかない。せめて吸収が無ければ許せるのだが……。

ちなみにカミナは特別な家系ではなく、奇跡的な確立で才能を得た奴らしい。残念なことに……。

最後がレノリアだ。こいつは元神だし、何でも出来るだろうから説明はb「私にも自慢できる機会を与えてくださいよー!!」……
・まあ、たまに世話になるから特別に説明をす「有難うございませー!ウォース(はーと)……うわぁ、はーとうぜっ……えー

「」。

まあ、うざいが技は凄いので説明する。奴の幻想世界はまず何より目立つのが、魔法陣が糞でかい。直径50メートルはある。

そしてその陣内にいる人間全てにレノリアが指定したテーマ一つについての幻想を与える。例えば「大切な人が死んだ」とかのテーマなら大体が意思消失するだろう。・・・趣味悪い技だ。

大体、幻想とかせこいんだよ。魔導師ならどーん、ぼかーん、うぎやー、つてのが正道だろ。そう意味では魔理沙はOKだな。うん、レノリア性悪d「そんなこと言うh」更にうざいわ「ひーん」泣いとけ。

と、まあ、こいつら化け物でFA。そしてまだ5歳だから伸び白たつぷりときたもんだ！！いえーい！！主人公変わってみる???

「……はぁー、なんなんだ、今年は……。全く、これ終わったら賃金アップしてもらわなきゃやってらんねえぞ。……はい、次は……。おっ、ウルザ先輩の息子さんか。……へえー！ー兄と同様優秀なんだろうなあ。……まあ、4人も5人も同じか……。」

「……ん？、次俺だよな……。？、なんだ先生、表情基本駄目な方でころころ変わってるわ。ついにシヨックでやられt「聞こえてるぞ、はいトレイル」 Dein「ウォース、お前の力を見せてみる。「ういーっす。」

「うーーーーっす。」

何時も通りの覇気の無い返事。あいつは何時も目の前のことに対してやる気っていうか、向かっていく姿勢自体見受けられないのよね。今の返事もそう。あいつを知らない人から見たらきつと碌な人間に映らないはずね。

「……でも私は知っているわ。……あいつがそこらの馬鹿とは違うってことを……。」

「……ふふふ、何故かしら、あいつとはまだ会って2週間くらいか経ってないのに、こんなこと思ってしまうなんてね。……まあ、なんだかんだ言っただけ、あいつの言うことは何時も的を突いているし、試験のときのあのスキルは凄かったし、偶に優しすぎる表情にちよつとだけグツと来ることも、ってわたしなりに考えてるのよ、もう!!!」

「んーーーー、霊夢どうした？顔が赤いっていうか、なんか息切れもしてるぞ??魔力使いすぎたk」

「違うわよ!!!放つといて!!!」お、おう。すなまかつたぜ。」

・・・はああ、もう。・・・あつ、漸くね。何考えてたのかしら、時間かかったけど、・・・さて、あんたの力見せてもらおうよ！

学園¥魔法実技室（アニキ視点）

ふっふーん、俺様の灼熱ゴットファイナ五指見たときのウォースの顔は傑作だったなあ！・・・いやあー、あいつもあんな顔するんだな、いつもやる気無い顔ばかりしてるから、こいつは大丈夫かよ、って思ったこともあったけど、ふぶん、ちゃんと生きている表情できるじゃんよ。

・・・ふっ、俺はおめえが出来る奴だって、最初声をかけたときから分かっていたぜ。だからここにいる奴皆の度肝を抜いてやってしまえ！！なあ、相棒！！

ん？、始まったか……。ああん？……。あれは？？

学園¥魔法実技室（D A Z E 視点）

……。んーん、ウォースの掌に乗っかってるのはただのスフィアだな？？大した魔力も込められてないように感じるぜ。

んーん、あいつのレアスキルは魔法反射、……。これは防御としてはかなりのもんだな。正直私にはどうすることも出来ないだろうけど、攻撃側に移るとあんまし使えないだろうから、今回見せるのは魔法の実力つてところか。……。まあ、流石にいきなり『俺を打てー』とかいえないだろうしな。

……。ああ、そうか、……。そういえばあいつ、魔法の訓練はあんまりやってなかったとか言ってたな。……。じゃあ、あんなものか？

……。いや、お前ならきつと私を吃驚させてくれるはずだぜ！！

学園¥魔法実技室（レノリア視点）

皆さん、驚いてらっしゃいますね。

・・・それもそのはず、何時も固まっているグループ内の4人がさまざまな結果を出し、そのグループのまとめ役、いや、リーダーのポジションにいるウォースに期待が降りかかるのは至極当然な事です。

更には射撃の名家であるディン家出身で、両親は彼の精密射撃に『
蹂躞』です。それがあんな規模の魔法を取り出してくるなんて・・・

ふふふ、ウォース貴方はエンタテイナーの才能もあるようですよ。
・・・この後の皆さんの驚きが楽しみです。

学園¥魔法実技室（俺視点）

俺のレアスキルは当然魔法反射でなく、一方通行だ。ベクトルを操る。

この能力の弱点は接触しなければ発動しないということ。

そう、だから一般的に良く見る射撃魔法の操作は出来ない。

ただ、解決は簡単だ。魔方陣が自分の前方に出ているから触れられないのであって、魔法陣を体と被さる様に展開してやればいい。

・・・ならば、俺と接触した位置に、スフィアを浮かべることが出来る！！

あとは、簡単だ。

スフィアを放出してやるだけだ。

ただ、その際の速度ベクトルをちょちょいっといじってやり、この天才的な頭脳で完璧な制御を行い、同じくこの完璧な頭脳を用いてデバイス無しで魔法をくみ上げたことによる完全な術式理解の恩恵を勝手に被ってしまい、更にはデインの血が射撃魔法に対する底上げを勝手にしてしまい、おまけに入学後毎夜レノリアの謎空間で鍛え上げてしまったこれらの要素をうまい事ミックスして解き放て

ば・・・

学園魔法実技室（神の視点）

『ミイティア
一筋の流星！！』

『・・・フィン、ズゴーン！！！！！！！！！！』

ウォースの宣言と共に手から零れ落ちた一筋の流星は、

・・・音を置き去りにし、

・・・その身に衝撃波をまとい、

・・・観客の視線を置き去りにして、

.....爆音を上げて着弾した!!!!!!

通常、特殊金属と魔法による強化で傷一つ出来ないはずの魔法実技室の最下床に、.....静まった部屋から土煙が消え去ったとき、.....そこにはぽっかり、10センチほどだが穴が開いていた。

そしてその穴を中心に家一軒軽く埋もれてしまうサイズのクレーターが出来ていた。

・・・その姿が確認できた後、部屋内で最も身長の高い人間が、目を開けたまま、・・・倒れた。

「やべえ、やりすぎた・・・。」

悪びれも無く、心から決して思った言葉ではないと断言できる様な口調で、その惨状の張本人は少し口を歪めて呟いた。

・・・そう、これが後の『流星軍』アーミテイアの伝説の始まりである。

1 - 9 話 流星軍（後書き）

ニコ動とか聞きながら書いていたら、凄く時間がかかってしまった。
。。。

カムバック！！マイフリータイム！！！！

4 / 4 訂正

・・・いやあ、ようやく主人公TUEEEEの一端をお見せ出来ました！

これでもう、思い残すことはn・・・ゲホツ！！・・・何てな

・・・あと後輩で一人二人エラーが発生しそうです。そこで、エラー予想が出来る方は書き込みをお願いします。事前に対処が出来るやもしれませんのでご協力願います。

8 / 17 修正

1 - 10 話 来襲

学園外（俺視点）

俺が一筋の流星ミューティアを放った後、そう、壊れないはずの部屋を俺は壊してしまったので学園中に避難警報が鳴り響き、少しパニック状態になってしまった。俺は実力を見せろといわれたので見せただけであって特に悪い事はしていないのに何故か反省文を書くこととなってしまった（何やら器物破損にあたるようだ、訳分からんが）。

その後、俺たち5人は初等科1年生として扱うことはやはり困難だったらしく、4月としては異例の5人まとめでの飛び級試験が行われ、その結果飛びが確定された。それがなんと、中等科1年まで。。。

尚、初等科が6年、中等科が3年、高等科が4年となっており、初等科では主に一般常識や、魔法の使用方法など、広く浅く学ぶ。普通は初等科のみで学習は終わり、社会に出てからそれぞれの場で学ぶことが多い。ただ、魔法の才能有る物が自己研鑽する場合や、高等学問を学ぶ場合は中等科、高等科に進学するものもいる。飛び級の制度は広く採用されており、才あるものは自らのレベルに応じた学年まで進むことが通常なのだ、まあ無駄な時間を節約するべしつちゅう奴だな。時は全也。

そんな飛び級が溢れている世界だが6年飛び級は珍しかったらしい。やはり俺らだけ魔法の腕だけじゃなく、精神年齢も高かったみたいだな。えー、6年っていうと、11歳扱い???.うーん、俺は20オーバーなんだが???.少し凹むわ。

「.....もう、何落ち込んでるのよ???.私と買い物に行くのがそんなに嫌な訳???」

.....そう、俺は今、霊夢と買い物に来ているのだ、それも二人つきりだけだ。

事の顛末は簡潔。俺が現実を逃避したくなる理由も簡潔。

<30分前>

ぎゃー、いきなり進学で……。誰もそんな用意してないぜ、教科書とか色々……。まあ必要なものは先生からリスト貰ったから買っていくか。5人分誰かが一括で買えばいいんじゃないやね、郵送してなあ。男と女でちよい違うし一人ずつ行くべ

霊夢：「私が行くわ、……。あんた等はホント適当買ってきそうだし……。。」

カミナ：「俺がそんなちまちました事出来るか！……。ウォース、お前が行って来い！！俺様はその間特訓しとくぜ！！……。魔理沙！！お前の極大射撃マスタースパーク、俺の灼熱五指ゴットフィンガーと勝負だ！！

レノリア：「私も買いたいものに一緒」

魔理沙：「あーあーめんどろだが、面白そうだから受けてたつぜ！

！よし！！レノリアも一緒に行くぜ！！

レノリア「あーーーーー」

俺：「……………じゃあ、行くか。」

霊夢：「コクリ」

学園外¥ショッピングモール（俺視点）

まあ、そんな結果、俺は霊夢という。俺は正直な話、山田時代から霊夢が好きだ。だから霊夢と二人で買い物に行くなんてイベント、まじ転生して有難う(?)な位感激をしている。いや、もう、ホントね……、何この可愛いのか?!……幼女なのに脇巫女スタイルとか、親も何考えてんだかねえ、……もう、最高だぜー！！！！

・・・とか考えてた時期もありました・・・。

そう、何が悪いかって・・・。いやいや、オマエ等、・・・確かに
霊夢は最高さ。これは間違いない！うん、宇宙の真理さ。

・・・ただなあ、俺は忘れていたが博麗家は由緒正しいお家で霊夢
はその未来を有望視されている御嬢なわけだ、・・・いや、ねえ、
でも、この展開は考えていなかった・・・。

ナンデスカコノエスピノカズハ?????!?!?!!

前に一列、そう一列なんだよ！！何人じゃないんだよ！！そして後ろに一列！

しかも『博麗』のくせに、いや俺も少しは期待したぜ『巫女SP』を……、だが現実には甘くない。この言葉は結構真理を突いてるのかもしれないな。……当然のように、俺を嘲笑うようにグラスンマッチョおっさん'sだったのさ……。

「ん〜、どうしたのよ、本当に……。いつもの空元気がないわよ。……ふふっ、おかしいこともあるのよねえ。……あつ、次はここだわ。」

……おかしいのは貴方の感覚です。……コノ状況に随分お慣れなようですね……。貴方にとってはグラスン'sはカウント外ですか……。全く全く全くとっておかしいと思っていない、不自然

だと感じてはいない貴方様の御様子！……ああ、頭が痛いわ。
……うん、……うん！俺、頑張る！！もう無口キヤラは
脱出よ！！

「……よし、次はデバイス工学の教材か！！ちよい霊夢、こん
どは俺が探してやるぜ！！」

あ~~~~。グラスン'sよ、本日初のテンション高発言をした俺
をそんなに見ないで~~~~。……ん?? そうだ、一方通行でお
っさん視線をカット(したつもり)だぜ!!!……いえーい、
これは楽だ!!!よしっ!これから霊夢と二人つきり(なつもり)の
買い物を目一杯楽しんでやるわ!!!

……チクシヨ、視線はベクトル操作できないよな……。出来
るとしたらグラスン'sからの反射波長の操作による、俺の視覚か
らの抹消。……しかしそんな高難易度なことはおいそれとできな
い。非均一に動く複数固体からの光を選択的にかつそこまで意識せ
ずに操作するなど、かなりの演算処理が必要だからだ。

・・・でも、霊夢の可愛さは異常だからな、いつまでもテンション下げているのも失礼だし。・・・まあ、我慢してやるか。

学園外¥ショッピングモール（脇巫女視点）

私は買い物を知ったときから、すぐコノ行為を好きになり、機会があれば率先して行く様になっていた。今回も突然の入用が出来て、何時ものチームの中から選ぶこととなったから手を上げてみたら、ウオースと二人で行くことになってしまった。・・・まあ、カミナと行くより、少しだけは役に立つとは思うけど、私のほうがきつと場慣れしているからちゃんとリードしてあげなくちゃね！

それにしても、コイツ、テンション低いわね。

私は何回か声をかけてあげているっていうのに、何よ、うつむいちやって、もう。．．．もしかしたら私一緒っていうのが嫌なのかしら。．．．．．そういえばコイツ、偶に私のこと難しい顔して見つめているときがあるわね。．．．そう、か、私もしかしたら嫌われているかもしれないのね。．．．いや！．．．大丈夫よ霊夢！私が嫌われるはずないわ！だって、可愛いし、頭はいいし、魔法は出来るし、あとお嬢様だしね（自分で言うのもなんだけど）。．．．うん、こんなことで落ち込むなんてらしくないわ！私は常に前進あるのみよ！！

学園外¥シヨツピングモール¥Cafe『Cool Mounta
in』(俺視点)

「随分買ったなー。．．．ん？これは、．．．何だ？．．．結構高そうだけど。」

大体買い物が終わって俺等は休憩中。・・・二人しかないよ。

「ああ、それね。・・・っていうか知らないの？エレメンツ。・・・
そういえば、アンタとレノリアは持ってなかったわね。私含め三人
とも旧式でスペック無かったから5つ買ったけど、普通持つてるわ
よ、それ。まあ、いいわ。その名前はエレメンツ、呪文の登録は
出来ないけど、それ以外は大抵搭載できる補助のデバイスね。」

霊夢は軽く説明して、エレメンツを起動させた。エレメンツ自体は
指輪の形状で、まあ予想通り指にはめて使うようだ。軌道は一種で
出来たようで、空中に幾つか画面が投影される。・・・おおい、ち
よっとかっけーじゃんよ。

「・・・さ、て、そう、コノ画面が通常のスタート画面ね。ここま
で展開しなくてももっと小さい画面を出すことも出来るから狭い場
所でも操作は出来るのよ。・・・ちなみに、コノ画面からは、
えっと・・・へえー、機能増えたわねえ、・・・これは何だろ、
・・・って、ああ、これが、あの・・・。あ、ごめんね、
私も買い替えは久しぶりだからね、ちょっと珍しくて。・・・うん、
よし。そうね、機能の説明だったわよね。まずは、・・・これ。こ
れで『グローバルネットワーク』との接続が出来るわ。」

『グローバルネットワーク』、これはインターネットとほぼ同意だ。地球のそれと異なるところは圧倒的に個人ページが少ない所か。こういった技術はミッドチルダはあまり進んでいないようだ。・・・正直俺も家にも寮にもPCを置いていますがあまり使う気が起こらないのはそれが原因だ。

「多分、グローバルネットワーク自体にはPCからアクセスしたことはあると思うけど、デバイス経由じゃないとアクセスできるエリアが限定されるから全然面白くないと思うわ。・・・まあ当たり前だけだね。」

・・・え??? そうなの・・・、初耳だぞ、それ。・・・くううう、何俺?、親父に騙された??、これも教育の一環だったとか? え、まじかよ、畜生、親父は絞めるしかないな。

「・・・ん??? どうしたのそんなに顔をゆがませてって、・・・何

？あんだ知らなかったの？？．．．ちよつとホント？？あはははは、
どんなアンチグローバリズムなのよ、貴方の家は？？あー、面
白！．．．ふふふ、貴方にこういうこと教えることが出来たのは今
回がはじめてね、ご両親の教育方針に感謝だわ「うるせえ、ばーか
！」「ふふふ。じゃあ、他の機能もしっかり教えてあげるわね。．．．
」。

ちつ、調子にのりやがって。まあ、霊夢が先生なら別にいいけどな。
．．．．ふふふ、何だよ、滅茶苦茶生き生きしながら話してくるじ
ゃんよ。．．．まあ、じっくり聞いてやるか。

まあ、結局は以下機能がエレメントにはあるようだ。

1．グローバルネットワークへの接続（ただ、2階層までらしい。
全5階層あり、ちゃんとしたデバイスで3階層、管理局などに入る
と他の階層にも接続可能らしい。PCで1階層しか接続が出来ない
のは個人認証されてないからだだよ．．．。）

2．PC機能（つか、オフィスかな。これも空中にキーボードと
画面が浮かんでくるし、画面指差して動かせば動くし。いやあ、な
んか、めっちゃ良いぜ！ちなみに家のは普通のデスクトップ型。霊夢

曰くかなりの年代ものらしい。シヨボーン)

3. 身分証明・クレジット機能・時計・目覚まし・スケジュール・電話・ニュース受信など、生活に必要な機能が盛り沢山!!

・・・らしい。まあ、あつた方が便利だな。・・・なんだ、じゃあ財布いらんじゃん。そうかだから皆俺がコインで支払つてるとこ凝視してたんだ。・・・そういや、なんかタツチしてたな。・・・あーまあ、これから変えていけば良いわな。

ちなみにエレメンツは通常、デバイスを持たない人間が使用するらしい。デバイスならこの程度なら朝飯前で作れるからだ。ただ、非武装の場や人が集まる場所ではエレメンツで対処する場合が多いので、大抵の人が所持しているそうだ。・・・「へー」と言わざるを得ない。

「・・・じゃあ、まあ、こんなもんね。あとは説明書がこのフォルダに入っているからそれを見てね。・・・あと、は・・・そうそう、・・・貴方もそろそろ練習が必要よね。・・・これが私のアドレスだから、練習の意味で登録してみなさいよ。・・・普通知ってる人には教えるものなのよ。・・・。」

携帯のアド交換みたいなもんよね。分かります。・・・にしても何だこれ、アドレスと名前だけかよ、寂しいな。俺は色々登録して送

ってやつか、まあ、初操作だけ何とかなるだろ。

「おけ、分かったわ。．．．えと、ほいほいのほいっと。．．．よし、これでいいんかな。．．．じゃあ俺からこのアドレスに俺データ送るわ。．．．ちよいやさ、ほいっと。．．．どうかい?」
．．．
「来たわ。よし、よし。」

．．．ん??何だよ、なぜかジト目??

学園外¥シヨツピングモール¥Cafe『Cool Mounta
in』(脇巫女視点)

．．．ふう、何よ!私が折角初めて男の子にアドレスを教えたら

ていうのに、軽い感じで流して……。まあ、コイツはこんなものかしらね。……残念ながら……。何が残念なのかも良く分からないけど。何かム力つくから睨んどくわ！……ふふふ、何か困惑してるわ。

それにしても、コイツからの返信、この量の登録をあの一瞬でしちやうなんて……。……何よこの自己紹介、適当な内容ね……。……でも今日はじめて使ったはずよね。時々気づく時があるけど、コイツの理解力というか処理力かな、トンでもないレベルなのよね！……こうしていれば唯の間抜けみたいに見えるけど。でも、實力試験のあの一筋ミィティアの流星、あれは凄かった……。……今まで砲撃魔法は魔理沙の極大射撃マスタースパークに勝るものは無いと思っていただけ、あれはまた次元が違っていた……。……何よ、あの魔力であの威力なんて……。……多分レアスキルが関連してると思うけど、それでもあんなのは有り得ない……。……それまでもウォースのことは皆が認めていたみたいけどあの後は、何？えー、実績による裏付け？、みたいな理解が浸透して、誰もあいつの言うことには更に一目置くようになってたものね、レノリアは知ってたみたいだけ……。……でもまあ、この博麗霊夢と霧雨魔理沙をも唸らせるんだもの、あーもーホント大した奴ね！！

学園外¥シヨツピングモール¥Cafe『Cool Mounta
in』(俺視点)

・・・ふう、ようやくジト目が終わったぜ。何か俺やったか??ま
さかのメールの内容が悪かったかのか?自己紹介でポエムとかい
けないんかなあ、結構いい出来だったかと思うけどな。・・・まあ、
いいy「!!!!???」

トキガトマッタ

イヤセイカクニハトキガフルエタ

ソイツハオレノメノマエニアラワレタ

「とっす、……………え……………なんで……………」

レイムハコエガデナイヨウダ

オレハコイツヲシツテイル

オレハコイツノソンザイヲユルスコトガデキナイ

コイツハオレノテキダ!!!

「……うじわ……」

オレハ、コンラン、を、しながらも、魔法を、連発した！！

『……う、……がつば、……どごあ、……どう
すばばっつぱ……、』
『だんうん』

初弾は演算不足で不発、だが次弾、三弾は体的に的中し体内浸透、爆破。四弾以降は体を貫通。その巨体から血を噴出し、最後には崩れ倒れた。

その姿はグロテスク以外の言葉は無い。全長は10m程か。顔はウルトラマンのゼットンに似ており、触手のような口が10本ほど生えている。足(手?)は8本+尻尾で8足歩行の体勢での出現。全

体的な色は肌色で体にも顔と同様触手が大量に生えている。

こいつは霊夢のSPを数人ぶち破ったような状態で出現し、俺のほうを向いていた。霊夢は丁度俺の前にいたので犠牲にはならなかった。被害にあったSPはもう無理だろう。全身または一部を破裂しており全員息がない。逆に触れられていないものに関しては大丈夫だろう。……霊夢は???

「おい、霊夢、……大丈夫か??」

「……………あ……………あんた……………あ……………あれは……………
なん……………で……………」

かなりのショックがあるようだ。……まあ、仕方ないだろうが。空気状態とはいえ身内が死んでいるのだ。更に目の前には化け物の死体がある。

「キヤ――――！！！！！！」

時間が、凍っていた時間が、平和だったモールに流れていた時間が、
とある女性の叫び声で溶解した。

<20分後>

学園外¥モール¥最上階屋上（俺視点）

・・・その後は大パニックに陥った。そりゃそうだ、平和なモール内にいきなり化け物が転移。人が破裂し、床は血血血血血血血血血。更には化け物から噴出した青の粘液で周囲は染め上げられ、尚も化け物はその存在を誇示していたのである。

俺は唯、憔悴している霊夢を抱きかかえ、人の濁流を避け、何処か静かな場所を探した。SPはついて来なかった。

モールの最上階に霊夢を連れて行き、ベンチに座らせた。ここにいた人たちも下のパニックが伝染して移動したらしく、他に誰もいなかった。・・・霊夢の状態は少しマシになっているようだが、まだ駄目のように見えた。

「おい、大丈夫かよ、・・・あいつなら俺が倒したぜ。・・・もう安全だぜ。「あれは・・・。・・・なんであんたは、・・・あいつに魔法をうてたのよ、だって、あいつは、・・・あんなのに、・・・わたしはあんなのに、・・・いきなり、・・・」「俺には目標がある「!？」いや、使命というのかな。何にしても俺には

負けられない、死ねない理由がある。．．．例え、どんな困難でも、どんな敵でも、化け物でも．．．。だから倒した。．．．ただ、それだけさ。」

奴は間違いない。．．．BETAだ。．．．ついに次元跳躍が単体で可能な種が完成したみたいだ。．．．早い。．．．あまりにも．．．だが、まだ何とかなる。やつは移動後動きがかなり鈍かった。俺がパニックになりかけていても対応できたのはそれが原因だ。そう、奴等の転移はまだ未完成。まだ、危険領域までは達してはいない、が、安心は出来ない。もう少して、バンバン転移してきやがるかもしれない。そう、時間はあまり無いのかもしれない。．．．。

「．．．．．すううううう、はああああ。．．．．．ふう、．．．もう大丈夫よ。ごめんね。．．．ふふ、アンタは強いよね。．．．．．私と魔理沙わね、．．．実は、．．．とある化け物を倒すためにね、かなり厳しい修行を積んできたのよ。．．．．．多分、あいつの、仲間なのかも。．．．それでね、結構シミュレーションも、やってきたのよ。．．．時間をこまかすシステムを局も交えて開発し、その一号として私達は選ばれ、そこで鍛えたのよ。．．．ふふふ、だから実年齢は同じでも、過ごした年月はアンタよりも私達は年上よ。．．．それがどうこうある訳じゃあないけどね。．．．．．なのに、動けなかった。．．．。私は！！。．．．わたしはシミュレーションであいつの仲間の攻撃を逃れ得ぬ束縛で捕らえ、何匹も何十匹もいや、数え切れないほど魔理沙と殺した。．．．．．なのに、．．．．．なのに目の前に、出た、あい、つ、「もういい。．

<それから約2日後>
?¥?(レノリア視点)

霊夢とウォースの買い物での途中にBETAが出現し、ウォースがこれを撃退したみたいです。それから何が有ったか分かりませんが、ウォースは学園にも行かず、この私が作った空間で飲まず食わずで特訓をしているようです。

確かに気持ちは分かりますが、・・・私は止めないといけません！！・・・悲しいですけど、それが私の役目でもあるのですから！

「ウォース！！・・・もう貴方は35時間連続でこの部屋にいます。それは貴方の修行の時間を意味します。あなたに「大丈夫だ、理解

しているよ、レノリア。・・・俺は仲間を信じているし、当然お前も信じている。だから俺が危険な状態になったらお前が助けに来てくれるってことも、変な話だが信じている。・・・もう、そんな時間なのか。・・・分かった、もう終わりにするわ。今何時だ？？？・・・まだ朝まで時間はあるな、分かった。ちよい寝るわ。・・・すまんが朝は起こしてくれ。・・・じゃあな。」

ウォースはこの空間からあっさりと出て行った。多分自分の寮の部屋に戻るのだろう。

・・・私は、・・・私は・・・はああああ、もう、・・・仕方が無いですね、全くもう。・・・ふう、分かりました！！！この、レノリア「アークス、トレイル」ディン「ウォースに危険が無いよう常に見張っていてあげます！！！！・・・それが私の役目なのですから！！！！

1 - 10 話 来襲（後書き）

超難産。色々問題があるけどこれ以上は実力不足で無理です。すみません。

4 / 4 訂正

1 - 11 話 プロパガンダ

? ¥ ? (? 視点)

「・・・トレイルⅡデインⅡウォース。年齢5歳。国立ミスカトニツク魔法学園中等科1年所属。現住所は学園第7寮208号室。家族構成は祖父、両親、兄一人と妹が一人。両親は共に管理局理解^{アン}できぬ存在対策室に所属。父親の名前はトレイルⅡデインⅡウルザ、通称『蹂躞』。母親はトレイルⅡデインⅡメリツサ、通称精密射撃^{ロックオン}。共に射撃魔法に極めて優れた魔導師であります。兄のトレイルⅡデインⅡゼノンは現在は当人と同じ学園ですが、こちらは飛び級が無く初等科の3年に所属しております。妹のトレイルⅡデインⅡセラスは両親と共に第8管理世界へ長期出張中。祖父のミシユラⅡデイン「当人以外の情報は良い」・・・はっ！失礼いたしました！・・・当人はデインの名の通り非常に強力な射撃魔法を5歳という年齢で会得しており、実際、学園実力試験・運命の日^{ダイクメア}で発揮しております。また、殆ど使用が見られません^{ミライ}が当人はレアスキル魔法^{ミライ}反射も所持しております。魔法反射は魔法を跳ね返すという有史上最強クラスのレアスキルでありまして、当人への各方面からの注目は凄まじいものがあります。尚、このレアスキルが今回の計画の最重要骨子であります。・・・

・・・奴は確か元理解アンソウできぬ存在対策室だったな・・・。そうか、
うか、間近で見て奴らを神格視でもしたのか。

・・・ふっ、・・・愚かな。・・・確かに奴らは急に湧き出てきて、
今やその勢力は管理局で御することが出来ないレベルになっている。
後数年もすれば局ではどうしようもなくなくなるだろうな、奴らの進化
速度を鑑みれば・・・。確かに熱狂的になる人間にも頷けるという
ものだ。

・・・ふっふっふっふっふ、・・・それで良い。・・・それで良い
のだ。奴らを、奴らをどう捕らえようとどうでも良い！！重要なこ
とは奴らが世界を滅ぼせる、局を壊滅させる可能性があるというこ
とだ！！！！・・・ふっふっふっふ、・・・その為なら・・・。

・・・それでは、最後に代表閣下のお言葉を頂きます。皆様、こ
静聴願います。・・・では代表、お願い致します。」

・・・ああ、そうか、私の時間も有ったのだな。・・・なんて面倒

な……。まあ、だが良い。こいつらを釣るためには、
局破壊のためなら、私は……。私は何でもやってもやるさー！……！

< BETA襲撃から丸二日経過 >
管理局 ¥ 地上本部 ¥ とある応接間 (俺目線)

……。拉致られた……。

まあ、しゃあないか、きつと、．．．ん？．．．ダークメア運命の日だったかな、
．．．けっ、センスがいいぜ、全くよう。まあ、その運命ダークメアの日の件
だろうな．．．。

俺は、あの時、恐怖と困惑、焦りの中で義務感と、．．．いや、義務感だけかな、．．．そうその感情により引き金を引けた。．．．恐らく奴らに対する何かが無いといきなりあれはきついだろうな、．．．まあ俺は元々知ってるたからな、奴らを、．．．だから体が動いた、奴を殺せた。

．．．当然俺は人は当然、動物も自分で手をかけるなんてことやったことやったこと無いさ。一般的な日本民でしたから。．．．ただ、あの時は、こう、何だろ、．．．ある種の反射、．．．かな。そう、良く分からないが、自然な、何か自然な判断で手を下せた。．．．良く分からない。．．．だが、最初は案外こういうもんなのかもな。．．．生き物を殺すことなんて。．．．やっぱ怖いじゃん。なんだかんだで．．．。

．．．うん、よし！！大丈夫！！．．．俺はまだ、大丈夫だ。
．．．まだ大丈夫でないといけない．．．。

・・・でだ、今日の経緯はこんなだ。0400特訓終了、0410就寝、0730起床、0840学園着、1500学園終了、1510管理局員と接触、その後拉致という名の同行を求め「いやいやいや、そこは逆でないのかい？」

・・・キュピーン!!俺は分かったぜ!!俺の新たなレアスキルが!!!「まだ何かあるの」「うるさい!!!」そう、俺の新たなレアスキルだ!!!その名は・・・「ゴゴゴゴ」・・・あんなノリいいね・・・。「ノノさつさと言え」・・・照れた。・・・まあ、気を取り直して、俺のレアスキルは・・・思想漏出タタモレd「さあ、君を呼んだ訳を話そうか。」

・・・なんだよ、もうちょいノってくれないだろ、・・・ちえつ。

「・・・まずは自己紹介を。俺は情報部第三課のフオウン「エノアスという。階級は三佐だ。主に一般大衆向けの情報に関しての任務を行っている。宜しく。」

・・・何もなかったように話始めやがった、この見た目緩いバルドフェルド。・・・年は35位か。で、三佐・・・、ふむ。

なんかムカつく野郎だが、俺は一応立ち上がり笑みを浮かべ話しかけた。

「宜しくお願いします。・・・ところで、まだ5歳のガキを攫って、管理局は何時から犯罪団体に成り下がったのでしょう???」

まずはかるーくジャブから。

「ふつ、大の大人が腰を抜かしている状況で、唯一冷静に行動し、最小限の被害に抑えた、運命ダイクメアの日の英雄にガキ扱いなどできん。．．．
・そう、歴戦の士と同様に扱わねば、英雄には失礼だろう、．．．
な？」

．．．そうなんだ。．．．運命ダイクメアの日。

これはもう既にミッドチルダ、いや管理世界全体で広く知られることとなった単語だ。．．．語源は当然、BETA来襲．．．。BETA、いや、理解アンノウンできぬ存在は世界にその姿を曝し、終に大々的な説明が管理局からあり、今では恐怖の対象として君臨しているのだぜ、BY魔理沙。

そこで、理解アンノウンできぬ存在を買いた俺、トレイルIIデインIIウォース

はなんと、『ダークメアの英雄』なぞというだっさいネーミングがつけられてしまったのだ……。何たる事だ、特訓している場合ではなかったとうことか……。ふっ、これも若さ故に「はいはい、妄想の世界に浸りたいのは分かるが、帰ってこいよ、英雄殿。」くっ……」

……。ああ、死にたい、死にたい、死にたい……。そして何よりもこいつ、UZEEEEEEEE!!!

俺の恨み視線はどこ吹く風、奴は腰を下ろし、別の表情に変えた。

「……。まあ、でだ……。君をプロパガンダとして使いたい。……。偉く直球ですね。」君の人となりは大体分かった。資料にも目をとおしたしな……。容姿端麗、頭脳明晰、強大な魔法の才。前代未聞なレアスキルをもち後世に名を残すことは間違いない。……。うん、こういう奴は大体根性がひねてやがんだよ。……。俺の予想通りだ。……。はいですか……。」

……。上げて下げてか……。お前は関西人かよノ（バシッ

「……疑問点があります。」答えられることなら答えよう。」
・
・人員選択と作戦実行の理由は？」

俺は100%真剣な眼差しを砂漠の虎（暫定）に突きつけた。

管理局¥地上本部¥とある応接間（虎目線）

……ちっ、……こいつはホントに5歳か？……良い目を向けてきやがる。……成程……。……流石はディーン、そして『蹂

躰の息子が……。

舐めてかかると、こっちは喰われてしまっぜ。

「……まずここから言う内容は全てが局外秘だ。当然この意味は分かるな。「ああ。」……よし。……ならば、君を担ハックボーンごうとする背景からだ。」

管理局¥地上本部¥とある応接間（俺目線）

俺の意思は通ったか……。話の分かる虎で良かった。

・・・奴は体の力を抜き、首をコキコキ鳴らしてから、少しまじめな顔を作り、話し始めた。

「・・・ここ二日の報道である程度は理解アンソウンできぬ存在については理解しているかと思うが「いや、見ていません。」・・・そうか・・・珍しいな。ではそこから、まあ簡単に行くか。」

俺の世間情報は昼飯時の魔理沙の話が100%だ。あいつは微妙に信用ならんからな。・・・ちなみに霊夢は立ち直っているように見えた。魔理沙の話にも特別反応はしてないようにには見えた。・・・内心は知らん。・・・それより英雄視してくる外野がうざかったから、かるーく脅したら綺麗に引いていった。・・・ふふふ、流石に理解アンソウンできぬ存在と同じ死に方は嫌か・・・。

・・・その後、霊夢に殴られたが・・・ん？俺なんかやったか？？

「まずは理解できぬ存在。こいつ

『ウルザの話とかぶるとこカットになる魔法!!』 久々登場、ノ
レ様大活躍!!

……でだ、現在は対策室を中心に、ちなみに対策室のトップは君の御両親だ、誇って良い。君の御両親は世界を、最前線の最も危険なところでがっちり守っているのだ。……誇ってよい。「有難う」ああ。……話が逸れたな、……対策室人員及び選抜された空士・陸士部隊、計5個大隊、総勢約4,000名の魔導師は、現在理解できぬ存在被害の最も深刻である、第8管理世界を中心に展開している。……これは過去に例を見ない最大規模の作戦となっている。……ちなみにここからが機密だ。……現時点、……本日1400時点で、第8管理世界に到着し約2週間だが、人員損失は約4割となっている……。聡い君ならこれがどれ

程のことが分かるだろう。」

2週間で4割、・・・1,600人が、・・・戦闘不能状態・・・。
実際のところ組織的には壊滅といっても良いレベルじゃないか・・・。

「・・・当然、戦闘不可となるような障害のあるものもこの3割には含まれるので、決して殉職者とイコールではない。・・・しかし大半がそうだ。・・・理解アンノウンできぬ存在も数は減らしているはずだが、元の数が分からんゆえに、奴らは多すぎるからな、ジリ貧だ・・・。当然君の両親は存命しており、奇跡的な戦功を上げられている。・・・それでも足りない・・・。そこでだ、この事態を収束するためには上層部は大規模増員を行う計画を立てた。・・・正確な数値はまだわからんが、100個大隊は下らん予定だ。」

100個大隊、・・・80,000人。・・・80,000人の魔導師って・・・。だが、どうなのだろう。理解アンノウンできぬ存在はBET Aだ。こいつらの恐ろしさは物量・・・。それに対し物量で対抗するのは良い手段だが、それだけでは到底対処不可能なのではないだろうか。・・・空転型も出てきているし・・・。

「・・・当然そんな大隊を編成すれば他方への影響は絶大だ。不満は局内だけでなく、民衆にも広まるだろう。・・・そしてその時期を突く者も現れるだろう。・・・だが、そこまでやらなければ、・・・そこまでやっても勝てるか分からん相手なのだ。・・・そしてそれが逆に我々の危機を引き出すようなことになって決していけない。・・・我々は、・・・我々管理局は平和を守らなければならぬのだ。」

そこで、少し上を向いて話していた虎のおっさんは俺に視線を合わせた。

「・・・そこでだ・・・。局長、いや、ミッドチルダそして管理世界の皆がこの危機に立ち向かう体制を作らねばならない。・・・それは物資の制限や、局への税金の引き上げなどだ。・・・これがまた不満を増大させる。・・・しかしそもそも不満というものは何故が発生するのか・・・それはだな、自らが払ったものと得られたものが釣り合わず、過分に払ってしまったと感じるからだ。自分は損をしたと。・・・そこで君の出番だ。・・・君をプロパガンダで使用することで、こんな小さい子供までがこの危機に対し果敢に立ち向かっている、我々も危機意識を持つとうという思いを植えつけるのだ。それにより、平和の貴重さを実感し、得られるものの価値が上がる。すると収支の釣り合いが取れ、不満は解消する。不満が減少すれば平和が維持しやすくなる、という筋書きだ。・・・当然

粗はある。・・・だが、我々は些細な粗に気を使う余裕も時間も無いのだ。使えるものは使うしかない。・・・これが、君への、情報局第三課フオウン「エノアスからの依頼事項だ・・・。」

・・・糞忌々しいことにコイツが言っていることに不自然な所は無い。・・・ある程度は、いや、全体的に頷ける。

トレイル家の長男、対策室のトップの息子、強力なレアスキル、難関校での前代未聞の飛び級、そして運命タークメアの日の英雄、か・・・。
出来過ぎな位材料がそろってやがる・・・。畜生神様よ、恨むぜ・・・。

いよう逃げ道を断って……。こんな交渉じゃないわよ！！・・・
反論は分かるわ！・・・私達は若干大人びてる。それは分かる。・・・
・でも、でもねえ、子供を大人の戦場に駆り出すなんて、世界がも
し生き残ったとしても、それは既に平和な世の中だなんて胸を張っ
て言えないわよ！！！」

俺は、・・・・・・・・・・・・・・・・正直その、・・・・・・
涙交じりで俺の為に怒ってくれた少女に心からの感謝をした。

「・・・・・・・・だから、・・・・だか「もういい、霊夢。・・・あと
皆・・・・・・・・ふっ、こんなとこにまで着いて来やがって、馬鹿だよな
あ。」

ホントにだ……。ドイツもコイツもそんな顔をしやがって……
(カミナ除く)。

……俺は、ゆっくりと顔を上げ、奴を捕らえた。……そして
はつきりと自分の意思を伝えた。

「……………フオウン三佐、……この件、お引き受けいたし
ます。」

「なっ「そうか、君ならそう言うてくれると思った。……君の友
人達には感謝をせねばならんな、……そうだ、ここにいたことは
不問にしてあげよう。「ちょ、ちよつと待ちなさいよ」霊夢！……
ありがとう。「えっ、……えっ、……なんでよ……、アンタ、
……………」

霊夢はまた俺の胸で泣き始めやがった。．．．ははは、こいつは俺に似てやがるな．．．。純粹で真っ直ぐで、．．．俺は最近曲がっちまったからな．．．、なんか、．．．こいつが染みてきやがる．．．。

「ん————、よし!」

ずっと黙ってたカミナ（マジ有り得ない状況だったが突っ込むと五月蠅いので皆スルーしていた）が、ようやくやっと呼びだした。

「ウォース!!!お前は俺のダチ公だ!!!そして俺はお前のダチ公だ。．．．ならば、お前の重み、俺が半分背負ってやる。．．．フオウン三佐とかいったな．．．、俺も一緒にそのぷるぱがんだ?、

「に使いやがれ!!」

時が一瞬静止した。俺はまた馬鹿なことを、といった感じでカミナを見ていたら、三人娘は目に光を取り戻していくのがはつきりと見て取れた。……あるえく??

アレ、レイムサンサキホドマデノナキガオハドウサレタノデスカ??

拳句の果てに馬鹿三佐のこの一言。

「ほう、確かに君らは才のある将来有望な子達だ。しかもやる気もあるように見て取れる。……うん、一人より五人の方が何かと良いな。……では、他の四人の諸君、……お嬢さんたちも含んで構わんのだろう?」当然です!!「x約3」……ふふふふ、いやはや、ウォース君、君の周りには良い友人がいるようだな「……は

あゝ、全くです」「ふふ、・・・少し相談をさせてくれ、間違いない君らの要望は通る、そこは安心したたまえ。では詳細は後ほど連絡する、それではまた会おう、未来の英雄の卵達よ！！！」

そしてやつは颯爽と部屋を去っていった・・・。

・・・そして俺らは巻き込まれていく・・・。

それは自らの意思も介在していたが、果たして何処までだろうか。

ちっばけな俺らが大きなうねりに逆らえないように、大きなうねりは更なるうねりに飲み込まれる。

最後に掌を広げているものは誰なのか、・・・それはこの時点では考えもしなかった。

1-11話 プロパガンダ(後書き)

あー明日がやばい!!

もう寝る!!

8/17修正

1 - 1 2 話 戦闘試験開始

< 虎からの拉致より約3カ月後 >

学園 ¥ 中等科 1 - E 教室 (俺視点)

・・・教師の説明が静かな教室に響く。

・・・たしか今は歴史の時間だったかな……。ミッドの歴史も中々波乱万丈みたいだな。やはり魔法の存在がでかいか……。あとは大体の流れは同じだ。地球の歴史もミッドの歴史も、起こるべくして起こり、終わるべくして終わる。全く不自然な事象はそこに存在せず、何もかもが変数の『時間』に支配されている。・・・これではまるで哲学だな。

・・・そして初めてミッドに、いやこの歴史に不自然なページを残してしまふことが起る。

BETA。

こいつ等は、ミッドの一般人にその存在を明かしてから約3ヶ月が経つがその関心が薄まるどころが無い。それは当然だ。恐らく未来の歴史に大きく記される存在であろうのに、現在過少に捕らえられる可能性などあるはずも無い。連日ミッドの報道はこの件に関する物が非常に多い。何しろ言ってみれば戦争状態なのだ。そして情勢はミッド不利・・・。先遣隊である俺の両親含む4,000名の魔導師はその数を現在4割に落とし、現在は小規模な戦闘しか行っていないとのことだ。第二次の部隊は現在未だにまとまっていない。恐らくは規模的にはでかいだろうというのが一般論だが、中々に決定が下らないのが現状だ。

「・・・ふー、俺らの出番も一次お休み・・・か・・・。」

そう、あの虎は昨日俺ら5人を集めて言い放ったのだ。

<昨日>

管理局¥情報局会議室（俺視点）

俺は指定の時間10分前に会議室に入った。俺は人を待たせるのがあまり好きじゃあない、それと言うのは俺が待つのが嫌いだからだ。だから早すぎず遅すぎない時間帯に入ることが多い。

ドアを開けると中には3人。博麗霊夢・霧雨魔理沙にカミナだ。俺と一緒に来たレノリアを含めると5人。・・・へー珍しい。5人集められるのは最近無かったな・・・。

「よっ、おはよ。お前等結構早いな、・・・カミナまでもなんて珍しい。」

「あーん？ちよいつと待てい！！それは何だ？俺がいつも遅れているような言い方だな。なんて心外な「いや、おめえ、いつも遅れているし」「うんうん」「ぐっ・・・。」

霊夢魔理沙も頷く。・・・まあ、当然だろ。なんかいつも良く分からん理由で遅れるからな、こいつは。・・・なんだよ、”急に天から俺に指令が有ったのだ！”って・・・。意味わかんねえ・・・。電波か。・・・そんな時は俺が変わりに仕事やる羽目になるし、しかもめんどい。

「あれはだろ」お前等おはよう。・・・おおっと今日はカミナもいるのか、ふん、珍しい「お前もかあ！！！」

虎登場。・・・もうコイツの名前虎でいいだろう。うーー、虎
「タイガーとか・・・。いや流石に酷いな。すまん！虎！！」

「・・・えと一人叫んでいる奴がいるが放っておこう。さて諸君、本日は5名の集合をかけたことをかなり不思議がつているかと思う。確かに最近は初期に比べてかなり君らへの依頼事項も減少し、2、3人での召集が多かった。・・・まあ、色々な理由でな。」

多分、カミナが扱いつらかったってのもあるだろうな。横目でカミナを見るがこいつは腕を組んで堂々とした目つきで虎を見ている。・・・うん、自覚が無いことは幸せだ。

「今日は特別依頼事項は無い。伝達事項、・・・そう一次解散の通達だけだ。・・・って、あまり驚かな。まあ、予想はしていたということか。・・・その子供らしくない点も関係するのだがな。・・・まあいい説明はきつちりする、お前らも余計な棘は残したくなからう。」

俺を見ながら言った。・・・そうか俺はそんなにねちっこいのですか???

「まあ、理由は簡単だ。君らの需要が低下したのだ。これまで君らには、大衆への理解でアンノウンきめ存在に関する情報伝達に従事してきてもらった。

大衆へ伝えたい内容を君らからの質問と称し、回答を行う、スタジ
オでの質疑応答。これにより理解できぬ存在の初期情報、特性・危
険性・具体的な行動パターンなどは大体伝達が終了した。
また、取材と評し、管理局内から発信したい情報を伝えることもや
つてもらった。これも初期段階は完了したのだ。

これ等情報は子供であるら君らから伝えることで、？内容を子供が
理解できるレベルに落とすことで、正常な理解に繋げ、更には情報
量を絞ることが出来る、？子供が理解を行う姿勢を大人に染み込
ませ、現実逃避を避ける、？同情を誘う、などが目的だな。

だが、第一段階の情報発信を終えた今、？の目的は不要。ある程度
時がたち、パニックの発生するであろう最大可能性時期は過ぎ、？
もこれ以上行う必要はない。？は元々？と？の加速促進なので、無
意味となる。

・・・分かったか。これからの情報は少々子供を通すには適さない
のだ。・・・まあ台本無しのお前なら特に問題はないと俺は思う
がな。」

・・・まあ、納得だな。・・・今思えば、指針策定までの時間稼ぎ
だったわけね、転移体により大幅に乱された分の・・・。

「ま、そんな訳でだ。お前らはめでたく解任となった。
・・・ふっ、お前らはたいしたもんだ。正直こんなに長い期間使え
るとは思わなかった・・・。子供にこんな案件を扱わせるなんてと
そんな苦情が局に入ることはハナから織り込み済みだったからだ。
それを踏まえて局としては少しの時間稼ぎ程度に考えていた。それ
をお前らは台本通り上手いことやりやがって、サラリとそんな可能
性をすり抜けやがった・・・。はっはっは、・・・将来が恐ろしい
ぜ。きつと色々な勧誘は数え切れんほどきているだろう。」

・・・ガキが仕事をこなしているといつても、この件は特別だ。注
目度が違う。お前らの存在は理解アンノウンできぬ存在と共に、今を生きる人
間に染み付いただろう・・・。それが良いか悪いかは別にしてな・
・。特にウオース、お前は英雄だからな、更にその存在は一回り大
きいだろう。・・・これからのお前らの人生にどういう影響を及ぼ
すかは全く分らんが、何か変わる事は確かだ。願わくば、良いも
のであってほしいと思う。・・・それじゃあ、また縁あらば。」

< 歴史の時間 >

学園 ¥ 中等科 1 - A 教室 (俺視点)

・・・虎のやろう、言いたい事が終わったらさっさと帰りやがってな。・・・まあいいけど。

『キーンコーンコーン・・・』

・・・あ、授業終わった・・・。何も聞いてなかったけど、教科書一回読めば全部覚えるからな。まあいいか・・・。

「ウォース！！飯行くぜ！！今日はがつり行きたいから食堂だ！！」昨日も食堂じゃない。今日はカフェで軽食がいいわ」なんだとー！！あんな所で腹が膨れるか！！・・・」

ああああ、賑やかな事で・・・。じゃんけんやってるよ・・・。うーん、霊夢勝ったみたいだな。よし、うーん、じゃあ今日はパ

スタカ……。俺はどっちでもいいな、ここの学園の飯どこでも上手いからな。

「畜生！！なら午後の模擬戦でリベンジしてやる！！！」

そう、今日の午後から1週間、3ヶ月に1回のガチの戦闘試験がある。参加者は先週にエントリーを済ませており、対戦相手はその中からランダムに組を分けられ、その中で得点を競う。得点は試合内容を複数の先生が採点する。フィギュアスケートの採点に似ているな。エントリー者は殆どが卒業後は実戦部隊に配属されるような奴らばかりで、事務部隊・研究部隊は別の授業行われる。そしてこのイベントは1週間あり、最終的に高い得点の持ち主を中心にクラス替えおよび特典が色々つくらしい。ちなみに前回は入学後すぐにあつたので俺ら5人は参加できず、今は最下位のクラスであるE組に入れられている。ちなみに対戦の組は全員ばらばらだ、・・・霊夢とカミナ以外は。

「はー、アンタと同じ組になった時点でこうなるのは分かった

けど……。手加減はしないわよ！「当たり前だ！」

中々面白そうだ。カミナの攻撃力と霊夢の防御力、どちらが上回るかってとこだな。

<13時58分、5時限目開始より58分経過>

中等科¥第一魔法演習場

「……………くっ……………なんだコイツは……………畜生!!」

「・・・B組のオーラントとかいったか。・・・ふふん、シューターなど幾ら打つても無駄だよ!!」

俺を目掛けて放たれた小さな魔法球体、28発。全て俺に着弾後、ばらばらに反射し、散った!!

「諦めな。お前と俺では格が違う。・・・お前の攻撃は俺に届かず、お前にはぶち当たるんだよ!!」

声のトーンを上げると共に、スフィアを5発、標的目掛けて放つ。その速度は通常のレベルではない。着弾の手ごたえあり、・・・ふーん、急造であれだけのシールドか・・・。もう魔力ないんじゃないかね??

「素晴らしい!!・・・しかしこれで終わりだ。」

数は10発。先ほどの倍だ。通常の魔導師なら全く問題のない魔力量。しかし速度が加わるとそうともいえなくなる。破壊力に変質する運動量は質量と速度の責だ。他にも属性などが要因としてあるが、

簡易的に計算するなら「質量」と「速度」を見ればいい。そして俺は速度を操れる。限界近くまで一つのスフィアを鍛えれば一筋の流星^アとも呼べるが、こいつにはそこまでは必要ない。質量も中位でいい。……再起不能にしたらしたでめんどいからな。

「なんでだ……何故！何故それだけの速度が……その魔力で出来るのだ！……くそっ！！こんなガキにやられるなんて……。」

悪態つく恐らく俺より6以上年上のガキ。所詮はそんなもの……、俺の相手は……お前じゃねえ！！

「今度は10発だ……。しっかり受け止めるよお……！」

……これで3勝目。合計ポイントは……28点。上々だな。

他の奴らは、・・・エレメンツから見れたな、確か。ほいほいほい
つと。・・・

『ミスカトニック魔法学園中等科1年 第二回戦闘試験 得点ラン
キング』

ああ、ここだここだ。内容は・・・

『13時55分時
159名中

1位 29ポイント アーウェット＝ルーデンス
2位 28ポイント トレイル＝ディン＝ウォース
2位 28ポイント 霧雨魔理沙
2位 28ポイント レノリア＝アークス

・
1位 26ポイント カミナ＝グローリー
1位 26ポイント 博麗霊夢

『

・・・皆上位ランカーだな。大したもんだ。・・・つか俺二位か・・・これは喜ぶべきか、どうなんだ???

・・・おつ、次か・・・。てか一試合3分で休憩10分つて・・・。10分で回復しきらなかったらどうするんだよ。何たる拷問か。・・・まあ、俺は全く疲れてないがな・・・。

「・・・おつ？次は英雄殿ですか・・・。これは名誉なことですね。・・・宜しくお願いします。トレイル＝デイン＝ウォース。私はA組のウェン＝ブルー＝ハートと申します。」

・・・現在27ポイント5位タイか・・・。ポイントはざっくり言うと、？攻撃技術、？防御技術、？移動技術、？補助技術、？その他、？勝ち負け、で構成されている。1回の得点は満点が10ポイント。勝つと5ポイント負けるとポイントはなく、他の5項目で加えられる。

・・・よってコイツは全勝中だということだ。

「宜しく、ウエン。・・・手加減はなしだからな」・・・貴方相手にそれはないですよ」

！！！
・・・へえいいじゃんこの緊張感。・・・少しは骨を感じさせろよ

「では、両者、静止して・・・、スタート！！」

っと、いきなりですか！

「魔法^{ミュー}反射！！、にやろっ！！お返しだ！！」

先生の開始の号令すぐに4筋の閃光が俺の頭を捕らえ、滑る、そして5つの光球が、先ほどを大幅に上回るの速度で、ウエンに着弾した！！

が！！

「……流石です。これでこそ『英雄』……。」

そこには3重のシールド。……へええやるじゃない。瞬間詠唱としては速さのある攻撃と、俺の攻撃を防ぐシールドか。……ランクスは伊達じゃないって事か……。

……しかし

「・・・さて次は僕n「俺はなあ、ウエンよ!」「!!!???」・・・俺は、俺の目線は遥かに上なんだ、・・・ここなど、お前など眼中にはない!!」「・・・言ってくれますね、では私のこれを止めてから言ってください!!!」

俺の無駄話中も大きく展開・収束させた砲撃呪文。・・・ほっいいレベルじゃん。・・・だがなあ・・・

「喰らってください!!!」

圧倒的な、俺の魔法と比較するに、圧倒的な質量を持ったその砲撃は、それを目掛け、中々の速度を持ち、降りかかる。

「ぬるい」な!!!???」

俺は砲撃に、真正面へ、加速、加速、加速し、衝突寸前で、90度
転換、これを回避した！

「くっ、……きっつ。……まあ、これも、訓練よね、っと！」

俺は抜けた顔をしているウエン相手に30発スファイアを打ち込む。
何やら俺の特性は多数制御のようだ。……一方通行と相性がかな
りいいぜ。……当然全力射出のウエンに止めるすべなどなく、撃
墜……いや、

「まだです、……私もここで倒れられないのです！！貴方にも
強い意志があるとは思いますが、私も簡単には負けられない！！
……だから、これが、私の、全力、です！！！」

・・・ほう、まだやるか。そしてあれは・・・、多いな、50いや73発・・・か。73発を周囲に添加してやがる。魔力も乗ってるな。・・・へえ、二回感心させるとは・・・。
俺の一方通行はオート反射が出来る。だから魔法も出来るんかと思つたが、少し違つた。魔法は計算の組み立てが困難で個人個人若干特徴があり、確実な制御が初手では出来ない。
・・・ただ、奴の攻撃は既に2回受けている。・・・あの数程度ならきつと・・・。

「・・・そして

・・・え、まだなんかあるの??

これらは属性として魔力吸収があります。その属性を發揮し、私の所持魔力以上の、魔力とし、集める!!」

73発を・・・増大した魔力の73発を、・・・一つに束ねると・
・・・???. いやなによりも、くそつ、魔力の性質が変化してや
がる。・・・いいだろう、上等だ。・・・俺をなめるなよ?

「・・・その笑みは余裕なのですか?・・・私の準備中にも全く手
を出さずに・・・。それでも勝てば良いのです!・・・沈めウ
オース!ホワイトフロウケン轟く破壊槍!!!!!!」

名の通りの白色の、全てを蹂躪する、大型の、尚且つ限界まで凝集
された魔力が、俺を目掛けて、貫いて

「・・・ふう、180度反射完全なる反射完了。・・・ウォン君よ、まだまだ

だね!!」

巨大な存在感は、自身に飲み込まれ消失。

残るは、魔力の空になった魔導師と、・・・勝利を確信した、今にも鎌を振り下ろさんとする魔導師だった。

「さらばだ、ウォン。君は幾分俺を楽しませた。・・・敬意を評し、・・・一瞬で終わらす。」

俺の一撃は、避けられんぜ!!

「ミューティア一筋の流星!!」

流星はウォンに激突し、跳ね飛ばす。・・・何、死にはせん、手
加減はしてますんで。

・・・ポイントは10点か。いい感じだな。

さて、・・・お!!あれは、・・・霊夢とカミナか!!・・・
丁度良かったわ。じっくり見るとしますか。

1 - 13 話 攻守乱舞 (前書き)

初バトル??かな。

なんだかいつもとあんまり書いてる感じは変わらなかったです。

1 - 13話 攻守乱舞

中等科¥第一魔法演習場¥第7区画（俺視点）

博麗霊夢とカミナリグロリー。6年の飛び級を果たし、初等科入学数日で中等科となった規格外5人のうちの2人。現在3戦終了時間で両名とも11位タイという好成績を残している。前評判どおりだ。その二人がぶつかる・・・。

そもそも俺ら5人はこれまで直接当たったことは無い。授業で簡単な模擬戦はあるものの、俺らは意図的かどうか分らんが互いにあることは無かった。・・・それで今日この場だ。これは湧き上がらん方がおかしいぜ。

中等科¥第一魔法演習場¥第7区画（カミナ視点）

おうおう、あれはウォースか・・・。あっちには魔理沙とレノリアまでいるな。・・・これは下手な試合は見せられねえぜ！！・・・霊夢、こいつの強さ、やばさはよーく分かってる。だが、俺が勝つ！！今日は俺が勝ってみせるぜ！！

「では試合すて」レッドフィンガー「赤き五指！！」
「ト！！！！」

初手はいただく!!

中等科¥第一魔法演習場¥第7区画（俺視点）

やはり先行はカミナか！対する霊夢は……。

「……盾状魔法展開完了……。あんたの脳みそは分かりすぎるのよ！……ちゃんと心積もりは出来てたわよ。」

流石としか言うことの出来無いシールド……。これは見事だな。俺らの中で最硬のシールド張りは健在だ……。つかまあ他に専門家はいないがな……。こりゃあ、カミナ止まるぞ……。この硬さは。

「……ならどういう用意が出来ていたのか、試してやるよ!!おりゃああ!!」

赤い爪とシールドの距離がゼロになる。その後衝突音と互いが干渉せんとする光が湧き出す……。これは完全に、シールドが……。有利、か……。いや!？

「・・・な、これは・・・この性質はあんたの！」

「そうさ霊夢、この性質は灼熱五指ゴットフィンガーだけかと思ったのか？だとしたら甘ええ！！俺様の魔力は全てを突き抜ける！！そう、この侵食能力こそが俺のレアスキルだ！！」

赤き爪はカミナの叫びと同調し、シールドを食い破ろうとする。喰えば喰うほどその圧力を上げ、・・・突破され」

「・・・ふう、なら、私はそれに対応するだけよ。・・・盾状魔法シールド 3重展開！！・・・加えて、・・・球状魔法スフィア 30展開！！」

割れかけていたシールドを補填するかのように更に合わせ掛けでシールドを展開する霊夢。ありゃあ突破は無理だな。・・・時間をかければ出来るだろうが、その後ろにはスフィアの群れが・・・。対策とらんと狙い打たれるぞ！

「・・・まあ、これはちょい俺様のほうが不利だな・・・。」

バックステップでシールドを割ることを諦めるカミナ。・・・だがそこも射程の範囲内！！ん？？腕を上げる??

「展開完了、制御完了、……次は私の攻撃よ、せいぜい逃げ回らないさい!!」

完全に制御されたスフィア30発が、敵に向けて、撃ち出される!!
「……これはカミナには守りきれんぞ……、いや、あのカミナが、守りという選択肢をとるはずが無い!……奴は何かを、何かをやってくるはずだ!!」

「ふっ、……俺には守りの選択肢はねえ。出来るのは全てを飲み込んでやるだけだ!!……ならこれしかねえ!!……」

赤く、紅く、朱く、……蹴散らさせ、飲み込め、砕け散れ!!
灼熱五指!!
「……おらああああ!!」

灼熱五指!!
「カミナの必殺技!!一瞬にして膨れた魔力は、その振り上げた右手を覆い隠し、……前に突き出し、突き進む!!」

「これは!?!、破られる!……なら、侵入侵入めぬ空間!!」

「そうこなくつちなあ、……こんな子供騙しでは!!俺様を止められんわあ!!」

30のスフィアは全てその紅き手に蹂躪、吸収され跡形も無くなる

！・・・なんて技だ・・・。なんか無駄な言葉を発していたが、やるうと思えば無詠唱で灼熱五指ゴットフィンガーは使用が可能だ。なんて恐ろしい、なんて滅茶苦茶な、・・・それでこそカミナだ！！

そしてそれを迎えるのは、こちらも規格外、霊夢の侵り込めぬ空間にじゅうけつかい。これは無詠唱でシールドを遥かに超える盾を生み出す。二重なのは魔法攻撃と物理攻撃の両方を防ぐ障壁を展開していることに由来する。・・・灼熱五指ゴットフィンガーには最適ではなからうか。・・・それにしても、硬い！・・・あれひよつとしたら一筋の流星止めるんじゃない？

「・・・守ってばかりでも駄目だけど、アンタにはそうは行かないわね。・・・でも、球状魔法スフィア50展開・・・。」

霊夢も俺と同じく数の制御に優れている。・・・だがそれではカミナに取り込まれるぞ。

「それがなんの役に立つか！！・・・ほらー、吹き飛ばえー！！！」

カミナの突撃が霊夢の結界に接触！・・・そして・・・。

「・・・くっ、・・・この勝負は私の勝ちね。貴方の背中は、丸空きなのよー！」

完全に受け止めきつた霊夢は、灼熱五指ゴットフィンガーの展開されていない、カミナの背中にスフィアを誘導し、降り注がせる！！

「……すまんな霊夢……。俺は今日、男として負けられないのだ！！」

カミナは掌を開ききつた右手を後ろに向け、掌を窄め、大きく広く展開していた魔力を長い槍のように纏めきつた！！……なんという制御技術……。あいつは見た目通りのがさつな奴ではないな……。そしてその槍を……

「喰らいやがれー！ー、灼熱突貫ゴットランス！！！」

「な！？『パリーン』あがふっ！」

ついに奴は、カミナは霊夢の鉄壁を崩し、霊夢へその槍を叩き込む。霊夢のスフィアは制御をなくし、消滅s「逃れ得ぬ束縛むそつがいん！！」

「な、なんだとうう！！！」

「これで終わりよ！！球状魔法スフィア！！！！」

まさかの霊夢の逃むそつぷういんれ得ぬ束縛！あれで絡みとられると通常魔法防御がほぼゼロ。・・・威力の低いスフィアでもあの数なら十分決め手になる！！

「くそう・・・チクショウがーーーー！！！！」

カミナはあがくがもう時間切れ。再度制御を取り戻したスフィアが、降り注ぐ。

『ドドドドドドツガガガggggg　　ンン！！』

カミナに、勝負を決める魔弾が着地し、カミナの体から力が抜ける。

「・・・カミナ「グローリー」戦闘継続不可能により、博麗霊夢！
！勝利！！！！」

・・・気づけば時間をフルにまで使った試合が終了した。後で聞くと霊夢は常にシールドを体の回りに展開しており、それがカミナの攻撃のクッションとなったことであそこから逃むそつぷういんれ得ぬ束縛を打てた

とのことらしい。・・・かなり効いてはいたみたいだが・・・。カ
ミナ・霊夢は治癒魔導師に運ばれていったな・・・。まあ、今日は
あと一試合だからなんとか回復してくれや。

それにしても、いい試合を見せ付けてくれる・・・。なんか、体が、
心が、熱くなるぜ!!

・・・次は、4区画か・・・。よし・・・。

中等科¥第一魔法演習場¥第4区画(？視点)

「スター」^{スフィア}球状魔法300展開、制御、射出準備完了・・・。よし、
貴様!!名前は知らんが、弾丸の準備は十分か!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・あ、ありのままに起こったことを話すぜ!

今日最後の試合でランク2位と戦うんだと思ってテンション下げた試合に臨んだと思ったら、気づくとベットに寝ていて授業が終わっていた！

な、何を言っているのかわからないと思うが、俺も何を言っているのかわからねえ！

白い悪魔とか金色の死神とかそんなちやちなもんじゃねえ、もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

中等科¥第一魔法演習場¥第4区画（俺視点）

ランク38位？の名前知らん奴に、300のスフィアを打ち込んでやった。

……結構な開放感ともに、……なんだろうこれは、もしかするとこれが、罪悪感って奴か……。いやあ、それ無いよね、だってあれくらい俺なんとも無いしな（ニコリ）

その日から俺は、『数多くの強力な魔弾を無慈悲に降らせる存在』^{アイミティア}として流星群と呼ばれるようになる。

『初日終了時ポイントランキング 159名中』

1位	49ポイント	アーウェット∥ルーデンス
2位	48ポイント	トレイル∥ディン∥ウォース
2位	48ポイント	レノリア∥アークス
4位	46ポイント	霧雨魔理沙
5位	45ポイント	博麗霊夢
6位	44ポイント	
6位	44ポイント	
6位	44ポイント	
8位	42ポイント	
9位	41ポイント	ウエン∥ブルーハート
9位	41ポイント	
11位	40ポイント	カミナ∥グローリー

・
・
『

1 - 13 話 攻守乱舞（後書き）

今回は短いです。

区切りが良かったので・・・。

あと私自身が把握しづらいたのでタイトルをつけます。

あと150、000PV、15、000ユニーク有難うございました！！

1・14話 交錯する思い（前書き）

話が長くなると相関関係を気にするようになって、そうするとめんどくさくなって、書く気が減衰して、

投稿が遅れました……！！

どうだ！完璧な理由だろ！！すみませんでした！！！！

1 - 14話 交錯する思い

神界¥ノレービア神の屋敷¥ノレービア神の間（ノレ様視点）

「ヘー、あの子達頑張ってるじゃない。レノリアなんて、たいした魔力も無いのに、ああ、幻影魔術は昔から得意だったわね。ふふふ、懐かしいわ。。。」

.....

「.....ああ、レノリア様ですか.....まさかレノリア様があのようになるとは思わなかったのですが.....あの人間へはかなりの思い入れがあったみたいですね.....それにしても何故あの人間にあそこまで強力なスキルを授けられたのですか?.....あれで力使いすぎてたせいで最近のこの忙しさがあるわけですか.....」

.....

？￥？（？視点）

「・・・最近世を騒がしている理解できぬ存在だが、この生物の恐ろしさをここで再確認する。管理局が発表している情報とある筋からのものを総合的にまとめた特徴をここに記す。

理解できぬ存在には大きく分けて3つの特徴がある。1点目は個体数である。これが最大にして最悪の特徴である。実際、理解できぬ存在の総数は全く予想もついでない。管理局発表では凡そ50万の固体をこれまでに倒してきたというデータがある。だが第8管理世界の最前線で軍を率いるトレイル「ディン」ウルザ臨時大将の話では、倒してきた個体数は理解できぬ存在へは影響が殆ど無いと見られる、とある。我々は多大な殉職者と莫大な装備品被害を被っており、それ以上に被害のでているであろう（撃墜率は理解できぬ存在：魔導師で約500：1とのデータがある。）理解できぬ存在には影響が無いという。これは個数差によるものと理解するほか無い。幾ら倒したところで氷山の一角という結果になると軍としての士気にも関わってくるだろう。

2点目は行動である。現在理解できぬ存在が行っていることとしては、我々と戦う以外は、地面より上に存在している全てを飲み込むことと巢の建造程度しか確認が出来ていない。また、互いにコミュニケーションを行っている仕草も確認出来ず、更には目的も不明ときている。そしてある程度破壊しつくすと巢を次の惑星に向け発射する。管理局発表では、巢の新たな発射は全て打ち落としているので現在以上の被害域拡大はない、とあるが眉唾物である。固体として空間跳躍が可能なら巢も可能であると考えるのが通常であるからだ。正直ここは容易に信じられない点である。

最後は進化速度である。私はここに一番注目をしている。理解で

きぬ存在は驚くべき速さの進化速度を持ち、実例として魔法障壁、飛行能力の取得などがある。これ等は出現当初では見らない特徴で、我々との戦いの中で有用であると判断し取り込んだものと思われる。最近では空間跳躍のスキルを持った個体がミッドチルダで確認され、これが原因で大きく理解できぬ存在の存在が明らかになるといふ事件があつた。これには管理局も想定外であつたようで、あからさまな時間稼ぎとして例の固体を撃つた、トレイル・ディン・ウォースを用いて時間を稼ぎ体制を整えた。以後空間跳躍種は見られていないようだが、5歳児に倒されるレベルなので実際理解できぬ存在としてもテスト段階であつたのではというのが一般論となつている。

さてこの空間跳躍のスキルだがどこでこれを取り入れたかが現在争点となつている。先に挙げた二つの能力は実行中に理解できぬ存在に補足・解析され、取り込まれたと考えられており、空間跳躍のスキルはその例に漏れてしまう。何故なら実行してしまえば解析時間など無くなつてしまうからだ。また、遠方から視覚で捕らえた能力を解析出来るとするのならばこれは非常に脅威となる。だが理解できぬ存在はこれまでの傾向を見ると比較的難易度の低く汎用性のある魔法を取り込んでいる。これはまだ魔法に慣れていないからであるという説も有るが、どちらにしろ高位魔法である転移魔法はまだ取得段階で無いというのが総意である。また、理解できぬ存在はこれらの技術をコピーすることでは進化が確認できておらず、自ら開発したものでないと思われる。実際のところはまだ不明な部分が多く判断材料の不足感は否めないものの、筆者はここにまだ驚くべき理解できぬ存在の事実があるのではないかと踏んでいる。・・・

『

私はそこまで読んで雑誌を閉じる。

「ふーむ、中々に、一般雑誌といえど侮れん。ここまで書かれているとは……。特に最後の考察は興味深いな……。」

私はとある団体の代表をしており、その情報網で一般人の知らない情報を取り込んでいる。この雑誌はその私ですら唸らせる内容を書せていた。

「やはりまだこういう雑誌にも目を通しておかねばならないということか。……。初心忘れるなかれ、ということかな。」

私が代表を務めている、慈善団体『神の導き』は恐ろしい勢いでその会員を増やしている。そのせいで時間がなくなりこの様だ。団体創設前は時間をかけて雑誌にも全て目を通したもののな、全く人というものは不安に対して弱い。

『神の導き』の表向きは理解アンソウンできぬ存在に対する不安を、団体の誇る広大な情報網を元に情報供与を行い、軽減をするといったことを趣旨としている。またカウンセリングのようなことも行い、未来に對し絶望しか感じられない人間を立ち直らせている。

だが実際は情報供与・カウンセリングアンソウンの際には我々に都合の良い情報だけを刷り込み、まるで理解できぬ存在は我々を裁きに来た神の使いであるように思考を導いている。表向き、洗脳が完了すると絶望の対象から信仰の対象に変わったので明るくなり、社会活動がスムーズに行くようになるので、この団体は大きな成果を挙げているかのように思われるのだ。そして当然人が群れると金が集まり、金

が集まると権力が膨らむ。いまや管理局内にも会員は至るところに存在する状態となり、管理局のつかんでいる情報はすぐに私の耳に入れることができるようになっていく。また、管理局からのスパイなども内部情報を先んじて掴む事で潰す事が出来る。

「……いつの間にか一端の悪役になったものである……。」

「……足場は整いつつある。……そして次は理解アンソウできぬ存在を更に絶対的な存在にするのだ。……それにはウォース君、……君が必要となるのだよ。」

私はこれからのプランを再度頭の中で描き、口を歪ませる。何事も上手くいつてきたのだ。これからも私のプラン通り全ては上手くいくのだ……。

「……さて明日はミスカトニツクの戦闘試験最終日、民間開放の日だな……。流石に英雄が出場するというからチケットの確保は少し難儀したが……。私が目的のものを得られないはずが無い……。徐々に実物を拝見させていたたくよ……。」

「畜生めが、・・・やはりそう上手くはいかんか・・・。」

俺は数十枚程の報告書に目を通しながらばやいた。案件は当然理解アできぬ存在のことだ。運命の日以降、情報部は理解できぬ存在アンソウンの議題をメインというか、最早専属ともいえる割合で時間を割いている。今日読んでいる書類もそうで内容は管理局の理解できぬ存在アンソウンへの対策批評である。それを確認しこれからの政策へ生かそうというのだが、何故こんなことを情報部がやっているのか分からない。政策ならそれを担当しているところがやるべきなのだ。何故こんなことやってるんだという思いが最近では異様に膨らんでいる。そしてその報告の内容もあまり芳しい内容ではない。ストレスは膨らむばかりだ。俺が禿げたらどうするんだ？

「・・・えつと・・・なんだこのグラフは・・・。管理局の支持率??・・・凄いな・・・異様に下がってやがる、逆に笑えてきやがる。英雄作戦後バツと上がり、その後上がることなくか・・・、チィッ。・・・あああ、そっぴやあいつらはどうしてるんだあ。異様に優秀な奴らだったかな・・・。」

そう呟き、俺は情報部仕様にメガチューンされたエレメンツを起動、トレイル＝デイン＝ウォースの個人データを物色する。脇道にでも反れてないとやってられん。

「……ん??…これは、へー戦闘試験か…そういやあいつらの戦闘技術は確認していなかったな…。うん、頭も痛い気もするし、ちよい行きますか…。」

「…あー私です、校長、ファウン＝エノアスです。…そう、教室を爆破した…。いやいやすみませんでした、…。え今ですか…。何言ってるんですか、ちゃんとやってますよ、…。いやほんとですよ。…はーもういいですよ。で、すみません、明日の試合、私、入れていただけます??…」

「…何とか入場権ゲットだ。…あいつら揃いも揃って上位に食い込んでやがるんだもな。俺が行きたくなるのは仕方ない。…てか中等科だろ、これ。…6年の飛び級ですか…。まあ、あれで初等科もないか。」

俺が感慨にふけっていると部下のアーセン＝ルドワード二尉が俺を熱いまなざしで見つめているのに気づいた。

「…止めてくれよ、俺に触れると火傷するぜ…。俺はやれやれといった感じで視線を二尉に向ける。」

「……って、三佐？まさか明日逃げる気ですか??…」
「ドサツ！」「ん」「ドサツ！」「な」「ドサツ！」「に」「ドサツ！」「仕事が残ってらっしゃるのに…。」「いや、ちよい待て、何でこの俺がそこまで急がしくやらにゃあいかんだ」「…それは貴方が三佐という肩書きでありながら外でふらふらふら、してるからです！」「お、お前、上官に向かって「なら！上官らしいことをして下さい！」「う……。分かった。ちゃんとやるわ、」

「……明後日になー!!」 『スルリ!!』 「あ!!??、また!! スキル使って!!!」

「……くくく、何回同じことを繰り返せばいいのだあやつは……。俺を止められるはずないだろ……。このレアスキルを持つ俺をな……。それにしてもあいつは黙ってれば可愛いやつなのにいつもいつも叫んできやがって……。あいつの上上げる評価下げてもやろう……」

学園¥中等科¥第一魔法演習場¥第5区画(神視点)

ミッドチルダ有数の名門校であるこのミスカトニツク魔法学園の中等科戦闘試験は年に4回あり、組替え試験の様なことも兼ねられている。ポイントが上位のものからA組に振り分けられ、最後がE組という塩梅だ。尚、事務部隊・研究部隊は別の日に別の試験があり、その点数でまた振り分けられる。尚、試験が異なるので枠は別に設けられている(A組には、戦闘試験1位と事務試験1位と研究試験1位が集うこととなる)。別専攻の生徒を一つのクラスに纏めているのは、1年目の授業は浅く広くをモットーとしており、皆が同じ教室で学ぶようにしているからである。2年目からはコースは完全に分かれ、専門授業が行われるようになる。当然専門は深く深くが当然である。

ここで問題となるのはこのシステムではクラス変更が頻繁に起きて

しまうということだ。当然、上位のクラスではそのレベルに沿った高いレベルのカリキュラムが組まれており、急に上がったきたものにとつては適応がかなり負担となる。当然誰もそこに手助けなどはない。（ここは中等科。自ら望んで学びを求める人間に慈悲などない。助けがほしいなら自ら動くしかない。）最悪効率がかなり落ちてしまうかも知れない。それ以前に、高いカリキュラムをこなした生徒に勝つとなると、この試験は急に危険なものとなってしまう。だが生徒達は果敢に上位クラスを目指し、怪我を恐れず試験に取り組む。これには簡単な理由がある。それは卒業後、ミスカトニツクのクラスというものはかなり公僕に対して影響が大きいのだ。簡単に言うとミスカトニツクのA組は管理局で出世が早い、能力・実績以上の速度をもってだ。この明白な理由が皆をこの試験へ走らせ、毎年、脱落者を生んでいる。そうは言うものの、最終学年の最後の試験の結果が最終学歴となるので、それまでは比較的雰囲気は温和だ、比較的ね。

その試験も本日で4日目。即ち、最終日前日である。試合は1日5試合、4日で20試合。最終日はチーム対抗の乱戦なので個人戦でポイントを稼ぐには今日で終了となる。さてさて現在の試合は・・・、ランキング1位のアーウェット「ルーデンスと同2位のトレイル「デイン「ウォース、・・・これは好カードねえ。

「あ、素が出ちゃったわ。」

・・・アーウエツトールーデンス。19試合、19勝、獲得ポイントは188、堂々の第一位だ。俺は19勝の179ポイントで2位だから随分とその戦闘過程に差があったのだろう。だが188って・・・燃えてくるじゃんよ!!

俺ら二人は競技場に向かい合う。競技場は野球場の内野くらいの広さで、場外は無し。ただ競技場内で戦うことを原則としており、出ると減点対象となる。空中もその例に漏れず、競技場から垂直方向になんか結界が張っており外に出ると分かるらしい。俺はそれを知らず減点をくらった。

やつは肩に届く白色の髪をそのままにしており風でサラサラと揺れている。背も低く、表情さえ温和であれば女性とも初見では捉えることが出来たろう。だが、その表情の奥に浮かぶ好戦的な眼と不気味な笑みがそれ等優美な要因を全て打ち砕く。

「・・・どつちが、アクセラレータ一方通行なんだか・・・。」

そう呟かざるを得ない。・・・あの外観はアクセラレータ一方通行に他ならない。俺もそうなのだが。まさか奴がこちらに来てはいるはずも無く、先ほ

ど試合を観たが能力は全くの別物だった。・・・虎の例のようなど
こだろ。

「それでは、両者準備は良いか・・・。」

周囲は事実上の個人戦決勝を観ようとする人が、かなりの数がいる。
確かにこの試合の前には結構な時間待たされたな、もしかすると他
が終わるのを待っていたのかもしれない。

「・・・では、アーウェット＝ルーデンス対トレイル＝ディン＝
ウォースの試合、始め！！！」

試合が始まる・・・。

1 - 14話 交錯する思い（後書き）

最近、暑かったり寒かったり大変ですねー！。
皆さん風邪にはご注意を。

わしはすでに今年インフルにかかっているので、浮気なんてないと思います。

ということなので、風邪菌の皆様、わしはもうこれ以上空気がないのでお引取りいただけますようお願いします。

・・・かなりマジで。

1 - 15話 一方通行（前書き）

今回はこれまでと異なる形式で書いてみました。

（ ） 思考内容

「 」 会話

なんかこっちの方が楽なのでこちらでよいという方がいらっしやったら感想欄にコメントください。

もし駄目ならその場合もにコメントください。

『 いいよん 』、 『 駄目じゃボケ 』 位の表現で結構です。

1 - 15話 一方通行

アーウエット⇨ルーデンス、トレイル⇨ディン⇨ウォース、個人成績トップ2の二名の戦いは、

「ふっ！」

「くっ!？」

トレイル⇨ディン⇨ウォースの、

「がはっ!！」

大会初の被ダメージにより始まった。

アーウエットが繰り出したのはもう非常に単純な正拳突きである。ただ、そこまでがおかしかった。試合開始の合図とほぼ同時にウォースの目の前に移動し、そこから間を空けずに攻撃を繰り出す。これにはウォースも処理速度が追いつかず、通常通りの魔法反射^{ミラー}だけを展開、相手の魔法、強化は飛散させたものの、拳は止められず一撃頂いたという按配だ。

手札は隠しておきたいが奴の速さは簡単にいなせないな、とウォースは考えながら先ほどの攻撃を思い返す。ダメージは大きくないが、これまで防御の魔法を全く身につけていないウォースからすると通常の打撃も無視できない問題となる。これまで接近戦をウォース自

身で招いたことは無い。それは自分が接近戦を苦手であると自覚しており、出来るだけ距離をとり封殺しているからである。

だが、今回の敵であるアーウエットはそう簡単に行かない。彼の魔法特性は身体強化であり、その属性の魔法は一通り修めておりかなりの腕前である。それだけでかなりの脅威なのだが、更にはレアスキル持ちでありその内容が強化増強^{サニツヨク}、強化魔法を更に数段階効果を引き上げるといったものである。飛行速度強化に打撃強化、防御強化と非常に使い回しがよく、今回の大会ではポイントも稼ぎやすい能力になっている。基本戦術としては素早く懐に入り込み一撃を打ち込む、これが単純だが強い。盾状魔法^{シールド}が無いなら打ち込めば終了、あっても割れる威力は十分にある。時間がかかってもその異常な防御力により攻撃は全て防いでくる。敵に回せば非常にやりにくい相手である。

「へー、英雄殿にまさか俺の攻撃が届くとは思わなかったぜ、
．．．きつちり魔力は消し飛ばされているようだが、．．．効いただ
る??？」

「．．．まあな。それにしても流石だな、その速さは．．．少し
驚いたぜ。」

「驚いても頂けるなんて、恐悦至極だぜえ。俺のような下々の人間
はセコセコ動き回るしか脳が無いんでな、少々見苦しいかもしれな
いですが、．．．勘弁して、くれよっ!!」
「くっ!!」

ウォースはまた一撃を貰う。初手による打撃で少し吹っ飛んだ距離
を、サラッとアーウエットは詰めてきて二撃目を打ち込んでくる。
再度魔法は飛散させ、拳だけを貰う。少しやばいな、とウォースは

思う。ウォースの得意魔法は多数射撃である。強化は得意でないウォースは視覚強化を得意とはせず、急な加速をしてくるアーウェットを回避できない。だから現状からの離脱及び攻撃の回避は出来ない。また攻撃に関しては撃つたら必ず当てられる自身はあるが、打つ前に打撃を入れられる。流石のウォースも打撃を入れられながら、魔法を跳ね返し相殺しながら、一筋の流星を打ち込むことは出来ない。やはり一方通行アクセラレータを使って打撃を跳ね返すしか、とウォースは思案するがいい判断とはいえない。別にこの試合を落としたからといって特別大きな意味はないが、ここで手札を晒すというのは大きな意味があるからだ。

「おいおいおい、何もしねえのか？あまり一方的に苛めるのは、性には合っていないんだがなあ！？・・・まあ、これまでの奴らはそうだったがお前は少しくらいは俺を楽しませろ、よっ！！！」

三撃目。・・・もうそろそろ限界である。これ以上貰ってしまえば地に手を突くことになるだろう。一方通行アクセラレータを使わなければ、または別手段を思いつくか。ウォースは考えに考える。

アーウェットの三撃目がウォースに突き刺さる。先の二撃と同様にウォースは5メートルほど飛ばされてから体勢を立て直し、両者ならみ合う。同じ体性には戻って入るが確実にダメージはウォースに蓄積している。少し足元がふらついているのが分かる。それを見守るいつものメンバー。

「なんだウォースの奴、ささつと撃つて、終わらせちまえよ！！なんであんなに受けてやらなきゃならないんだ！」

「あれは仕方ないぜ。私や霊夢、カミナのレアスキルはほぼ零時間ノーカウントで発動できるけどウォースはそうじゃない。なら発動前に殴られるリスクを考えると、簡単には撃てないぜ。」

「それに、彼の能力も万能じゃないから、撃つた後の攻撃がもしあったら魔法を跳ね返せずに受けてしまうかもしれない。そうなら一発KOになっちゃうわ。」

「・・・なんだよ、ならあのいけ好かないあいつにウォースは負けちまうのかよ！！・・・くそつ、総合一位だかなんだか知らねえが、ウォース、負けんなよ！！！」

仲間のやり取りを横目に黙っているレノリアは、一方通行の存在を唯一知っている彼女は、彼が今抱えているであろう葛藤を理解していた。・・・一方通行アクセラレータを使うか使わないかの葛藤である。

(これはまずいですね・・・。一筋の流星と強化増強の相性が悪すぎます。攻められない、守られない、かわせない、と無い無い尽くしです。・・・でもウォース、ここは、・・・。)

牽制に次ぐ牽制。三撃を放ったアーウェットも、それを身に沈めたウォースもただ突っ立って次の攻撃を待っているわけではない。両者ともに高速移動の使い手だ。それはもうビュンビュンと移動しまくる。基本的な流れは、ウォース移動 アーウェット瞬間攻撃可能位置まで移動 機を伺う Endless。ウォースは動き回るこ

とも出来るがそれには一方通行の長時間使用が必要となる。これにはかなりの演算処理が必要であり、それによる精神力の磨り減りが起きてしまい、集中力の低下、能力・魔法の精度低下が引き起こされる。これはアーウエットが移動することにおけるリスクより大きい。なので移動するだけではウォースがどんどん窮地に追いやられていくこととなる。だが動かないと攻撃が来るので仕方ないが動かない。

これが一回パーツとアーウエットを上回る速さで動き、ドカンと強力な一筋の流星を撃ちこみ勝利できるなら良かったのだが、そのレベルの速度と威力の併用はまだウォースには出来ない。これ等もろもろの制約は、山田時代に彼が持っていたイメージであり、これを正確にノレビアがトレースしてしまったことが原因である。

「そろそろ動きが単調になってきたな。予測しづらい動きで少し驚いたが、もうここまでのようだな。ケリつけるぜえ。」

アーウエット＝ルーデンス。彼はその口調や風貌と異なり堅実な戦い方をしてくる。有名な家柄ではないのでかなりの努力人ではないのだろうか、そしてそれが彼の一番の強さではないのだろうか、とウォースは感じていた。能力も戦い方も王道なのである。

（アクセラレータの風貌にしてこの能力。・・・強化に更に強化をするなんて、何て真っ直ぐな奴だ、まさしく、一方通行。・・・なら俺の一方通行、秘蔵している場合じゃねえよ！これはどちらが上かガチでやってみてやる！！）

「……!!」

「おや、雰囲気が変わったな。……ようやく本領発揮か……。
てめえにはまだ幾つかわかんねえところがあるんだよ。……まだ何か隠しているだろ、出し惜しみはすんな、そんなつまんえことはするんじゃない、よ!!」

第四撃目。

これまでのように受け止めれば間違いなくウォースがこの試合に負けてしまう。

何かを起こさねばならない、そんな一瞬に、

「ぐつ!?」
ミーティア
「一筋の流星!!」
「!!!!」

白い光が炸裂し、これまでと全く逆の結果となる。ただその勢いは三回の合計に大きく利子を乗せて、白髪の少年の体を、吹き飛ばす!!

「やりました。」

レノリアは仲間と一緒に喜ぶ。仲間たちは今の一瞬に起きたことをどれだけ理解できているかわからないが、とりあえずウォースの反撃に喜んでいるようだ。

（そう、うじうじ悩む必要は無いのです。なぜなら貴方はもうすで

に移動手段などに一方通行アクセラレータは使っているのです。どうせ、ああすいいな、程度で今回も終わるのです。()

「……くっそ、何がどうなって、やがる……。」

彼の呟きは最もである。アーウェットはこれまで通り拳を叩き込んだ。これまでと同じようにウォースが吹き飛ばす目論見でだ。むしろこれまでより威力を込めた。彼としてもたらだらと試合を引き延ばすのは良しとしないからだ。相手の動きが単調になりかけたその瞬間、好機と判断し必殺の一撃を叩き込んだのだが、まずは強烈な拳の痛み、その直後腹部への鋭い衝撃が彼に襲い掛かった。後者はウォースの魔法であることは理解できる。詠唱もあった。だが前者は何だ。そしてウォースは何故立っている。何故魔法を撃てる。何故何故何故？

(……いや、パニックになるな。俺はまだ戦闘中、まだ負けてねえ。なら目の前の敵に標準を定める！)

ウォースはこの瞬間再度目の前の敵の恐ろしさを実感した。理解不能の出来事に見舞われ、攻撃も受けたその直後彼の表情にはパニックの色が見えた、が即消え去ったのだ。

ウォースは当然一方通行アクセラレータを使用してアーウェットの攻撃を跳ね返した。魔法だけなら補助魔法なのでベクトルを操作しても相手には影響は無いが、加速を乗せた拳はウォースに着弾した際に作用反作用の法則が適応され、これ进行操作することにより反作用を数倍とさせ、

アーウエットに跳ね返す。アーウエットは通常、反作用分より多目に魔法で防御はしている。だがこの試合に限り保護する魔法がなくなってしまうので、拳がニュートラル状態で耐えうる程度で拳を振るっている。四度目でもう決着をつけようとした今回はそのぎりぎりの速度で拳を振るった。彼は拳を武器とするので、肉体的にもしつかり鍛えており通常の人間よりは耐久力はある。しかしそれにも限度があり、今回のような限界ぎりぎりである状態に、更に加えて数倍の力が加わることとなると無視できないダメージとなってしまう。実際彼の拳は少なくともこの試合中は振るうことは出来ないだろう。

その様な詳細も分からず、大きなダメージだけ残ったこの状況での復帰力。

(パニックってる中に一筋の流星ミーンティアぶち込んで終了かと思ったんだがな。・・・奴さん中々やりおる。)

「ようよう、てめえ、面白いことをしてくれるじゃねえか。おかげで右拳がずたずただぜ。・・・何をやったか気になるが、先に試合を終わらせてやる。」

「そうか、負けてくれるのか？」

「てめえがな。」

そう一言零して、アーウエットは、これまでにない、魔力を顕在化させた！

これまでは淡く薄紅色の魔力が体の表面に展開している程度だったが、今は紅い魔力が彼の体をすっぽりと球状に覆っており、彼の姿

を霞ませてしまっている。

アーウエットの恐ろしさは、その近接適正・判断力に加え、絶大な魔力が該当する。だが前二者で通常問題は発生せず、実際ここまでの試合でこれほどの魔力を展開したことは無かった。ここに来てウオースが一方通行アクセラレータというカードを切つて来たと同様に、アーウエットも最後の札を取り出してきたのだ。

(・・・はぁー、なんて出鱈目魔力。こりゃあ、魔力だけならSは硬いだろうな。・・・まったく、俺はこだつちゅうのに、ちよつとは遠慮しろつて。)

「・・・さて、もうこうなつたら、手加減は出来ねえぞ、肉塊とならないよう気をつけ、な!!」

ズン、とこれまでと比べ物にならない衝撃が会場を揺らす。本気のアーウエットによる手加減無しの一撃。

(・・・おいおいおい、なんだこの威力半端ねえよ。・・・で、奴さんは?)

ウオースは当然だが一方通行アクセラレータで物理攻撃も魔法攻撃も利子つきで跳ね返す。しかし今回はアーウエットに苦しそうな表情は無い。むしろ半笑い。

「くくくくく、そうか、やはりな。・・・てめえ、魔法だけじゃなく、物理攻撃も跳ね返せるだろ。・・・さっきのは俺の拳を、物

理防御と魔法防御の盾状魔法で覆いその上を魔法で形成したグローブを乗せて殴ったんだあ。するとなあ、グローブは完全に割れて、物理防御のシールドにかなりの付加があった。しかも俺が殴った以上のインパクトでだ。．．．ん？じゃあ、てめえ、．．．跳ね返すインパクトのコントロールも出来んのか？．．．ならあの高速移動も説明が付くな．．．。おいおい、てめえ、そりゃ反則クラスのスキルだぜ。」

(．．．．．うわぁー、信じられない速度でばれていつてるよあ．．．流石見た目一方通行、理論的にぐさぐさと攻めてきやがる。)

「．．．考察ご苦労さん。．．．じゃあなんだ、その内容じゃあ、お前の負けを認めてくれるのか。」

「アホぬかせ。．．．まだだ、この野郎が。」

「なら、今度は、こっちからだ！！」

ウォース、多数のスフィアを展開。アーウエット即座に介入。だが攻撃は伝わらず。アーウエット二撃目を入れるが同様。直後ウォースの魔法がアーウエットを襲い掛かる。アーウエットこれを完全に防御。だが、

「．．．アーウエット、この勝負、俺が攻めに回った時が、貴様の負けだっってこと理解しているよな。」

ウォースは高らかと宣言する。その手元には先ほどとは段違いの魔力の込められたスファイア。そうそれは実技室を破壊した時の規模に匹敵していたのだ。

この一筋の流星ミーティアという魔法は何てこと無いスファイアをベクトル操作により極限まで発射速度を高めることで有り得ない破壊力を生み出している。だが限界まで速度を上げるためにはこの何てこと無いスファイアを完全に制御する必要があり、そのコントロールはかなり困難となる。形状均一性、密度均一性、ベクトルの把握、操作するベクトルの選択と規模、発射後の過程と結果の予測など、気にする点が多い。そしてそのスファイアの魔力量が増えると乗数的に難易度は上がる。これをクリアするために何よりも必要なのは、費やす魔力量と時間だ。

・・・そう、アーウェットはウォースに時間を与えてはならなかったのだ。その為には自らが時間を制御できる、優位な展開を継続し、勝ちに持って行かねばならなかったのだ。・・・しかしもう遅い。一度ウォースが攻撃に回ればその類まれない計算力により場を支配し、そして時間を作り、

「終わりだ。」

最後の一撃を生み出す!!

「一筋の流星!!」ミーティア

「ちくしょおおおおおおがああああ!!!!」

スゴーション、と爆音が上がる。流星はアーウェットとウォース。その異常な防御力と、それを考慮に入れギリギリ耐えられない威力に調整する計算力。玄人同士の戦いほど安心してみていられるものはない。この試合を最後に持ってきたのもそれが理由かはてさて。

結果一筋の流星はアーウェットの厚い防御壁を微塵にし本体へ到達、ミイティア尚も止まらない勢いは体を吹き飛ばし、端の壁に激突させ彼は息も絶え絶えな状態だ。誰の目からしても戦闘継続は不可能だろう。その状態を確認し審判（殆ど何もやってないが）がこの試合の終わりを告げる。

「この試合トレイル・デイン・ウォースの勝利。そしてこの試合で個人戦終了となる。明日最終日は集団戦となり、外部の人間を招いての開催となる。各生徒は己の力を十分に発揮し、ミスカトニツクの名に恥じない結果を残すように。・・・それでは解散！！」

勝利の余韻に浸る間もなく明日の告知で身が引き締まるウォースだが、ふと顔を上げると何時ものメンバーが満面の笑みでこちらに向かってくる。色々と悩む試合だったがこれでよかったかなと、その表情を眺めながらウォースは思った。

1 - 15話 一方通行（後書き）

もうすぐGWですね。

もうすでに突入している方、はしゃぎ過ぎて怪我しないように。まだの方、あともう少し共に頑張りましょう。

毎日がGWの方、きっとありがたみが無いんでしょうね・・・。

まあともかく、はよGWになれー、と祈願しているとねでした。

1 - 16 話 疑念(前書き)

皆さんGWは楽しんでますか？

まだまだ日はあるので後悔しないよう目一杯遊びましょうね！

1 - 16話 疑念

「へー、まだまだぎこちないけどある程度は能力を使いこなしてるのね……。」

ミスカトニツク中等科一年の戦闘試験の風景を見ながら、その女性は呟いた。その女性と一概に言っても、彼女の外見は人ごみに紛れていたとしてもその存在が埋もれることが決まないド級の美少女であり、まじめな顔をしていれば神聖な場すら形成してしまう（現にしている）普通とはかけ離れている存在だった。現在も視線を集めているはずだったのだが彼女は気配を絶っていたのでそのような有様にはなっていなかった。

神聖、それも当然彼女は真正正銘の神様、それも二級神という、たむろする神様の中でも最高クラスの神様である。名前はノレービア、『運命』を司る神である。ちなみに本日は部下に仕事を任せ、最近気にしている人間の様子を見に来たのである。当然部下達が表面上は笑顔で、心の中で号泣していることはお見通しであった。

「でも、たまにはいいでしょう。先ほどのレノリアの試合も素晴らしかったし、今日は見に来て正解だったわね。」

そう、レノリア「アークス」。元は神様であったが、第二級罰により人間へと転換をさせられた元ノレービアの下位神である。ノレービアは見込みありとして結構目をかけており彼女についてはよく知っていた。……そう、神でなくなった際の実力も把握していたはずだったのだが、

「……過小評価をしていたということね……。まさか、こう化するなんて……。」

レノリア「アークス。戦闘試験、個人戦最終日を終えた時点で、20戦20勝、獲得ポイント180でウォースに続く第三位。特別レアシキルも無いしファンタズマゴリア（幻想世界はオリジナル魔法なだけ、ただ効果は大きい）、生前凄い魔導師であつたという過去もない、当然神力も残っていないのに、あの順位。他の霊夢や魔理沙の方がダンチで才能はある。それをさも当然の結果と言わんが顔で達成してしまったのだ。

でもまあその結果は良い。腐っても元神様だ、長年の長というものがあるだろう。特に神は多くの人から神力を得ることで、同時にその生き様をトレースしてしまう。そこから得る情報は絶大で、少なからず戦闘に影響があるのだ。戦闘方法もなんだか泥臭かつたし。それよりノレービアが驚いたのは、

「ノレービア様？さっきからなんで私に目を合わせていただけなのですか？やはり二級罰を受けた私とはもうお話いただけなのですか？」

彼女は私を知覚しているのだ。第二級神が、神力を使い、その神々しき存在を無くす様、ただ暴力的に存在を捻じ曲げている、にも拘らず、レノリアという一介の人間でしかない者に、いや神でも早々今のノレービアを知覚出来まい。それを……。

「ホントどうされたのです？……そういえば、なんか、薄い？ですよ？何かありましたか？」

「う、すい……ねえ……。まあいいわ。レノリア、私は消えてるのよ、ここでは目立つから移動しましょう。」

「えっ、えっ、あつ、わ、分かりました……。すみませ」謝らな

い！」

「ハ、はい！」

「こちらが落ち込むわ……。」

「えっ、何k「さっさと行くわよ！」

「はい！……あ！皆さん、私少し用事を思い出したのでここでお別れです、ではさようなら。……ちよっと待ってくださいよー・

……。」

「あー、あいつ何処行くんだ？」

今日のプログラムも終了し、皆と明日に備えさっさと寮に帰ろうとしていたウォースは、ぱたぱたと駆けてくレノリアを見て呟いた。レノリアは急に何も無い方向を向き話しかけ、表情をあわただしく変え、最後はどこかへ行ってしまったようだ。でも『ノレービア』という単語が出ていたのでレノリア限定の話だと結論付けて、考えるのを終了した。

「何だったのかしら。でも……んーなんか、おかしいわね。……御社の雰囲気がある、けど……、しかも巨大な……まあ気のせいよね。」

霊夢の呟きを聞いたウォースは少し苦笑しながら、その感性の鋭さに内心驚いた。

(巫女衣装は飾りじゃないってか……。)

そこでそっぽを向いていたカミナがまた馬鹿なことを閃いた顔を
して霊夢に近づいていく。

「ホームシックじゃないのか、霊夢。個人選が終わったから一息つ
きたいのか？まだ明日があるんだぜ、しっかりしろよ！！」

「そんなんじゃないわよ！アンタこそどうなのよ、キノアなんて遠
い所から来たんだからそろそろ帰りたいんじゃないの？」

「なんだとー！このカミナ様がそんな弱気なわけないだろう！ホー
ムシックなんて俺様とは正反対の軟弱者がかかるものだ！俺様がか
かるなんて万が一つもあり得んわ！！」

「そこまで真剣に拒否されるとなんだか凶星かと思ってしまうぜ。」

「そうねえ、カミナ、正直言ってみなさいよ、私たち決して笑わな
いから。」

「・・・なんだとーお前等俺様を馬鹿にするなー！！」

ばかばかしいやり取りを見ながら、ウォースは前世の高校時代を思
い出した。

（あの頃もこんな馬鹿なやり取りしていたなあ。・・・ふふ、なん
だか懐かしいわ。・・・よし！おれも混ざるか！！）

三人での馬鹿話は枠を広げ、四人となり、その内容は更にどうでも
いいものとなっていく。同級生はやはり子供だなという冷えた視線
を送り、彼らの存在を知らない者達は何故中等科敷地内に子供がい
るんだと目を細め、教師達は日頃見られないその幼い様子を見て安
堵をした。

しかし決して忘れてはいけない事実、中等科一年戦闘試験、個人戦
でこの一見初等科としか思えない子供達は全員がTOP15内であ
るということは確かであり、それを思い出した同級生・教師は複雑
な思いに身を馳せていた。

ノレービア（透明）に着いて行ったレノリアは人のいない公園の端に来ていた。この学園はかなり広いので公園も点在しておりこれもそのうちの一つであった。

レノリアは、もう良いだろうと、周囲を確認してから思い、ノレービアに話しかけた。

「お久しぶりです、ノレービア様。先ほどはホントにすみませんでした。むしろ私が馬鹿な子になってましたけど。」

「ホントよ、他の皆には見えていなかったから、貴方は明日から不思議ちゃんになってるかもね。」

「・・・それは少し嫌です。・・・ところでノレービア様はお忙しい身なのに、こちらへは如何様でこられたのでしょうか？もし私にお手伝いが出るのであれば致しませんが？」

「嬉しい提案だけど、貴方には既に手伝って貰っているようだからこれ以上はいいわ。」

「????？」

「まあ、それよりも貴方よく私に気づいたわね、何か特訓でもしたの？」

「・・・えっと・・・特別なことはしていませんが、最近幻影魔法を多く使用していたので感覚が鋭くなっていたのかもしれないね。」

「幻影魔法ねえ。・・・まあいいわ。・・・そうそう今日の目的ね。今日は仕事が一段落したから貴方達の様子を見に来たのよ。最近あまり貴方達を見ている時間も無かったし。」

レノリアは今の一言に違和感を感じる。少なくともレノリアがノレ

ーピアに遣えていた間でわざわざノレーピアが足を運ぶ案件などは無かったのだ。暇になったとしても（まず殆ど無いが）神界内で時間を過ごし、下界に降りてくるなどほぼ皆無だったのだ。思い返せば今回の件はノレーピアのこれまでの判断基準と異なる点が幾つかある。確かに大事件を引き起こしたウォースだが、解決後まで関わることなぞ普通無い。まだこの世界では理解できぬ存在アンノウンという問題は残っているが、たかだかその程度であり、これまでのノレーピアなら確実に別の下位神を遣わしている。

（この件には私の知らない何かがありますね。）

だが相手はノレーピア、下手をするとこの世界ごと消し去ることが出来る神にとつて、疑念を向けるのはご法度。向けた瞬間に最悪の『運命』を与えられる、やもしれない。

「……そうですか。で、いかがでした？いい結果だったかと思いますが。」

「ええ、良い結果だったわ。貴方も、ウォースも、貴方達の仲間も、彼も。」

「彼？？」

「ええ、確かアーウェット・ルーエンスだったかしらね。彼も良い戦士だったわ。」

「……ええ。彼はウォースには負けましたが、総合得点では1位ですからね。……彼を注目されているのですか？」

「試合に負けて勝負に勝った、ということかしらね、少し違うと思うけど。何にしてもあのスキルを持つウォースに戦闘という分野で同学年のものが勝つということは興味深いわね。……うん、さて、もう十分ね。明日も見ようかと思っただけともういいわ。……じゃあね、レノリア、これからも頑張ってね。」

そう言い残すと彼女の姿は消えてしまった。今度は気配だけではないことをレノリアは感じた。ノレービアはさつさと消え去り一人ぽつんと残されたレノリアだが、特に動くことも無くもやもやが生まれた今回の会話を振り返る。

(・・・不協和の塊でした。ただゴールに到達できるアイテムは隠したままでしょう。でも逆に、隠しているということは、何か良くないことが裏にあると考えるのが必然。・・・最後の『頑張つて』は何を頑張るのでしょうか・・・。試合？アンソウ理解できぬ存在の殲滅？ウオースのサポート？・・・どれもじっくり来ませんね。ただ、これ等は何がどうなるうとも私が頑張りたいことです。なら私の思いのまま頑張ればいいのです。そう、深くは考えずに、自分の思いで動きましょー！)

下を向いて少しの間思案に暮れていた少女は、飛びつきりの明るいつつもの顔を上げ、寮への帰路を急いだ。明日は試験最終日、団体戦なのだからここで気分を落とすものかと自分に言い聞かせながら・・・。

「くそっ！！・・・なぜ、なぜ個体数が減らないのだ！！・・・殲滅をしたかと思っただら次の日にはそれ以上の個体が確認でき、やつらのシールドを解析できたかと思えば次の日には別のプログラムになつてやがる。ホントに奴らには知能が無いのか？ホントは俺らが弄ばれているのじゃないのか？」

トレイル＝ディン＝ウルザ。現在は臨時大将という非常に高い身分

に就いており、第8管理世界で理解できぬ存在殲滅軍の指揮を執っている。もうこの地に着いてから半年近くになるが依然として戦果は乏しい。いや、戦果は大きいのかも知れない。凡そ300万の理解できぬ存在は駆逐してはいるのだ。数値は一般発表より多いのはミッドチルダの民衆に余計な恐怖を伝えないためで、この数値を知っているのはごく小数のものだけである。だがこれだけ倒してもウルザは数の減少を感じておらず、むしろ増えている印象の方が強い。そしてウルザが頭を悩ませている間にも将兵は一人、一人とその尊い命を散らしているのだ。

「・・・くそつどうすれば良い？No.41の奴らの巢は全て制圧した。・・・エネルギー源となるものはこの星には残ってはいないはずだ。まさかとは思うが空気から奴らは作られるのか？理解できぬ存在が空気を吸うと分裂するとか？・・・ばかばかしい！そんなことがあるものか！！」

彼らは理解できぬ存在と戦う星には数値をつけて管理をしている。No.41はそのうちの一つで、ここでは理解できぬ存在を知るために過酷状況下の試験を行っている。No.41は既に生命が絶たれている星で、その状況下で様々な実験が行われている。だがその結果はウルザには全く意味の分からないものとなっており、ミッドチルダのお偉いさん方もこの結果には頭を悩ませていた。奥のソファアには彼の妻である、メリッサもおり、同様に頭を悩めていた。通常は夫婦だからといって情報の共有は行われぬのだが、今回の遠征でメリッサも臨時中将というウルザを補佐する地位を得たので特別に許可がされている。ウルザもそうだがメリッサのこの昇進は臨時とはいえ異常な昇進だったが、エキスパートを上に加えた方がいいだろうという上部の意見には納得できたので二人は従っていた。

「・・・ウルザ、・・・今日はNo.8とNo.22、No.174からも増員の要望が来ているわ。・・・No.41もいいけどあそこはもう軌道監視だけでいいじゃない。もうこれ以上の結果は出ないわよ。・・・ならまだ自然の残る、生物の生きている星へ兵力を送るべきだわ。」

メリッサもNo.41の結果にはがっかりした一人だった。だが切り替えは早かった。何よりも前線で戦う将兵のためという思想を持っており、ウルザが将兵以外のことにも気を回す必要があることを理解し、そつと助言をする日々を送っていた。

「・・・そうだな。そうするか・・・。それにしても、俺と君が司令部に引き籠ることになるなんてな。本来なら我々が前線に立つべきなのだが・・・。ミッドへの報告書と全軍への指示だけで手一杯だ。・・・」

「そうね。・・・でも大局を左右する立場よ。私達が最もきついのかもかもしれないわね。」

「・・・私はねメリッサ、将兵に前線に出ると一言あれば出るつもりなんだよ。前の室内の部下からでもいいさ。それが何だあいつら、『貴方以上の上官はいないです。貴方は最後に死んでください』とか言いやがって・・・。俺には奴らを屠る義務が有る・・・。前の案も否決されたようだから、何としてでも次の手段を見つけねば・・・。」

そう言い切るとまたウルザは多大な戦闘報告を読み始める。どこかに現状を打開するものがないかと希望を託し・・・。それを見てメリッサも自らの業務に戻り、今の言葉に対しては何も突っ込みはしなかった。案の否決。これはウルザがミッドチルダの上部に出している現状の打開案である。機械人形の導入、最大戦力による殲滅、星の破壊などその案は数十に挙がる。しかしそれらは殆ど全て否決

されてきた。精々実行に移されたのが機械人形の一部導入と戦力の補充程度だった。否決理由は明らかにされていなかったが、決定的な案はどの案も少し過激なところを含んでおり、そこが問題だと二人は思っていた。だが案の否決は彼らにとって希望が崩れることと同じで、それが重なっていくともうどうにもならないのではないかという心境になってしまふ。だがやるしかない、と心をすり減らしながら奮い立たせる夫にかける言葉はもう既に出しつくしてしまっていたのだ。

それだけでなくとも半年間の戦場は確実に彼らを蝕んでいつている。『魔法』という技術を手に入れ、他の文明を傘下に加え、非殺傷で駆け巡っていた、ミッドチルダの魔導師にとつてこの敵は重すぎた。殺傷設定が日常化し、醜悪なフォルムの理解できぬ存在に日々対峙して行くにつれて彼らの精神は異常をきたしていく。

毎日毎日、理解できぬ存在を殺して殺して殺して殺す。その度に、体液をぶちまけ、肉片を飛び散らせ、劣悪な効果音と対面する。そして偶に仲間が理解できぬ存在からの遠距離砲撃で落とされるのを見る。ああ次は自分かもしれないと毎回思い、魔力がイエローゾーンになるとベースに引き返す。そして今日も生き残ったと思えば飯を食べて就寝する。

そんな報告を山のように受け取り目を通す二人は、過去の経験から見えないが頭に浮かび、聞こえないが耳を蓋し、知らない人間だと思いついてしまっていた。

累計6,157名の戦闘部隊、10,591名のサポート部隊、309艦の戦艦は、それぞれ3,529名、8,850名、305艦に数を減らしていたが、実際の損耗率はこれを上回っていた。この数値の差は死者なのだから、戦場に立てないダメージを負った者、身体的だけでなく精神的な者、も含めるとこの数値は更に悪化する。その僅かな人数で担当する惑星はなんと205。205の惑星全てに理解できぬ存在が確認され、巢の打ち上げを阻止せねばならない

のだ。何とか星の数以上の戦艦は確保できているが、地上戦闘が心許ない。なので戦力の一極集中をとっており、地上は放置されきった星も出てくる。

そう、誰の目に見ても現状のままでは殲滅は不可能なのである。

所変わりここは慈善団体『神の導き』本部。この本部には通常1,000人以上の関係者が詰めており、支部の統括と、表と裏の業務を行っている。なので1,000人以上の人間がいることとなるが手狭感はなく、むしろゆったりとしたスペースが尚あった。それもそのはず、ミッドチルダでも一等地と呼ばれる場所ながら、ふんだんに土地を占めており、更には高層化しているのでスペースが足りなくなるとはまずあり得なかった。また、その規模がこの団体の現状を物語るものともなってもいた。

この団体の代表は、現在彼だけが使用できる最上階フロアでつい先ほどまでの面談の内容を反芻していた。

「毎度毎度、情報提供をしてくれるのはありがたいが、何故あそこまで情けない輩なのかね、最高評議会とやらは……。」

最高評議会、誰もが知る管理局内の最高決定機関である。最高評議会の面々は大半が神の導きのカウンセリングを受けており（画面越しが多いが）、本日も第8からの提案に対する考えを相談しに来ていたのである。当然ここまでの大物は代表である自分が行うが、最近はその頻度が上がり少しうっとうしく思っている節もある。

「だが、ウルザ君の提案は的を得ているからな。しっかりと拒否しな

くては……。彼の思うがままにさせてしまうと、アンソウン理解できぬ存在が滅びかねないからな。」

代表の彼は、これまでのウルザからの提案を思い出し呟く。それらは最高評議会へ自分の考えを通せる様になつてからほぼ全て拒否しており、戦闘持続可能レベルの承認にとどめている。

「まあ、我々の『神』だからな、アンソウン理解できぬ存在様は。滅ぼされると困る。やはりウルザ君をトップに据えたのは間違い、……。いや、それは無いか。ウォース君の親がアンソウン理解できぬ存在殲滅の指揮官。うん、この図式は崩せないからな。くつくつくつくつくつ。うん、いいな、実に良い。何の問題もなく計画は進んでいる！」

代表の彼は、悪魔の笑みを浮かべて叫ぶ。ここは神の導き本部最上階。誰も聞くものはいない。

そこで彼はふと団体名のロゴの入った書類を見る。

「『神』ねえ。アンソウン理解できぬ存在が神なはずがないだろう。あんな醜悪な神を信仰してしまうとは思つたよりも情けないな、管理局。ここまで私が貴様らをつぶす算段をしてやっているというのにもう少し嘸み応えがなくてはいかんな。少しはこの星の神であるルルトも信仰してやればいい。……。そちらの方が随分とご利益があるだろうよ。」

慈善団体『神の導き』代表は過去に管理局に侵略された惑星の遺児である。資源惑星であることを理由に土着民族である彼らを虐殺したのであった。流石に子供には情が沸いたのか、親を殺されたことをシヨックにより忘れていた彼だけをミッドチルダの孤児院に入れて育てた。彼は育て親の言うとおりよく学び、優秀な成績で管理局へ入局した。そして、アンソウン理解できぬ存在に出会った。彼は全く反応で

きなかつたが、上官が理解できぬ存在をぶち破り危機を脱した。だが死に行く理解アンノウンできぬ存在を見て彼は、親を、兄弟を、同胞を、管理局に殺されたことを思い出した。そこから彼は管理局への復讐だけを考えるようになる。管理局は情報収集のために在籍していると記憶を取り戻させた理解アンノウンできぬ存在が実は大量に存在し、進化が異常に早い生物だと知る。そこで彼は悪魔の閃きをしてしまう。その後彼はその閃きを実現させるために考え、行動し、今の状況を作り出したのだ。

「あと少しだ、あと少しで成就する。ふふふ、まずは明日が楽しみだよ、ウォース君。」

その笑みは間違いなく『神』を冠する代表でなく、むしろ『悪魔』であるといった方が良いものだった。

1 - 16 話 疑念（後書き）

えー、少し皆さんの疑問点を明らかにしてみました。

少し開示が早かったかなとは思いますが、書いちゃったもんはしゃあないのでそのまま載せました。

今後もちよろちよろとネタばれしていきますのでどうか着いて来て下さい。

8 / 17 一部修正

『pipipipipipi...』

エレメンツが就寝時間という幸福タイムの終わりを無慈悲に告げる。ウォースはゆっくりと目を開けると、ついさっきまで真っ暗だったはずの部屋が、何故かもう明るくなっていることに、毎日のことだが理不尽さを感じる。

(俺ホントに時計通りの時間寝てんのかよ。実は夜だけ時の速さが違ってたりにして...)

ウォースは、朝起き立ての不機嫌さと寝ぼけた頭脳で一つの結論に達するが、結局はどうしようもないことに気づき、ノロノロと忌々しい騒音の元凶に手を伸ばす。物自体は違うがそれは目覚まし時計のようなものであった。

時計を止め、顔を洗い、まともに頭が巡るようになってからウォースは今日が試験最終日であることに気付く。

(...昨日は魔法^{ミラー}反射^{アクセラレータ}だけでなく一方通行も使用してしまった。今日は間違いなく俺が一方通行^{アクセラレータ}持ちであることを前提に敵さんは攻めて来るでしような。...まあ打ち崩せるもんじゃないとは思うがな。)

ウォースは不適な笑みを浮かべる。そう、ばれてしまったものはいしよがない。だがそう簡単に撃破されるものではないということも理解している。なら堂々と敵を破るだけだ。自信のあるものは強い。そしてその自信が打ち崩されても、それは自分にとっては、本番におけるリスクを減らせたことと思いい、むしろ歓迎する傾向もある。

そう、よくよく考えれば自分のカードをオープンにすることはリスク軽減の観点では良い選択だったのではないか。理解できぬ存在は俺という存在について特別視はしないだろうし、今俺の能力を開示しようがせまいが変わらないではないか。俺の敵は理解できぬ存在なのだから。

色々朝からウォースは思考を巡らし自分が行った昨日の好意を理論的に納得しようとする。当然マイナスの案件もあるだろうがそれは気にせず、良いことだけを強調する。これは前世の時代に社会人としての毎日を過ごした彼が身につけた思考法だ。これがこのファンタジー世界でも生きていく。魔法世界で応用が利くとは社会人生活も中々馬鹿にならないようだ。

着替えを行い、適当に朝飯を頬張り、身だしなみをチェックし、時計を確認すると朝のホームルームまで後30分。うん、いつも通りだと思いつつ、ウォースは扉を開ける。

「くっ、まぶし……。」

扉を開けるとそこには朝とはいえ、初夏のきつい日差しが支配する世界が広がっていた。また暑い日になるなと少し気を落としてウォースが空を見てみると、

「よ、ウォース。今日は早く目が覚めちゃった、一緒に行くぜ。」

隣の部屋のカミナが声をかけてきた。カミナはいつももう20分くらいは寝ているはずなのに今日はおかしい。こんな奴でも試験最終日は緊張するのかと思っていると、

「なんてな、本当は昨日のお前の能力についてじっくり話したいと思っていたのだ！……逃げられるとは思わなよ。」

と、カミナは『ニヤリ』とでも効果音がバツクで鳴ってきそうな顔をウォースの顔に近づけて言った。ウォースはしょうがないという気持ちと、朝っぱらから面倒だなという気持ちが混じった微妙な表情を返し、気持ちいい天気似合わない深いため息をついた。

「よし、魔理沙も来たわね、じゃあ行きましようか。」

こちらは博麗霊夢・霧雨魔理沙・レノリアアークスが所属する、中等科第3女子寮。ミスカトニツク魔法学園は全寮制であり、中等科は全員で700名程が入寮している。男と女で当然寮は別となっており、一つの寮が50名ほど、全部で男9棟、女9棟存在している。作りは大体同じで、8畳一部屋にトイレ・キッチン・風呂がついており、学生の一人暮らしとしてはまあまあな空間が与えられている。面子は出来るだけ同学年で占めるように調整されており、飛び級組みの霊夢ら3人は同じ寮に属している、そして部屋も隣。同じクラスでもある3人は当然毎朝一緒に登校をしていた。道のりは10分程度で学園にはかなり近い。

「霊夢、毎朝言ってるけどあと10分は遅くてもいいんじゃないか？魔法使って走るか飛んでいけばもつとすぐ着くし、この時間なら歩いてもホームルームの20分前に着いちゃうせ。私はもつと朝はゆっくりしたいんだけどな。」

毎朝待ち合わせの場所に最後に来る魔理沙は朝は苦手のようで、今日も少し目を細めながらやってきた。でもしつかり見てみると、その髪型、服装にまつたくの乱れはない。なんだかんだいってきつち

りしているのだ、・・・右手で持っているサンドイッチを除けば。

「魔理沙、また寝坊したの？今日で試験が終わりといっても、昨日までよりウエイトは大きいんだから気を抜いたら駄目よ。」

そう、初日から4日目までの個人戦と、最終日の集団戦は評価のウエイトが同じなのだ。両方の順位を総合し、数値の小さいものから総合順位の上位を占めてゆく。個人戦10位で集団戦が20位なら、その数値は $10 + 20 = 30$ となるのだ。

「大丈夫だ、そこは抜かりはないぜ。しっかりこの日のために準備はしてきた、・・・はずだったんだけどな、何だ、昨日のアレは？準備がパーになっちまったぜ。」

「・・・確かに、アレは無いわねえ。」

2人は昨日の最終戦の光景を思い出しながら肩を下げる。正式な解説、発表は無いもののそののでたらめさは理解が出来た。

『^{アクセラレータ}一方通行』。

この能力に弱点などあるのだろうか、と霊夢は思ってしまう。これまでは魔法だけを跳ね返せるという理解だったので、それ以外の物理攻撃などは通ると鷹をくくっていた。実際には物理攻撃を受けているシーンは見たことはない。それはあの高速移動による回避能力がそれをさせなかったからだ。なので余計に弱点を隠蔽するためだという思いが深まっていたのだ。『トレイル^{II}デイン^{II}ウォースは物理攻撃が怖いから逃げ回るんだ』との。

しかしそれは違った。彼は能力を隠していただけだったのだ。切り札を持つことは特に珍しいことではない。誰でも用意する。しかしその札が余りにも強力すぎたのなら話は別だ。弱点も見当たらない。隠す必要などが無い、切り札でなく通常時で使用するべき能力。それを隠す。霊夢は、ウォースの考えは良く分からないという適当

な結論を一時的に搾り出し、前を向く。

「ま、今日の試験の特性上、ウォースと確実に当たるって訳でもないから、そこまで考えすぎても駄目ね。さあさ、考えすぎて遅刻なんてことになったら目も当てられないわ。さつさと行くわよ。」

「・・・そうだな、そうするか。・・・あ、そういえばレノリアはウォースとは幼馴染だよな。入学試験も一緒に来てたし。・・・あいつは何で能力を隠してるか知ってるか？」

霊夢と同様魔理沙も結論を導けなかったのだが、ある一つの手がかりを思い出し、その当人へ尋ねた。するとレノリアは少し首をかしげ、

「そうですね。ウォースは霊夢さんや魔理沙さんと同様、倒す相手を決めています。そしてその戦いは決して負られないものです。なので自分に負荷をかけて相手に望んでいるのではないのでしょうか。どのような有利な場面でも自らの成長を促すために、結果どのような不利な場面でも勝ちをもぎ取れるようになるために。・・・あはははー、私もウォースのことをちゃんと理解は出来てないので、合っているかは分かりませんけどね。」

「・・・なんとなく分かるわね。あいつは普段話してても理解できぬ存在ノウンの話題になると少し悲しげな顔になるのよ。まるで自分が原因だ、と言わんばかりの。自分が解決しなければならぬ問題とでも思っているのかしら。」

「確かに、両親が理解できぬ存在アンウン対策軍のトップで、あいつ自身はあの能力だ。将来は間違いなく優秀な魔導師として第一線に立つだろうが、まだそこまでやらなくてもいいじゃないか。自己研鑽の時期だと思っぜ、まだな。」

「いえ、ウォースは中等科を卒業した後入局して、討伐軍を志望するようです。そこまで遠い未来というわけではありません。」

「いや、あんなに消耗率の高い部隊に入れられるわけ無いでしょ。あのレアスキル、どれ程貴重か分かってるでしょ！」

貴重な人材は飼いきれられるのが通常だ。よっぽどの事情が無い場合は。

「・・・これは秘密ですが、中々のお偉いさんからオファーが来たようです、条件は緩めで。恐らく配属希望は通るでしょう。オファー自体は私も来ていますしあなた達もそうではないのですか。私たちは非常に注目されているようなので、いい悪い含めて。」

霊夢にしても魔理沙にしてもオファーは来ていた、それも1件や2件ではない。元々が名家だ、当然オファーは来るものだがここまでの数となると話が別だ。政情揺らぐ時代には才ある若者の価値はうなぎのぼりとなる。更にはあれ程までメディア露出したらその価値は如何程か。自分達でその有様なのだ、『英雄』であるウォースは計り知れないものがあるだろう。どれ程までの注目を浴びているかなどあまり想像したくない。しかし、

「でもな、レノリア。私も進路は決まっている。・・・私はウォースのことを放つとけないからな、あいつの向く方向は私がなぎ払ってやるぜ。」

「な、魔理沙、何よそれ。アンタの口から進路のことを聞くのは初めてよ。・・・でもまあ私たちは自然にそうなるわね、ウォースと会わなくてもそう。ただ、少し、やる気は出るかもしれないけどね。」

魔理沙は自信満々に、霊夢は少し突き放すようだが内心はどうだか。(ウォースはなんだかんだいって良い仲間に恵まれたものです。多大な才能、共通する目的、好ましい人格。まるで・・・)

レノリアはとある考えに到達し、その雪のような真っ白な顔を蒼ざめさせる。

「ん？レノリアどうしたのよ、顔青いわよ？・・・何、私たちも討伐志望で驚いたの？」

「・・・え、あ、まあ、そ、うですね。」

「そんなに心配しなくとも大丈夫よ、なんとかするわ。」

明らかに動揺するレノリアだったが、霊夢はあまり深く考えず、現実には思考を戻し、学園へ歩く速度を速めた。そしてそれに続く、魔理沙・レノリア。

（・・・しかしマイナスの状況ではないのでこれ以上深く考えても無駄ですね。『分からぬことは考えるな』というルルトの教えもありませんしね。）

ウォースは午前の最後の授業をいつものように半分やる気のなさそうな顔をしながら聞いていた。内容は午後のことについてだった。中等科1年生としては2度目だが、外部公開というリスクを抱えるので毎回しっかりとルールの説明をするらしい。

「ルールは前回と同じだ。会場も同じだが、飛び級組みもいるししっかりと説明する。会場は個人戦で使用した第一魔法演習場ではなく、第三を使用する。ここは広いぞー、何しろ個人戦フィールドの約200倍の広さがある。そしてここにはカラクリがあつてな、設

定をいじることで五感を惑わす仕掛けを登場させることが出来る。ややこしい言い方だが、簡単に言うと場面設定が可能なわけだ。都市とか森林とか岩場とか。これ等出現したオブジェクトは決して壊れることはないことを覚えとけ。前回は都市設定で行ったな。」

要するには良くできた背景を作ることが出来る部屋なんだろう、とウオースは理解する。

(実習室としては必要な機能だな。)

「まあ、フィールドはそんな感じだ。試験が開始するとお前らはこの広大なフィールドにランダム転移される。全試験参加者がな。その際試験参加者は自らにヒットポイントを与えられる。その数値は個人戦の時の獲得ポイントだ。そしてこのポイントはお前らが攻撃を受けると減少し、攻撃が通ると増加する。要はポイントの取り合いをするので。ただ吸収できるポイントは、与えたダメージの半分なのでそこから辺もちゃんと考慮には入れとけ。そして最終的にポイントの高い人間から上位に並ぶ。」

この後も長い説明があったが、必要事項をまとめると以下内容だった。

?

個人の試験終了条件は3つあり、1つが試験時間である60分の経過、もう1つが演習場に配置されている5箇所の台座へ試験用エレメンツをセットする。ただ、後者を実行した場合、保持ポイントは半分となる。最後が5人の生徒のポイントをゼロ以下にさせた場合で、達成後にボーナスポイントとして100ポイントが追加される。この場合は場所・時間は関係が無い。

?

試験前に渡される試験用エレメンツには自分の現在の保持ポイントと、50m四方内にいる生徒の数、最も近い早抜け用の台座の方向と距離が表示される。形状はデジタル時計のようで勿論残り時間も表示される。

？

ポイントがゼロ以下になってしまつてしまうとその場で形成される強力な結界の中で10分間待機となる。そして10分後、ポイントを50与えられ再スタートする。この再スタートは時間の許す限り何度でも出来るが、順位付けの際に同点となつたら再スタートの回数が少ない方が上位となる。

？

エレメンツの略奪・意図的な破壊行為は失格となる。

見直せば見直すほど徒党を組んだ方が得をする内容だ。なので外部の目が入られるのだろう。このエレメンツにはセンサーとカメラ機能もついており、外部の人間は巨大なスクリーンに分割投影される生徒達の動作を眺めるらしい。戦闘が始まると動きの少ない生徒の映像が無くなり戦闘シーンが拡大される仕組みだそうだ。完全に見世物と化している。だがそれ故にマイナスのイメージを与えるような行為も抑制される。なのでルールは比較的自由であり、結果、クリーンな実戦演習が可能な状態となつている、はずなのだが、この授業最後の教師の言葉でそうでないことをウォースは痛感した。

「・・・えー、お前等、前回も言ったがこの試験は実戦を想定している。ポイント云々の規約はうざったいがごちゃごちゃとある。しかしだお前等、実戦で最もやってはいけないこと、即ち死ぬこと今回のルールではポイントがゼロになることだな、これだけは避ける。ゼロになるくらいなら途中退場しろ。恐らく今日来るであろうスカウトの面々もそこは重視して見るだろうからな。すぐ死ぬ馬鹿は必要ないからな。」

そう教師は言って教室を出て行く。教室内は静かだったが、何か良
く分からない高揚感と緊張感で満たされていた。そう、我々はこれ
から戦場に出るのだ、と実感してきたのだろう。

集団試験開始まであと92分。

1 - 17話 試験最終日 1 (後書き)

戦闘描写がないと遅筆の極みになってしまっ、とれです。
だいが遅いですねー、しかも殆ど見直しなし!!

以後頑張ります・・・。

「ふん、なんだこれは。昔と比べて異様にうっとおしいシステムになつてやがる。」

そう呟くは、褐色の肌にサングラスをかけた長身の男、情報部で三佐なる高い位に就く、ファウン「エノアスである。ちなみに現在とある部下から逃げている真っ只中で、学園の前に来るだけでも中々に苦労したらしいが、どうでもいいので割愛する。要するに仕事サボって逃げていたのだ。そしてようやく学園内に入ったのだが、彼の素行の悪さが災いし、かなり権限の低い入場ランクとなつてしまつており愚痴をこぼしているという状況だ。

「この学園はセキュリティにここまでやらせるのかよ。そして学園長後で絞めてやる。なんだよLv.1つて。」

この学園の入り口はこのサイズの学園としては異例である正門の一箇所しかない。当然サイズが大きく、セキュリティもばつちなのだが、そのセキュリティは事前に了承を貰っていると手続きを全てスルーが出来る。今回ファウンは学園長に頼んで了承をとつてもらつたのだが、学園長は彼の過去を知る人間でありあまり彼のことを信用出来なかつたので、うるちよろ出来ないよう、最低のアクセスレベルであるLv.1の許可証を与えたようだ。その結果、目的地に繋がるルート以外は進入が出来なくなつているのだ。・・・残念なことに。ちなみにセキュリティレベルは1〜10まであり、ウォースのような中等科の生徒はLv.6の許可証を所持している。

「・・・まあ、しょうがないか。下手に抗つてまずいことになつちやあ困るからな、ここは素直に行くか。・・・ん？あれは、・・・」

哀れなフアウンと異なり、外部の人間としては最高のLv.8の許可証を携え闊歩するは、慈善団体『神の導き』の代表、その人である。本日は門の前までは車でやってき、学園内は周囲を確認しながら、徒歩にてゆったりと移動をしている。当然彼の両手には同じ許可証を持つ団体が左右を固めていた。

「この学園は今日が初めてですが、良い環境を構築していますねえ。流石は天下のミスカトニック、私もここを卒業すればよかったですねえ。」

「代表はセラエノ学園でしたよね。理論ではあそこが一番ですから悪い選択ではないかと思いますが。確かにミスカトニックの方が外部受けはするようです。色々なイベントで学内を公開していますし。」

代表の言に返すは彼の秘書兼SPのノヴァ「ホールナー」である。見た目は、眼鏡＋スーツを違和感無く身にまとったラクス「クライン嬢」の様だが、性格は超真面目である。彼女は団体創設時からのメンバーであり、その類まれない頭脳と戦闘能力により団体へは莫大な貢献をしてきた。そのせいか、秘書とSPを兼ねるといふポジションを維持し続けており、団体内ではNo.2の呼び声と共に、その整った外見から『幻夢の天使』として絶大な指示を受けている。

「ノヴァ君はミスカトニックだったよねえ。それも主席卒業だ。．．随分もてたんじゃないの。彼氏を何人もはべらせたりなんかして。」

「えっ、なっ、何を???もてただなんて。なっ、何人も!?はべ、」

る??急に何をおっしやるんでふか?」

先程までの静かな対応はどこへやら、顔を真っ赤にし、拳句の果てには嘔んでしまった。幻夢の天使殿。ご察しの通り、彼女は色恋沙汰の話題に非常に弱い。代表はそこを毎日と言っても良いほどからかって楽しむ嫌いがある。今日も彼女の慌てふためく様子をニコニコとして見守っていた。

そこでずっと黙っていたもう一人の同行者がおそおすと口を開く。

「・・・あのー、代表様、ノヴァ様が、へろへろに、なっちゃってますので、そこら辺で、許して差し上げたら、どうですか?」

気が弱いせいか話し方に区切りが多い。一言一言相手の顔色を見ながら紡いでいくので、気が短い人間からするとうつとおしく思えるだろう。

その者の名前はネリー・ティアンカート。青髪、青目でポニーテール。身長はノヴァより随分低く、年齢も10歳程であろう。腰に二本の剣を携えていなかったらただの何処にでもいる少女なのだが、巨大団体『神の導き』代表の隣を許されるのだ、当然違う。彼女は団体内最強の魔法剣士として、代表のSPを務めているのだ。・・・だが気は弱い。

「ふふふ、ネリーは優しいねえ。ネリーが優しすぎるから私は惚れてしまいそうd「ああん??」「いえいえいえ、何も無いですよ。」

ヤキモチなのかどうか全く分からない急な切れっぷりを発動させたノヴァさんに、代表はいつもの笑顔(少しひきつっている、完全には慣れられないようだ)を浮かべて対応した。ネリーはそのやり取りをびくびくしながら眺めていたが、結果平和的解決に至ったので目に見えて安堵をしていた。

そこに、

「やあやあやあ、昼間っばらから女の子といちゃいちゃですか、代表。流石は天を照らす『神の導き』代表様だ、俺らには出来ないことをやってくれますわ。」

許可証のことで若干不機嫌だった虎が現れた。

「これはこれは三佐殿。お久しぶりです。というか、やはり貴方には効き目が無いようですね。おかしいなあ、御宅の這い寄る闇はごまかせたんですがね。」

「おいおい、這い寄る闇の存在を知ってることは無視して、何？あいつ等を試したことあんのかよ。・・・まあ、深くは言及しないがな。」

『効き目』。これはノヴァホールナーが展開している認識阻害魔法についてのことだ。この魔法は一般的なのだが、彼女のレアスキルである幻影の領域を併用することでかなり強化されている。幻影の領域は彼女の指定する範囲内において、異なる領域情報を被せる能力である。つまり、生物の存在を本当に消してしまうことは不可能だが、実際は消えていないが消えたかのように見せることは出来るのだ。

この能力の強力なところは、能力の対象が『領域』であるところであって、『騙したい相手』ではないところだ。これにより偽りの情報を送りたい相手が何人いようが手間は変わらず、例えば超有名な団体の代表が人目につくところを歩いたとしても、見つかって騒がれることを避けることが出来る。彼女はこのレアスキルと認識阻害魔法を併せて発動させることで、管理局の暗殺部隊である這い寄る闇をも出し抜くことができたのだ。

なのに気がつくファウン・エノアス。共に凡庸でない存在として互

いを認識しており、どんな縁だかよく分からないがこの2人は軽口を交わす関係となっている。当然常に傍についている2人とも顔馴染みだ。そうでなかったらネリーの双剣がファウンの首にかかっているだろう。

「まあ、ここではなんです。我々は存在しない事となっているので、存在できる場所へ移りましょう。・・・こちらですよ。」

そう、傍から見るとファウンは誰もいない空間に向かって近づき、景気よく話しかける、変態だ。それを考慮した代表はファウンを先導するが、ファウンは動かない。

「????どうしました??何か予定でもあるのですか??」

代表は着いて来ないファウンに向かって疑問を投げかける。するとファウンは少し罰の割るそうな仕草をして(その表情、所作が似合いません。若干気持ち悪いです。 byノヴァ) (こっおずおずと) おおっ、なんか、私を見ているようです。 by ネリー) 言い放った。

「・・・俺の認証Lv.1だから、そっちには行けねえんだ・・・」

「・・・そう、ですか。なら仕方ないですね。」

大の男が、何も無い空間に向かって、うじうじしながら、真剣な顔で呟く光景は、かなりシニールだった。

トレイルⅡデインⅡウォースと愉快な仲間たちは食堂で昼食をとっていた。ウォースはいつも通りの日替わり定食を頼み、カミナ・レノリアもそれに追従した。霊夢と魔理沙はパスタを選択したようだ。ウォースは自分の選択した定食をじつと見つめ、

（魔法の世界でも日替わりか……。しかも唐揚げ定食って……。あんまり変わらんなあ。）

などと、どうでも良い思いにふけていたが、他の4人からの関心が自分に向いていることから少しでも逃避できればそれでよかった。関心事は一方通行のこと。今朝カミナにはしつこく聞かれたが、この時間までずらしてもらっていた。なので逆にもう逃走経路は無い。別に内容的にはそこまで隠す必要性も無いのだが、注目されると隠したくなる性格をウォースはしていた。皆さんもそんなところあるのではないだろうか？

「……そんなに俺を見つめるな、一方通行のことだろ。ちゃんと説明するさ。……試験前のこの時点での説明はどうかと思うがな。」

この後は集団試験だ。出来れば自分の能力についての情報は隠すべきだ。実際、この食堂には耳を済ませている生徒が多数いる。それだけ機能のウォースの能力は衝撃的だったのだ。確かに『英雄』としての前評判が肥大化させたのもあるだろうが、それ抜きでも無視できない話題であることは確かなのだ。そしてその生徒の中には中等科1年の、同じ最終試験の受験者もいるだろう。しかしウォースはここで説明をする気でした。他の大多数の事などは考慮の範疇外で、ただ、仲間である4人へはしっかりと説明を行うことは決意をしていたのだ。

「・・・えと、俺のレアスキルだな。これは魔法反射ミューなどという弱
つちいものじゃない。俺の能力は一方通行、アクセラレータ全ての力を跳ね返すこ
とが出来るんだ。それが魔法だろうと、武器による攻撃だろうと、
はては音波、光波、紫外線だろうともな。俺にあらゆる干渉手段は
届かない。」

勿論この説明は不十分である。彼の能力はベクトル操作。跳ね返す
だけではない。なので説明には「俺の能力は」出来る。」という表
現を用いたのだ。他にも何かできる可能性を残す表現をだ。

そしてこのことは気付く者もいただろう。彼の異能は一筋ミューティアの流星と
高速移動も含まれ、これらは今の説明では実証できないからだ。し
かしそこまで追求する必要がなくなった。何故なら今の説明でウオ
ースに戦闘で勝利する手段が無くなったのだから、これ以上の分析
は意味を成さない。どうせ何をしても勝てないからだ。

レノリア以外の3名は絶句する。隠していた理由、将来の展望、残
された疑問事項、色々知りたいことがあったのだが考えが回らな
い。確かにこの回答は予想できていた。しかし内心どこかで疑問視
していたのだ。そんな強力な能力があるはずがないと。しかしこう
はつきりと言われると、もう言い訳は効かない。そう、ウオースに
は、勝てないのだ。この結論は入学以来切磋琢磨してきたと思っ
てきた、3名の心に深く突き刺さる。所詮我々はその程度の存在なの
だと。

そんな暗い、落ち込んでいる3人の気持ちに気付き、危機感を感じ
たのはレノリアだった。彼女は現在のこの仲間関係の尊さ・貴重さ
を深く理解していたからである。そしてそれが今、仲間関係の必要
性が疑われることによりひびが入りかけている。ならばとレノリア
が発言をした。

「皆、ウオースのこの能力には幾つか穴があります。1つはこのス
キルに魔力は要りませんが精神力が必要となり、量をこなすことで

磨耗していきます。決して無限に使用は出来ません。2つ目に、跳ね返すためには対象の情報が必要となってくるので、日々触れているようなもの以外は情報の収集のために一定の時間が必要となります。3つ目は、ウォースはこのスキルに頼りきりなので、防御魔法が使えませんが、結界も無理、体も貧弱なので、スキルが使えなくなると思うゲームオーバーです。」

レノリアはつらつらつらつと、ウォースの弱点を捲し上げる。ウォース自身は最初呆然として聞いていたが、レノリアを信用していたので我に返っても特には妨害をしなかった、しないよう自分に言い聞かせた、が3つ目辺りでもうそろそろ限界点だったことは間違いない。ウォースはレノリアに半分涙目、半分恨みを込めた視線を送り、レノリアはそれを受け止め、うなずいた後、3人を見て最後にこう話をまとめた。

「分かりましたか。ウォースにも弱点はあります。完全な存在ではありません。正直他にも幾つか弱点はありますがウォースが怖いので言いません。そう、ウォースは、完全ではないのです。」

レノリアは満足そうにそう言い切る。ウォースには何のことだが、結局自分の弱点をばらされて終了かと思っただが、霊夢・魔理沙・カミナの雰囲気が変わった。先程まではピンと張り詰めた雰囲気だったのが、まだ完全ではないが、いつもの空気に戻ったのだ。3人はやりきった顔のレノリアを見て、互いに罰の悪そうな表情を交わり、最後に力強い表情をウォースに向けた。

「・・・まっ、アンタには私たちが必要って訳ね。ていうか、何世そんな能力をずっと隠してきて！全く、これからはそんなことがあつたら皆で袋よ、袋！！」

「くっくくく、ホントに跳ね返せるか今度私の極大射撃で実験して

マスターズパーク

みよつぜ！」

「ちよつとまてい、魔理沙！俺の灼熱五指ゴットフラインガーが先だぜ！おい、ウオース、今はお前には届かないが、いつかお前を、いや、今年中にお前から勝利をもぎ取ってやるからな！覚悟しとけ！！」

「なーに、カミナ、そんなこと言っちゃってもいいのかしら？もし出来なかつたら、皆に奢りよ。良いわね？？」

「おっ、それは良い案だぜ。どうだ、レノリア、お前は何か良いか？」

「そうですね、私はピザが好きなので、ピザ食べ放題が良いです。」

「ちよい待て、勝つのは俺だろ、なら俺にも選択の権利があるはずだ。ならなあ……。」

「待つのは、おまえらだー！ー！ー！！！」

いつものやり取り、いつもの喧騒、いつもの雰囲気。レノリアは少し揺れた道を元に戻せたことについて密かに安堵した。『いつも』がベストであると誰よりも理解しているレノリアは、『いつも』を維持するために今後も気を配ろうとこの時心に誓った。

「くつくつく、奴め、仲良しごっこを続けるために弱点を曝け出すなんて、バカじゃねえか。所詮はお子ちゃまの考えることなぞ、その程度というわけだ。」

得られたものの影には、失うものが有ることもあり、今回はどれ程のものが掌からこぼれたのだろうか。少なくとも現段階で最悪の人物が拾ってしまったことには間違いはないようだ。

集団試験開始まであと44分。

1・18話 試験最終日 2(後書き)

実はここまで書いていたのさー!!

長いから割ったのさー!!

ここからは真っ白、さあどつするかな。

1 - 19 話 試験最終日 3 (前書き)

書く気力があつたり無かつたりで遅くなつちやいました。
これからもう少しやる気を出していきます。

ミスカトニツク魔法学園集団試験。中等科より導入されるこの試験は年4回あり、一日に高等科・中等科合わせて6試合が繰り広げられる。文化祭や運動祭の無いミスカトニツクでは数少ない非学園関係者が堂々と学園内を闊歩できる機会である。ただ、その人数は非常に限られており、一試合につき1,000人のみとなっている。なので最大で6,000人。学園内の人間と比較すれば非常に少ない数である。ここまで外部との接続を絶っている理由は偏にセキュリティの為である。最先端技術の開発を行っているミスカトニツクは学園でありながら国家機密レベルの情報も保有している。決してこの措置はやり過ぎではないのだ。

(なんか44分が長かったような気がするが、ようやく開始だ。)

トレイル「ディーン」ウォースは集団試験会場への転送ポッドの中でなんだかメタな事を考えながら試合開始の合図を待っていた。ウォースは転移魔法を使えない。高位魔法で汎用性は高いが決して必須というものではないとウォースは考えていた。使える人間が傍にいればそれで足り、ウォース自身は自分の特化した能力に力を注げばいいのだ、と。

アケセラレータ
(スキルが使えなくなるとゲームオーバーね。・・・レノリアも痛いところを突く。まあ、全く否定できないのが悔しいが、後悔はしないさ。)

ウォースは後悔しない。山田太郎であったときから、後ろは極力振り返らないようにしていた。前後両方を気に出来るほど器用ではないのだ。

『Bye』

短いがはっきりと耳に残る音と共に、ウォースは転移の術式が起動したことを感じた。そう、これから60分間に渡る集団試験が開始されたのだ。

『Bye』

観客席でその音を耳にしたのは慈善団体『神の導き』の代表と愉快的な仲間たちである。ノヴァやネリーは愉快でもなんでもないが、管理局の虎を含めるとどうだろうか。あまりのアクセスレベルの低さに同情して拾ってきたのだが、こいつがやたらと騒がしい。一人騒がしい人間が入るだけでグループのイメージはがらりと変わってしまう。静電波（代表）・クール（ノヴァ）・弱気^{ネリー}ならまだ目立ちはしない集団だが、ここに豪快（虎）が入るとかなり目立つ愉快的な集団へと変貌してしまう。だが話の内容は奇妙だが高度であり、知る人が聞けばその内容は機密に溢れている。だが表現がアレ過ぎて滅多なことのない限りは問題にはならないだろう。

「それにしても何時からこの試験は大手企業の面接会場になったのかな。いや、局がらみも結構いるみたいだね。」

観戦フロアに入ると一緒に観戦する人数を伝える。するとその人数に丁度よいスペースが与えられ（4人なら6畳位）、その中は半隔離状態となつて音は漏れない。だがスペースの壁は透明なので外からでも内部の状況ははつきりと分かつてしまう。これはセキュリティのためだと説明書には書いている。

「俺らはノヴァちゃんのおかげで気付かれることはないかとは思うがな。」

「・・・いつも言っていますが、ちゃん付けは止めて頂けないでしょうか。・・・ネリーならいいですが、「えつ、えつ、わたし？」私はそんな年ではないかとは思われるのですが。」

「はははは、俺から言わせればどっちも変わらん。諦める。・・・それにしてもいいとこだな。こんな場所なんて在学時には全く気付かんかったぜ。」

そう、今観戦をしているスペースは試験会場の上層に位置している。まさかこれだけ大きい会場の上に同じ広さの観戦スペースを作っていたとは、下で戦っている生徒達は夢だに思わないだろう。それに加えてこの層の床・スペース内の壁と床は全面超強化ガラスで出来ており、高度な遠見の魔法を取得していれば直接試合を観戦することもできる（当然下から上は見えない）。スペースの中には戦闘を中継するディスプレイがあり、ここに付属されている座標画面を選択することでその座標の上部へ転移することも出来る。言うなれば移動型観戦シートなのだ。当然魔法に疎い者用に双眼鏡のようなものもスペース内には配備されている。

「でもまあ、素性を明らかにしても見たい学生がいるってことなんだろう。・・・十中八九、あいつだろがな。」

「そういえば三佐は彼らと親交がありましたよね、広報とタレントという繋がりだ。」

「おお、よく知ってたな。んー、なんだ代表殿もお目当ては奴らかあ？」

「さあ、どうでしょうか。」

（魔法反射でなく、^{ミラー}全能力反射だっただなんて。最早これを逃す手はないですからね。）

上空でのやり取りなど露知らぬ生徒達は、ただ敵の撃破のためにそれぞれが行動を開始していた。積極的に相手を探すもの、トラップを仕掛けるもの、自らを強化するもの、術式の準備をするものなど、最終目標である、『いかに高得点を得てドロップアウト出来るか』を達成するために自らのベストな手段を実行していた。

だが、戦いをこなし過ぎるのも問題があるシステムではある。何しろ100のダメージを与え100のダメージを受けるとポイントはマイナス50となってしまう（17話参照）。実力が段違いで相手へ倍以上のダメージを与えられるなら良いがそうでなければかえって連戦はマイナスに傾く。また相手の保持ポイントも重要となってくる。最高はアーウェット・ルーデンスの193、最低は全敗を喫したロウ・アームズの39となる。獲得可能ポイントは事実上初期保持ポイントに大きく左右されるので、戦闘を仕掛ける相手も注意が必要となってくるのだ。

これ等を総合すると、勝てる相手を見つけることが重要であるといえ、^{アンソウ}実践に即している状況であるといえる。理解できぬ存在という明確な、そして強力な敵が存在している以上、この学園を巣立つ人間への期待は大きい。最低限の戦場の基本を実戦で直に学ばせるこ

とは当然なのである。

さて、^{ウォースとなかまたち}若年軍団はどのような戦術を取っているのだろうか。

？

博麗霊夢の場合

「^{にじゅうけっかい}侵り込めぬ空間結界と^{むそつふういん}逃れ得ぬ束縛を使用する霊夢は1対1にめっ
ぼう強い。何しろこれ等スキルを発動されると負けようが無いのだ。
そのことを自覚している霊夢は唯ひたすらに孤立する生徒を狙い打
つ。今回与えられたエレメンツは彼女にとってはかなり有効なもの
となっていた。何故か感覚が鈍る空間となっているこの戦場ではこ
のエレメンツが大きな役割を持つ。自分の能力、与えられた武器、
フィールド状態、現在の状況を分析し、霊夢はone-killを
5回行うことを選択、開始20分で3人を撃破してしまう。」

「くそつ、なんなんだよ、お前。その硬さは……。勝てるわけ無
いだろ……。」
「その言葉3人目、もう聞き飽きたわ。文句があるなら貴方の応用
力の無さを恨みなさい。……これで、180+28+49+38
で、……あまり良いスコアじゃないわね。もう少し動きの良い人
を狙おうかしら。」

？

霧雨魔理沙の場合

個人戦では168のポイントを持ちランクは11位で、仲間の中では低い部類に入るランクだったが、それは総合評価制度によるものが大きく、また、アーウエツト^ルデンスに敗れたこともランクを下げる一因となっていた。強力な砲撃魔法に飛行魔法も得意と来れば普通早々負けることは無い。要するには勝ち負けという土俵上ではかなり有能な部類に入るのが魔理沙である。そしてその長所は広大な空間で更なる飛躍を遂げる。様々な設定も魔理沙を助ける形となり、最速である7分で試験をクリアすることとなった。

「高速飛行でエレメンツの反応を見つけた後に、空からの極大射撃^{マスタースパーク}か砲撃呪文で終わりか。巻き添え含めて合計422ポイント……。これはいいのか悪いのか分からないけど、まっ、良しとするか。」

？

カミナ^リグロリーの場合

近接戦を得意とするカミナには今回の試験設定は不利である。どう考えても一方的に攻撃の出来る遠距離砲撃が有利であることは間違いない。そしてカミナは非常に正直な、正々堂々とした性格である。闇討ちや背中から切り捨てることはせず、名乗ってからの戦闘が多い。その結果決して戦闘能力が劣るということではないが、ポイントは能力と比較をしてしまうと低い値となってしまうていた。

「……ふん、名乗る馬鹿はいないだと。そうか、でもな、他の奴のやり方など関係無い。俺様が名乗りたいから名乗っているのだ。そこにおかしいところなどは無い！」

？

レノリアⅡアークスの場合

元々戦闘能力に秀でた人間ではなかった。神を経てまた人間になったからといって魔法ランクが急激に向上することは無い。他のメンバーと比べると一回り二回りほど劣っているのは確かだ。それはレノリア自身も自覚している。だから自分の能力を最大限発揮できる環境を作ることには注力をする。その為の幻影魔法であり、多大な経験であり、自己把握であるのだ。前者一要因（幻影魔法）は一度目のヒトの生で得意としていたものである。唯一レノリアが誇ることが出来、そして神を経る事でレアスキルに見間違う程のキレを持つまでに至った。後者の二要因（経験・自己把握）が影響を与えていることは間違いない。生物の意思と触れ合い、取り込む量ではまず一番の存在だった神だったのだ、その詰み重ねは10や20の子供とは比べ物にならない。

「はい、5人目です。・・・相手が悪かったですね。」

以上、ウォースの仲間たちは概ね良好な状況であるといえる。個々の能力が高く、彼ら仲間内での不戦協定があり、幸運なことに強者とぶつかつてはいなかったのだ。スムーズに行かない方がおかしい。

なら、その強者達は何処へいったのだろうか？

アーウェットⅡルーデンス。彼はレアスキル、強化増強サラニツヨクにより常に

トップの存在であった。ミスカトニツクは優秀な生徒が集まり、彼のような俗に言う規格外も同級に数人存在していた。彼はその中でも圧倒的な強さを誇り、そしてその純粋で強力な力は学友を魅了することとなった。彼がナンバーワンだ、と。アーウェットは飛び級も幾つかしており今の同級は年上が大半である。だが噂とその実直な強さは、彼を同クラスになった時点でトップに押し上げた。無口で、偶に発する言葉は荒々しく、不器用な人間だが、同級からの信頼（信用？）は厚く、自身もその想いの存在は感じていた。

そんな状況下であの事件が起きてしまったのだ。初等科程のガキが飛んできたかと思いきや、絶対の信頼を背負う彼を打ち負かしてしまったのだ。同級の生徒達は複雑だっただろう。そしてそれ以上に彼も……。

事象というものは全てが自然に流れるものである。彼（等）が次に選択するであろう未来は全ての蓋を開ければ当然といえるものだった。その内容は以下である。

？
この作戦に参加するメンバーはトレイルⅡディンⅡウォースに遭遇した際、過剰な砲撃魔法を空に発射する。

？
その砲撃を確認した生徒はトレイルⅡディンⅡウォースがリーダー内に入るぎりぎりの地点まで接近する。

？
アーウェットⅡルーデンスが接触、合図の後に一斉に攻撃を加える。この有用性は彼の仲間の一人であるレノリアⅡアークスによるものである。

？
もしトレイルⅡディンⅡウォースの仲間が加勢に入ってきた際には

アーウェット＝ルーデンスが対応を行う。

？

もし自身のポイントが減少してきた際は作戦からの離脱を許可する。決してダウンさせられることが無いよう注意する。

？

その他不具合が発生した差異は各自の判断にゆだねるものとする。

？

トレイル＝ディン＝ウォースがポイントゼロになった時点で作戦は終了。即時解散とする。その後については各自裁量にゆだねる。

？

この作戦にはトレイル＝ディン＝ウォース及びその仲間達を除く、個人戦ランク50位以内の人間を参加可能対象とする。

サイレンの発令後2分で、39名がウォースを囲むこととなった。そしてウォースの正面には邪悪な笑みを浮かべるアーウェットの姿があった。

「ははっ、・・・さて、試験開始だあ。」

1 - 19 話 試験最終日 3 (後書き)

気付いたら400、000PV、55、000ユニークを突破して
いました。

皆様方どうも有り難うございました。

ややこしくなってきたんでキャラ紹介でも作ろうかと思ってます。
次回頑張ります。

トレイル＝ディン＝ウォースの周りには多数の生徒が取り囲んでいた。そしてその面子は皆個人戦BEST50以内であったから、決して烏合の衆という訳ではない。といつてもミスカトニツクに烏合などいるはずも無いのだが。そして目の前にはアーウェット＝ルーデンス。どっからどう見てもこれから一方的な戦いが行われるようにしか見えなかった。取り囲まれているウォース本人も同じ気持ちだった。

(まさかここまで用意していたなんて……。試験開始後会った奴が、急に表情を崩して上空にでかい魔法を打ち上げるんだもんな。怪しすぎて逆に手も出せなかったわ。ボケーっと突っ立ってたら何時の間にこれだ。・・・アーウェットの仕業なんだろうな、めんどくさい。)

「くくくく、・・・あまりつるんでやんのは性には合わねんだけどな、負けっぱなしってのも納得いかねえんだよ。そこでおめえの取り巻きの弱点発言だあ。これは人集めるしかねえだろ。・・・せいぜいあげよ。」

ア・ウェットが腰をかがめた。場の空気が一気に張り詰める。この場で先に仕掛けられる程ウォースは状況を整理できていなかったし、周りの数十は計画通りに動くため合図を待っていた。完全にア・ウェットが場を支配していた。

「ははっ、・・・さあて、試験開始だあ。・・・あああ!!」

言い終わると直ぐにア・ウェットの拳がウォースの腹に突き刺さる。

ア・ウェットの強化魔法上の強化増強^{サランニツコウ}。その威力は恐るべきものであり、通常はこの一撃で終わってしまう、が、そうはならない。ウォースはア・ウェットのスピードを知覚し、何とか一方通行の発動^{アクセラレータ}に成功、相手に力のベクトルを返すことまで完璧に実行した。

「くくく、そうだ、そうでなきゃここまで用意した意味がねえよ！」

ア・ウェットは突き出した右手を引きぬく、と同時に周囲から弱射^{コト}撃魔法がウォースへ一斉に放たれる。その数は数百ともいえようか、ウォースだけでなくア・ウェットへの被害が発生することも全く考えずに打ち込まれた攻撃に、ウォースは少し笑い、トンと地面を足で叩き込んだ。その直後地面から反作用で返ってきたベクトルを操作し彼は魔弾の集中豪雨地帯から逃れる地点まで飛び上がった。

「あいて、！！！」

爆音鳴り響く地面を空中から眺め、今さっき拳を放ってきた相手を目で追おうとし呟いたウォースは、背後に熱源を感じその場を逃れる。僅かな刹那の後、そこへは空気が切り裂かれるようなケリを入れるア・ウェットがいたが、ここはウォースの回避が上回る。また乱雑的に光が飛び込んでくるが両者がかすることはなかった。

「そうか、お前は俺の足止め係か！天下のア・ウェット様が落ちぶれたもんだ！」

「そうだな、そう言われても仕方ねえや。でもよお、負けるよりはいいだろ！」

（開き直りやがった！ちい、めんど臭い、こういう奴が一番やつかいだ。あとひつきりなしに飛んでくる魔法もやつかいだ。奴に当たっても大してダメージがないようなもんばかりだから、俺へのリス

クだけが残りやがる！)

ア・ウエットと打撃の押収を行いながら、状況の悪さについてウォースは頭の中で唸っていた。まずア・ウエットの攻撃は受けることはいけない。何故なら一瞬行動が読まれ、そこに魔法が集中してしまうからだ。かといってア・ウエットの攻撃を回避することだけを考えると、集中はしていないがそれでも多い魔法郡の中へ飛び込んでしまう。ウォースの空間認識能力は人並みではないものがあるが(才能と特訓により)、それにも限度がある。今はまだ致命的なダメージはないが、一瞬でも気を抜くとゲームオーバーであるこの状況は、彼のこれまでの経験上最悪であった。

だが心中で唸っていたのはウォースだけではなかった。一見一方的に追い込んでいるように見えるア・ウエット側も苦境に追い込まれていたのだ。

(最初のやり取りで仕留められなかったのがいてえな。右手は使いもんにならねえし、弾幕も薄くなる一方だ。奴の対応も若干ずつだが鋭くなってきてやがる。・・・ここらで一発仕掛けるしかないか。)

彼らのやり取りは、天井裏にいる人間のほぼ全ての視線をひきつけていた。それも当然、主要メンバーの殆どがそこに集まり、その内容があまりにいびつ過ぎたためだ。これには普段ポーカーフェイスを貫く、とある三佐も舌を巻いていた。

(『改造人間』、ア・ウエット＝ルーデンスと、決して弱くない37人を引き連れてあそこまで耐えるとわな。理解できぬ存在)戦でもこんな密度はそう無いだろう。確かに俺は『英雄』と冠した張本

人だが、ここまでやってくれるとマジものの『英雄』にされかねるぞ。)

彼は同席者が気になり隣の様子を伺う。隣には慈善団体神の導きの代表と秘書、S Pが上品に座っていた。彼らも当然ウォース達のやり取りを眺めていたが、それぞれの目にはどう映ったのだろうか。その一人、元よりウォースを気にしていた代表は冷静に分析をしていた。

(・・・生では初めてですが、まあ順調というべきですかね。だが、これでは使えませんね。まだまだ『英雄』にはなれない。私を失望させないでくださいね、ウォース君、ア・ウエット君。)

それは偶然だった。ただただ気になったただけだった。この空間でもある程度接近すると気づいてしまう物凄い魔法の押収。9割方その中心人物には気が付いていた。そしてそれに遭遇した時の対応は、常に笑顔の彼女から伝えられていた。そう、まるでこの瞬間を見通したかのよう。

『ウォースは非常に危うい存在です。その規格外の才能で他者を圧倒してしましますが、逆にそれ以外はからきしです。皆さんもご存知のように砲撃魔法・飛行魔法以外は大したことはありません。もし今の状態で先程食堂で私が暴露しました弱点を付かれるとあっさり敗れてしまう可能性があります。恐らくは賢いウォースです粘りはしますが気を抜けば一瞬でしょう。なのでここで成長をしてもらいます。食堂にはア・ウエットさんがいました。間違いなくア・ウエットさんは動くでしょう。彼は頭の良いヒトです、良い試練になってくれると思います。何故こんなことを申し上げたかという、まあ

既に分かっているかと思いますが皆さん、手助けは無用ですよ。ウォースの目標は理解できぬ存在です、ここで危うさを薄めることが出来るどぐつと生存率が上がるのです。宜しく願いしますね。』

手助けなど出来るものか。眼前のやり取りは彼女に二の足を踏ませるだけの威圧感を十分に発していたのだ。まさかアーウエットがここまで行つとは。そしてここまでウォースが凌ぐとは。ただ博麗霊夢は景色に圧倒されるだけであつた。そして呟く。

「やっぱり、私たちは必要ないんじゃないの……。」

「大したもんだあ。この数の魔導師に囲まれてここまで持つとは……。あのチビが俺を誘い出すところまでは分かつてたが、ここまでためえも耐えちまうとは思わなかつたぜ。……。」

アーウエットはウォースと軽いやり取りの中（当然土砂降りのような弱射撃魔法は飛んできているのだが）話しかけてきた。当然ウォースには攻撃のタイミングを与えるような隙は与えないレベルでだ。

「……。」

それに対し、ウォースは返さない。当然そんなところに思考を割ける余裕はない。それに対しアーウエットは喜々とした表情で再度話しかける。

「くつくつく、ああ、どうした？俺などとは話が出来ないのかあ、それは失礼致しました。くつくつく、まあ良い、」

そこで話を区切る。その直後大きく腕を後方へと振りかぶる。ウォーリスは即座に大きな一撃を警戒するが、その必要性がないことに瞬間的に気付く。これまでの攻撃から奴は既に俺の防御は強弱に関係ないと分かっているはず。なのでここに来て振りかぶる必要はないのだ。

(なら、何だ?・・・まさか!?)

ウォーリスは脳のソースを一部を割いて周囲を探索、その理由は閃きの元になった弾幕の薄さだ。若干彼の奇妙な行為の後薄くなった気がしたからだ。何かやらかす、ウォーリスは確信に近い思考に基づき行動を起こす。だが、その探索は彼に、不幸にも隙を与えることとなる。

(・・・ん?これは、・・・霊夢???)

僅かにうるたえたウォーリスを逃すほどアーウェットは聖人ではなかったし、そもそも、次の段階にコマを進める準備をしていたのだ。当然ウォーリスがどういう状態であれ、フェイズを前に進める。

「・・・ジ・エンドだ。」

「・・・ああ??」

ウォーリスはアーウェットの呟きで我に返り、呻き声のような声で反応を見せた。
が、遅かった。

「、なっ!?!」

弾幕は既に止んでいた、が、その代わりに、膨大な数の鎖魔法チェインが絡み付こうとしていた。その数は最早瞬間的には理解できない、いや、する前に逃れる、事もできない、その魔法は彼を四方八方から包んでしまっていたのだ。

そして、降り注ぐ。その姿はまるで、くもの巢にかかった蝶のよう。ウォースは全てを一方通行アクセラレータにて締め付ける力をいじり吹き飛ばす事を思考し、実行する。所詮は力による締め付け、一つ一つ解析する必要はない、が、物理的な力にはめっぼう強く中々割れてくれない。そして、

「馬鹿か、テメエはああ!!!」

アーウエットの溜めに溜められた攻撃への対処が遅れる。

(アーウエットの攻撃対応がまず先! そう、所詮は鎖魔法チェイン、その後で良いだろっ!)

ドズン

「くううう、・・・うっ。」

そして瞬間的に対応を行ったウォースは再度アーウエットの拳を砕くことに成功をし、鎖魔法チェインの解除に戻る。アーウエットの攻撃から逃れるためにもさっさと解く必要があるのだ。

だが再度思い出してみよう。何故、ウォースは、アーウエットの攻撃を、避けねばならなかったのか? 大してダメージを受けることのないアーウエットの攻撃などどうでもいいだろう。いやいや、受けたときに一瞬静止することが問題だったはずだろう。では何故止まってはいけないのか? それは豪雨のような弱射撃魔法シュートを避けられない為。ウォースには多過ぎる魔法を処理する能力は無い。なら受け

てしまった今はどのような状況なのか？そして敵さん達は今の状況に目を瞑ってくれるのか？

その答えは、ウォースが鎖魔法チェインを破る為の時間中、アーウエットの攻撃を受けている時間中、そして再度鎖魔法チェインとの格闘を行ってしまった時間中に溜められた七色、正確に言えば一人ひとりの魔法の色は若干ずつ異なるので、39色の弱射撃魔法シュートの雪崩により明らかにされた。

「くくつ、これが俗に言う、骨を砕かせて命を絶つ、って奴だぜ。
・じゃあなあ。ウォースよお！」

アーウエットの咆哮をも飲み込む轟音を従えた光の激流は、空中に礫にさせられたウォースを、軽々と飲み込み、蹂躪しつくした。

その光景を見たものは誰もがウォースの、この試験における、敗北を確信した。

そしてそれは現実となった。

トレイルⅡデインⅡウォース初の敗戦は、彼をあらゆる意味で折り尽くす結果となった。

1 - 20話 試験最終日 4 (後書き)

9 / 9 少し修正 + 追加

色々考えすぎて頭が痛いといれです。

一応第一章的なものはここで終了、次から二章に移ります。

なんか書いてて微妙な気がしてきたけど、行けるとこまで頑張りますので、応援宜しくお願いします。

あと、おもしろいタグ名を募集します。

感想欄に書いてください。

幕間 1 新たな乱入者（前書き）

これは短いです。

幕間1 新たな乱入者

神界でも当然土地の格付けというものはある。公共施設や商店、娯楽施設なども存在しており、存在があるのなら偏在があり、偏在があるのなら格差が生まれる。この理屈は例え神界でも変わらない。そしてその神界で堂々と一等地と呼べる場所に、ノレービアの屋敷があった。今はそこにノレービアはいない様だが彼女と同ランクの神が存在していた。彼の神の名はガミー、第2級神に名を連ねる、『確率』の神である。『運命』の神であるノレービアとは、互によく似た概念をつかさどる神として親密な交流があり、気まぐれなガミーは今日もN.O.Aポで押しかけてきたのだった。しかしノレービアは不在。少々不機嫌となった彼は屋敷で待つと言い出し、現状屋敷で無関係者ながらガミーが最高位の神として君臨することとなつてしまった。・・・とは言つても何も出来ないのだが。ガミーは通された客間で見知った顔である、第4級神の位についているフローレンスに話しかける。尚、フローレンスはノレービアの右腕に等しい優秀な神で、よくガミーとの交流に混じることがあった。

「なあフロー、ノレの野郎は管理界に行ったそうだが、あいつは何時からそんなにアグレッシブになったんだ？聞くと最近結構行つてるらしいじゃねえか。もっとこの屋敷で忙しく働いているイメージがあつたんだが・・・。今日も折角仕事の邪魔をしにきたっていうのに・・・。」

ガミーは神っぽくない神である。ただ、分かりやすい性格をしているので、結構神界でも敵は少なく味方は多い。明らかにかいらん事を裏で画策しているようなイメージのある（実際もそう）ノレービ

アは敵が多く、素直でかつ馬鹿っぽいガミーの存在はノレービアとしては貴重であり、ガミーとしても可愛い女の子（外見！！）にちよっかい出すことは好ましいことらしく、良く分からない安定感で現在に至っているのだ。ちなみにガミーは髪は短く立てており何にでも興味を示すやんちゃそうな若者といった風貌をしている。

「あっちゃー、それはそれは悪いときに来ましたねー。．．．つて、『邪魔しに来た』って！どういうことですか、ホント毎度のことながらガミー様、貴方ちゃんと神様してますか？確かにガミー様は歓迎している節はチヨイチヨイ見えますが、それでも真正面から『邪魔しに来た』は無いでしよう。全く第2級神様ともある方が、はぁー、嘆かわしい。」

「．．．何時もの如く、ためーは齒に絹を被せないな、まあ慣れたが．．．。あと、話が長い。そしておまけに俺の質問は何処に行つた？さつさと回収してこい。」

「すみませんすみません、どうも性分で．．．えとあー、ノレー様の管理界行きの原因でしたね。ノレー様は現在『英雄計画』に従事しています。その調整ですね、簡潔に言うなら。」

「なら最初から言え！．．．そうか、『英雄計画』か．．．。」

ガミーは少し考え込み、そして椅子を立つ。フロレンへは別れを言い、来た時とは異なる方法で帰路に着く。それは『確率変動』だ。ノレービアの屋敷に存在するガミーの確率を減少させ、これから移動したい地点にガミーの存在確率を上昇させる。最終的には100%と0%が入れ替わる。100%あるものはその可能性が下げられると不安定な状態となり、100%に戻ろうとする。この戻ろうとする力が非常に強力なので確率はそうそう操作が出来ない。

だがガミーは別である。この非常に難易度の高い操作を意図も簡単に行えるのだ。そのカラクリは彼の存在が触媒となっているからであるようなのだが、詳細は不明である。そんな彼は第2級神という

立場ではあるが、能力・神力だけを見ると第1級神とは遜色が無い。彼には上昇志向が無いので今の地位に留まっているだけなのだ。そんな彼だから下位神も積極的に登用しないし、神力を増やそうとする策を練ったりすることは無い。逆にせつせとそれら行為を行うノレービアをガミィはこれまで見てきたが、何故そこまで必死に行うかが分からなかった。もうノレービアだって第2級神だし、しんどいことを進んでやるよりも、楽しむことを行った方が良いだろう、と思っていた。なので今ノレービアが進めている『英雄計画』、これに彼は少し興味が沸いたのだ。そう、理解できないノレービアを理解するために。

「さあてならば俺も行ってやろうじゃないか、奴の管理界へとな。」
これにて1つの管理界へ2人の第2級神が集うこととなったのであった。

2 - 1 話 4年後、再び回り出す齒車

とある管理世界ロスメラーゼ。その中心都市フアクアーの繁華部から外れた場所にルルトの教会がある。聖王会はベルカの民が中心となって築き上げられた管理局にも影響力のある組織だが、ルルト教はどちらかというと学校寄りの組織である。教会は読み書きに加え、生活上覚えておくべき規則や訓辞を教える場所で、大抵の管理世界に協会は存在している。要するに宗教色が軽くなかった幼稚園のようなものだ。このルルト協会フアクアー支部も同じで、現在3名の教師（宣教師ではない）が在籍している。一人はこの支部の長、ノース・アライウエーン、そして残り二人は……

「いやあ、まさかロスウエーがあそこで川に飛び込むとは思わなかったわ。」

「そしてロスウエー君に続いて飛び込んだと……。それに関しては何も文句はありませんよ。でも何故びしょびしょになっているのですか？」

「必死だったからなあ。……まあ仕方ないさ。」

「自分で納得しているのですからいいです。ただロスウエー君もお母さんのところへ届けましたし、早く着替えるか乾燥させましようね。」

「……分かってる、分かってる。」

明るい声で会話をしながら協会の方向へ向かってくるのは、一人は全身びしょぬれで歩いた道を黒く染めている少年で、もう一人はその少年に笑顔半分呆れ顔半分を向けている少女だった。二人とも彼のミッドチルダ最高峰の学園で飛び級を重ね卒業した秀才であったが、訳合って教会の教師役を買って出ていたのだ。

「アンタ達、またロスウェーにやられたのかい？全くこりないわねえ。あんな悪戯坊やおちよくられてはミスカトニツクの名が泣くわよ。」

そんな二人に大きな声で呼びかけるのは彼のノース「アライウエーン。ボランイアで教師をやっている肝つ玉母ちゃんだ。ちなみに初等科に通う息子が二人いる。息子の面倒と家事をこなすだけで十分忙しいはずだが、『誰かがやんなきゃいけない仕事さ。なら私がやったっていいだろう。……偶に料理とか野菜とかもらえたりもするしね。』とニヤリと笑いながら話す姿は良く誰もが目にするという。ただ目にしてしまうと何か持っていていかなばならないという考えが生まれてくるので、中々どうしてしたたかな人間なのかもしれない。

「ノースさん、ロスウェーとミスカトニツクは関係ないですよ。ただのおつちよこちよいが自爆しただけです。」

「……もう少し言い方ってもんがあるんじゃないかな。少し凹むわ。」

「凹んでるんなら隅っこでやって頂戴。私たちは先に昼ごはんにしましょう。」

「そうですね、私も仕上げを手伝います。」

「お、チヨイチヨイ待て、『まて？』いやいや、待ってください。」

「はい！水を飛ばしましたんで準備完了です。さあ昼飯にしましょう。」

「……やれるんならさっさとやれば良かったのに。」

「しょうがないねえ、二人とも準備手伝って頂戴。」

『はい！』

朝だけ行われる授業が終わるといつも三人で賑やかな昼食をとる。決して豪華な食卓ではないが金をかけても得難いお袋の味に文句をつける理由は無い。がつつと少年少女は食していく。そんな二人

をまるで母親のような目線で眺めるノース。町の一区画で毎日繰り返し返される暖かな風景、それが現在のウォースとレノリアがいる場所だった。

「お疲れ様でした。」

「お疲れさんです。」

「はい、また明日も宜しくね。」

午後3時、掃除や明日の準備など仕事が完了するとウォースとレノリアは教会を後にする。ノースは大抵もう少し残り仕事を行うことが多い。何をやっているかウォース達は良く分かっていないが責任者としての何かがあるのだろう。特に気にすることではない。ウォース達はその後彼らのメインの仕事場へと向かう。それがここ、教会から歩いて10分ほどの場所にある少しメイン通りからは外れたビルの3階にある『なけなし屋』である。

「それにしても『なけなし屋』って何ですか？他にもっと良い名前があるかと思うのですが……。」

「言うなれば、……閃き、かな」はいはい、先に入りますよー」……」

頂垂れるウォースを置いてレノリアは扉を開ける、と、

「全くもう先輩方は時間というものをホントに守れない方達ですね！」

デスクに座りながら呆れ顔だけをこちらに向け、小姑宜しく発言を

共にして出迎えてくれた。その呆れはもう諦めも含まれているのだろうか、心底怒っているというわけではなく何時もの事といった慣れた感じであった。

「スマンな、黒子。でも3時に終わる協会から出て、3時にここに来れるわけないだろ。まあ、諦め「3時スタートを決められたのは貴方でしたわよね、ウォース先輩？」……あははは、そうだ、4時にするか」そういう問題でもないでしょうに、もう良いです。……お二方ともいつもので宜しいでしょうか。」

白井黒子。茶色のロングヘアをサイドで纏めている、通称ツイントールを採用している身長は低めの少女、しっかりしているが口調が少し老けているのが玉に瑕だ。ファクアー魔法学園中等科1年（彼女も4年飛び級をしている）に在籍しており、何故かウォース・レノリアに非常に良く懐いているせいかこの大してぱつとしないなけなし屋で1年以上バイトをしている、将来色々な意味で有望な少女である。年齢は1つ下なので敬称として『先輩』を採用しているらしいが、彼女も年齢にそぐわず精神年齢が高く、その会話内容に知識的な齟齬が生まれるということはない。というか名前からしてエラーであると分かる。当然最初のきっかけを作ったのはウォースであったことは言うまでもない。

「ああ、頼むわ。黒子を入れる茶は旨いからな。」

黒子の作業を横目にウォースは自分の席に座る。最上品ではないがしっかりとした質感を残すその机と椅子を彼は気に入っていた。最初は金がなくレノリアと家具を揃える時は最も安いものを選ばざるを得なかったが今はそうではない。そこそこ軌道に乗ってからは少し余裕が出てきて自分の趣味を出せるようになったのだ。ウォースはまず最初に自分の机と椅子の改良に有る意味引く勢いでレノリア

に迫り、有無を言わずOKを取った。彼は形から入るタイプの様だ。

レノリアはというとウォースの机の正面に90度の角度で配置されている自分の机の上の書類を整理し始める。ちなみに正面は黒子だ。ウォース・レノリア・黒子がこのなけなし屋のフルメンバーとなっている。16時00分から20時までの短い時間帯を不定期に営業しているなけなし屋に皆様も是非お越しくださいませ。

「はい、ウォース先輩、りよくちゃ？でしたっけ、どうぞ。」

「うん、サンキュー。やつぱり元日本人として緑茶は外せん。ここに来てようやくそれっぽいを見つけたときは感動したが如何せん淹れ方が難しいときた。そこで黒子、お前の登場だ。これを入られると聞いた時は涙が出そうになったなあ。」

「…………… ホントはルワールというのですよ。でもそのお顔を見てしましますとどうでも宜しくなってしまうすわね。…………… レノリア先輩どうぞ。」

「有難うございます、黒子さん。…………… いい香りです。」

窓の向こうには隣のビルが見えるだけの景色を眺めつつ、緑茶を口にしながら、『ココの黒子はレノリアには興味をしめさんのな、…………… なんか寂しい』とかしょうもないことを考えているウォースに、扉を叩く音が降りかかる。

「失礼、こちらが彼のなけなし屋で宜しいのでしょうか。」

スーツで上から下まで固めたダンディーなおっさんがそこにいた。…………… いつもの件だなとウォースは頭を巡らせながら、大事なお客様へ挨拶を行う。

「ようこそ、なけなし屋に。本日はどのような重大案件コトをお持ちで

しょうか？」

なけなし屋。それはこの二年で惑星ロスメラーゼのパワーバランスを崩してしまつた存在であり、フリーな組織としては最大の戦力を誇る存在でもあつた。推定空戦SS、AA、Aを抱えるこの組織は、表向きは何でも屋を称し裏では傭兵染みた仕事をこなし、確実に影響力のある地盤を築きつつあつたのだ。普通なら管理局の検挙対象になつてもおかしくないが、何故かスルーをされていた。その原因は上部の手が周つているとの噂もあるが、管理局自身がなけなし屋を利用してゐる点が最も信憑性が高い。随時万年何時でも人手不足を謳う管理局としては、ミッドチルダから次元船で3日かかるこの惑星に多大な戦力を投入することを是とほしないのだ。何やら色々グレーだがこれが政治というもの、この状態を作り出すために三面六臂の活躍を見せたのは交渉術の天才、レノリアであつた。頻繁に武装衝突が起こり得る状況を作る為に現地の組織間に緊張を持たせ、短期的でなく長期的な警戒を必要な惑星にしてしまい、その役を管理局から委託されるように導いたのである。……何処の今孔明だ。だが決して衝突は起こらない、起こさせない。ウォース達も戦争を良しとはしない。なら何処でガスを抜くかというと……。

「武装組織RKI-Dと星の警察を謳う国家機関AMKの衝突が来週にも発生する見込みです。被害を算出するに双方併せて数百人、そして民間人は数千に及ぶ見込みです。どうか介入を。」

このおっさんはロスメラーゼ政府の高官であるとのこと。ロスメラーゼは多くの国が自治をしており、ロスメラーゼ政府が統括をしており、この男は10歳未満のガキどもに真剣な顔持ちで話をしてゐる姿は客観的にはアホっぽい、中々偉い人らしい。

「了解しました。本日明日中に背後関係、情報の確認を行いますの

でデータの送付をお願いします。また見積もりは追ってお送りいたしますのでご了承を。」

ウォースもこの職に就いて二年、様になってきたものだ。依頼事項を話し終え了解を取り付けるとおっさんは事務所をいそいそと出て行った。まあ、茶を飲みあい談笑する仲にはなれないだろう、年齢的に。

「さてと、久々の大暴れだ。この奴らも懲りないようだが起こすというのなら俺らは止めるだけだ。いつちょやってやるか！」

『はい！』

要するにはそういうこと。ガスはガスを溜めた本人が抜いていく。やっていることは派手だとしても、なけなし屋、『なけ』も『なし』も無いと言う事。つまりは何も生み出すこともないが、何かを無くすこともない、意味のない存在であるという意味である。ウォースがとった選択は余りにも虚しい空しい道であったのだ。

「准尉方、少し待ってください！」

グレナガン管理局本局の廊下を駆ける二人の少女。もう入局して年数が経っている筈だが歳相応の幼さを残しており、それは行動にも漏れ出しているようであった。

「私らは別に逃げやしねーぜ、なあ霊夢。」

「廊下は走るなど初等科で教わったでしょう」「私らは教わってはな
いがな」「屁理屈言わないでよ魔理沙！」

「あいあい、……それにしてもお前等どうした、そんなに急いで。」
ようやく追いついた少女二人に向かって問いかける魔理沙。一人はオレンジ髪のツインテール目はきりつとしていて意志が強そうな印象を受ける。もう一人はスポーツ少女が完全に当てはまる青髪ショートのをしており、明るさを振りまくタイプの様だ。

「カミナ空曹が、「執務官合格されたらしいでs、グフツ!!」

ショートの少女がオレンジツインの言葉を被せて言い放つ、少しむつとした表情を浮べるオレンジ、すると言い放とうとした間際、見事なドロップキックがその腹に突き刺さる。ショートは吹き飛び壁に激突、放った本人は体勢を立て直し驚く少女達の正面に立つ。

「ティアナ、スバルよ!!俺が二番目に伝えたい人間に対してはらしてくれようとは偉くなったものだ!!その罪は万死nゴツ!!」
「後輩に手を上げるな馬鹿者めが」

「……………畜生霊夢の野郎、……………ひじでやりやがって……………」

いい気で飛んできたカミナに突っ込みを入れるは定評のある霊夢さん。

「はははは、そうかそうか、合格したのか、それは良かったな!早速パーティー準備だぜ!!」

「あははは「なーにティアナは吹っ飛んだ私を尻目に笑ってるのかな??」

「スバルが私の発言に被せてきせいじゃない。私は知らないわ。」
「なんだとー!!」

腕を振り上げるは、青髪が映えるスバル!!ナカジマ。元々陸士で首

都防衛の一端を担っていたが今年より霊夢達の下で働いていた。戦闘は専ら近接を好むインファイターだった。そのスバルをあしらっているのはティアナ・ランスタール。スバルとは学生時代からの縁で非常に仲が良い。戦闘スタイルは遠距離を得意とし、幻術魔法も扱いの出来る優秀な魔導師だ。指揮官適正があるせい、スバルを尻に引いている節がそこかしらで見られる。

ワイワイと騒いでいる廊下に白髪の少年が近づいてくる。その表情は怒りで歪んでおり、黙っていれば少女と見間違え顔も機嫌の悪さが伝わってくるほどであった。周囲で見守る局員達ははらはらしながらその後の光景を予測しながら見守っていた。

「静かにしやがれ！！ココを何処かの幼稚舎と間違えてるんじゃないのか？……ちっ手前らか、変わらさずお友達ごっこか、二人抜けてしまったのになあ！ハッハッハッハ！！」

注意した自分も騒音の原因と化している少しズレたこの少年は、アーウェット・ルーデンス二等空尉、ミスカトニツク卒業同期入局者の中では圧倒的な出世頭であった。霊夢・魔理沙の二人が准尉で力ミナだけが執務官試験の勉強のため空曹。揃って一等空士からスタートであったことを鑑みても三年目とは思えない出世スピードであった。他の同期は空曹がやっとであるらしい。

そして苦勞人登場。アーウェットの背後にそつと回りこみ、拳骨。そしてティアナを除く面々にも同じく浴びせた。……カミナだけが異常に痛がっていたことは気にしてはいけない。

「ハアー、全くお前らは……。もう毎日毎日いらんことをばっかりやらかしやがつて……。仕事はちゃんとやんのに、これじゃあなあ。……つたく、情報部から移ってきて優秀なガキが下に入るといわれたのに、これだもんな。……ティアナ！！は、はい！！」

「霊夢までも最近この光景に溶け込むようになってきやがった。……」

…お前だけが頼りだ。お前はこいつらと同じようになるんじゃないぞ。」

「……はい……。」

かつては砂漠の虎……とは呼ばれていそうな、ファウン＝エノアス
はまるで優秀なわが子を見つめるような視線をティアナへ向けてい
た、がティアナは当然苦笑いしか返せないようであった。当然、フ
アウンの後ろには優秀なる先輩方が此方を見ているのだから……。

「……さて、お前等。おふざけはココまでだ。仕事が一件入ってき
やがった。ようやくカミナもちゃんと出来るんだろ。ならお二人さ
んを加入して初めてのフル面子だ。……しっかりやるぜ。」

『ハッ！』

73年最高の新人達である彼ら三名含むこの六名を戦闘員として登
録するは、現財の最重要案件事項を取り扱う為に開設された、遺失
物管理部機動6課であった。尚、現在ロストログアの探索・保護を
行うのは1課のみ、他の課は理解できぬ存在の対策を行う部署とし
て役割を転換している。理由は、遺失物管理部には優秀な空戦魔導
師が多かったから、業務上その担当人員を減らしたとしてもミッド
チルダへの影響が比較的少ないから、トップの気まぐれなどと言わ
れているが不明である。何はともあれ、部内でも最強の部隊といわ
れる機動6課は目覚ましい成果を出し続け、部下が出世するだけでな
くファウンも情報部時代の三佐から一佐まで階級を上げており、そ
の発言力・影響力は元帥クラスでも無視できないものとなっていた。
そんな彼の元で悠々と動く有望な新人達、走り続けられない要因は
なかったようだ。

新暦0075年5月、新たな局面を迎えた英雄達はどのような英雄譚を築くのか。まだ彼らが全貌を見据えるにはもう少し時間がかかるようであった。だが何がどうであるうが時間は進んでいく。それは残酷に、無慈悲に、そして若干の優しさをもって。

2 - 1 話 4年後、再び回り出す歯車（後書き）

さあて二章開始。

準備に時間かけすぎてすみませんでした。

またご愛顧をいただけますようお願いします。

なんかいいタグ候補があれば感想欄に書き込んでやってください。
お願いします。

2 - 2話 ポンプの風景

フアクアーから3,000km離れた、惑星ロスメラーゼ最大の砂漠地帯のど真ん中。ここは惑星最大の武装組織、アルカイ-Dの本拠地である。周囲一帯には高度な結界が張り巡らされており、アクセスキーを持たないものには到達は出来ない場所。持たぬものへは一種の蜃気楼のような現象で迎えられ、近づけない仕組みとなっている。空からの接近も同様だ。また数千もの中継ポイントがある結界なので、解除を行うことも手間がかかり、正規軍の侵攻も解除中に襲撃されることが常で、攻略の困難な要塞と化していた。この要塞には魔導師もランクAAを筆頭に200名常時在籍し、組織的にはかなりな規模を呈しており、政府の頭痛の種であった。

求心力となつているのは、今やどの管理世界でも同じなのだが、理解できぬ存在アンノウン対策への不満である。ミッドチルダは理解できぬ存在アンノウン軍に動員する魔導師を主に徴兵にて集めた人間を訓練し送り込んでおり、全管理世界でこの徴兵を義務としていた。これにより高ランクは当然ながら低ランクの魔導師も不足するような事態が発生してしまい、管理世界になることで得たミッドの魔法技術が魔導師を死地へ送ることになる皮肉な状況を招いていた。

そんな状況を黙認している政府への抗議活動はほぼ全管理世界で広まっております、様々な対政府組織が組織される結果となった。中でも対管理局組織としてミッドチルダで活動をする『Return the Neutral』、通称RTNは他組織との連携の統括を行っており、大規模組織的反抗作戦を主催したことも過去に幾度か例がある程の大組織だった。ちなみにその作戦時の拠点結界の作成を一部引き受けたのがアルカイ-Dであったことはとある筋では有名である。尚、RTNは数年前に主力魔導師と離縁し、その影響力を僅かだが落とすこととなった。だがそれでも最大の反抗組織という御題目は保っており、管理局からすると理解できぬ存在アンノウンに続く頭を

悩ます種となってしまうている。

「噂は信ずるべきものではない、……ルルトの教えは間違いないよ
うですね。」

幻影魔術の申し子であるレノリア「アークス、神の幻影魔術すら見
破る彼女の感性には、惑星一の規模を誇る幻影魔術さえ通じなかつ
たようだ。彼女の呟いた地点はアルカイ-Dの面々が言つ、不侵要
塞のちの中であつたのだから……。

悠々と通路のど真ん中を闊歩するレノリア。彼女には高度なステル
スが掛けられており、眼の良い・勘の良い・頭の良い方であつても
見えない。今の彼女なら這い寄りダイクイアール寄る間をも出し抜くことすら可能であ
ろう。

そんなこんなで、彼女は目的地へ到達。ここまでのセキュリティは
最低限の人間を襲うことで潜り抜けてきたのだが、ここはそうもい
かない。

「……流石に情報統括室のロックは固いと。……ならばやりたくな
いですが割るしかないですね。」

組織を叩くときは頭を最初に。この考えは、敵が圧倒的多数であり
味方に精鋭がいる場合採用される傾向が高い。だが一般的には上手
くないかない。何故なら敵方も馬鹿ではなく、少数に易々と頭を取ら
せない様になっているからだ。そして多数の方が精鋭にも磨きがかか
る。勝てる道理など普通はない。当然ながら情報統括室の扉を破壊
した後、多大で、精強な魔導師が集うこととなるだろう。なら普通
はそこでゲームオーバーとなる。

「噂と一般論は似ていて非なるもののようで、似ているんですね。……両者とも多数の意見である、との点で。」

メインコンピュータの破壊を行ったレノリアがぼそつと呟く。周囲は瓦礫の山であり、無人であったのか、悲鳴やどよめき声はない。ただ引つ切り無しに叫び続けるサイレンが他のメインコンピュータの存在を裏付けていた。レノリアは集ってくる多数の気配を感じながら少し微笑んだ。

「……結構高額だったんですけどね、この噂。……まあ所詮は噂ですか。なら仕方がないですね。」

彼女の前方には、強化した眼でなくとも存在を確認できる距離に、ズラリと魔導師が並んでいた。幾ら高度なステルスであつてもコンピュータを破壊できる魔力を纏っているには意味がない。大声を叫びながら隠れているようなものだ。かといって流れ弾の可能性を考慮するに^{プロテクション}防衛魔法は解けない。世の中上手い事いかないものだ。

「……ここまで入り込まれてしまうと反対に感心してしまいますね。……あーあー、最新のシステムに変えたばかりなのに、ここだけで制御しているわけではないですが、ここも非常に大切な機能なんですよ。」

ズラリ魔導師共の中で魔力の最も高い男がレノリアに向かって話しかけてくる。風貌や口調から、砂漠に陣取る武装組織の人間に見えないが、他の面子の反応から幹部以上なのだろう。

「お褒めに預かり光栄です、アルカイ・D代表、ヴィン＝アディン様。どうせならば噂通りここに全部が集まっていればもっと嬉しかったのですが。」

「……さてはて、何処から入手したのかな。少なくともあれ程高額な噂でしたら怪しい事のほうが多いですよ。目立つものは疑ってかかって下さい。一つ勉強になりましたね。……では、」

ヴィンの声が下がる。そしてズラリ魔導師共が各々の武器を構える。空気が緊張してゆく。

「授業料を頂きましょう!!」

ヴィンの響き渡る声に乗せて戦闘せんぱんが開始された。人員比、1:35。さてはて結末は？一般論通りゲームオーバーとなってしまうのだろうか？

時間を遡り、所を変えたとある地点に、袋のねずみとなる予定の彼女の相棒はいた。この地点も星都ファクアーからかなり離れているが、なけなし屋のバイトはレアスキルであるレポートを持つので距離なぞ問題にならない。それでも二回の長距離跳躍は彼女の魔力を食い尽くしたようで、ファクアーに戻ることも出来ず、二度目の跳躍地であるこの近場の宿で睡眠についているようだ。

「名前だけでなく、能力も原作どおり。エラーの1つであることは間違いないな。」

ウォースは暢気に呟いているが、彼の周りには多数の光線・光弾が今この瞬間にも襲い掛かってきており、一般人なら独り言に腦のりソースを使うなど考えられない状況にあった。

ウォースが現在いる場所は、ロスメラーゼ最大の経済国家が誇る軍事機関、AMKの敷地内で、当然正規の入場申請を行っておらず、

ズンズンと正面から侵入していた。当たり前だが砂糖に群がる蟻のようにウォースの元には軍所属の魔導師が群がり彼を止めようとしたが、その意思は完膚無きに碎かれることとなる。

……というのも、全ての攻撃が彼には到達しなかったたのである。

「なんだよ、なんなんだヤツは！1000人だぞ、1000人！1000人の魔導師が総掛かりで止められねえなんて事あってたまるかよ！！」

AMK第5部隊所属である彼の絶叫も頷ける。AMKには常勤魔導師が凡そ1000人おり、この敷地内にはそれら魔導師の宿舎が存在している。高官は別途各々の施設があるようだが前線を受け持つ戦士達は全員ここにいたわけだ。要するに駆けつけられる魔導師は約1000名。

平日の午後7時、太陽も役目を終え戦士達も休息に向かう時間帯に、異常事態が現れたのだ。施設内に非常時を知らせるアラームが耳鳴りを起こすほど鳴り響き、休息に向かう戦士達を180度転換させた。そして、異常の元に集結し、騒がしく、絶望的な夜が開始したのだ。

トレイル＝ディン＝ウォース。嘗て、ミッドチルダ最高峰の学び舎に在籍していたことがあり、その優秀な種の中でも魔法戦闘技術は突出し、流星群と呼ばれ一目置かれる存在であった。だが、中等部に飛び級をした後に行われた戦技試験で、弱点を付かれ撃沈、その二カ月後に退学をしてしまった。そして色々あり、今なけなし屋の店長をしているのだが、その弱点、魔法が持つベクトルの操作効率の悪さ、を今のウォースは微塵も感じさせなかった。無数に飛んでくる多種多様のベクトルを、1つ残らず、きつちりかつちりと180、いや180。反射させている完全魔法反射能力持ちとしてそこに君臨していた。こうなった理由は分かんがもうこうなると攻

撃は届かない。……そして、

「……さてと、10分経過、今日は余り蒐集出来なかったがまあいいか。……では此方からも手を出させてもらおうかな。」

表情を緩め球状魔法を展開させた彼の表情・姿は、攻撃し疲れた、
スフィア
周りに大勢展開している機関員達にはどのように映ったのだろうか
……。

「……ふう、っと。よくもまあ集まってきてくれたものです。そしてすんなり騙されてくれたものです。」

「……ふふふふ、これが噂に名高い、
ファンタズマゴリア
幻想世界。……なるほど、と

「……つもないですね、これは……。」
「今回はホントに褒められていますね。なら私も本音で返します……。有難うございました！でも、少し手応えがありませんでしたよ。」

「ハハハ、は、……言ってくれますね。でも、この惨状です、何も返す言葉もありません。」

1:35の戦力比は完全に崩れていた。そこら中に倒れている34の面々。そして彼らの誰もが、敵であるレノリアの方向を向いていなかった。唯一意識のあるヴィンは項垂れながらレノリアに話しかける。

「全てがアナタの作戦ですか……。偽の情報と気付きながら頭を叩き、罠に嵌ったように振舞う。そして意気揚々と罠に嵌った我々に幻を見せ同士討ちを誘う。……言葉にしまえばなんて簡単なんでしょうか、しかし、成功に導くのは困難を極めるでしょう。……」

そしてアナタは遣り遂げた。……完敗です……。」「
「ハイ、有難うございました。」

レノリアは最後に一発、デインに浴びせ、施設をそこに破壊して立ち去った。途中で35人の選抜に漏れた雑魚が喧嘩を売ってきたが、少数で勝てるほど彼女の功夫は薄くない。結果は御察しの通りである。

これにて『少女VSロスメラージェ最強（笑）の武装組織』は閉幕である。敗者の被害は甚大で、恐らくは再度立ち直すには、施設や世界の再構築のためにかなりの時間を要するであろう。人員損失は無いものの、金銭損失はどれ程になるだろうか。間違いなく、戦意を抜く役割は果たせたと見えよう。

惑星ロスメラージェで二つの戦闘があった次の日、アラームを無視し、緊急案件にも目を通さず、重役出勤でいつもの様に時間を潰しにやってきたAMK所属の高官たちは、出勤している部下の数が余りに少ないことに、まず怒りで顔を赤くするだろう。そして次に昨日発生したという事件を嘘だと笑い飛ばすだろう。そして実際に現場を目にして部下の冗談でないことを知り、漸く頭から血が下がるだろう。最後にこれから自分の身に降りかかる不幸に絶望をし、真っ青になるだろう。

そしてその事件を起こした張本人がよもや今、教会で子供たちに馬鹿にされていようなど考えもつかないだろう。

また、完敗を喫した機関員達がこれまで以上に特訓に励み、戦技の底上げが発生し、作戦成功率が向上するであろう未来など、予測す

るはずも無いだろう。

そんな高官の行く末などどうでも良いが、この組織は1089名中709名が要治療の診察結果となり、一時的にだが大幅に戦力ダウンすることとなった。これにより他国との関係がややフラットの方向へ推移し、また相対的に政府の力が向上することとなったらしい。

「また先輩方は報酬を全部寄付したんですの？」

レポートガールこと白井黒子はいつもの様に旨い緑茶を注ぎながらウォース達に話しかける。ちなみに時系列的にはとある戦闘から3日後だ。

「……ああ、金はあるからな。お前への特別手当は切らさんから良いだろ。教えであるじゃん、過ぎたる金は身を滅ぼす、ってな。」

「……過ぎたる力の持ち主が言う台詞じゃありませんわね。……ホントに無欲な方ですね。普通お金には際限なく執着するものでしょうに。」

「私達には普通は当てはまらないのです。」

「????？」

「俺にも良く分からんぞ、リア。そして勝手に俺まで括るな。」

「えー、えー、分かってくださいよ、ウォー。」

あれ程の戦闘を繰り広げ勝利した面子も、歳だけ見れば少年少女。ふとしたところで幼さが垣間見れる。ウォースは精神年齢ではいい歳なのでただ単純に馬鹿なのだろう、いや、馬鹿に見えるのだろう、に訂正しておく。最近は直接的な悪口は言えない世の中のようなか

ら……。

「……え、と。宜しいでしょうか……。」

幼い喧騒で充満した部屋には入り辛いのか、腰を折りドアの隙間から顔を出す女性がいた。

年は20歳くらい、金髪ロングヘアを黒いリボンで纏めている。容姿は抜群に美しく、声は繊細。性格は少々弱気なところが伺え、全身黒を基調とした衣装を纏っていた。

この麗人の訪問が、亜流を漂っていた英雄を、再び本流に戻るきっかけとなる。

2・2話 ポンプの風景（後書き）

50万PV有難うございました。

でもお気に入りは初の減少傾向。

……これは喜ぶべきか泣くべきか？？

両方だ！！

やったー皆さん、これからもよろしくお願いします！……うわーん、
戻ってきてください、かむばあーっく！！

ふう。

2・3話 天才と秀才（前書き）

月一連載になっている気がする今日この頃。

アイデアは在るけど纏めるのに苦労しています。

こんな駄文にお気に入りを継続していただいている方々、ホント感謝です。

途中で投げ出すつもりはありませんので、生ぬるく見守ってくださいませ。

2 - 3 話 天才と秀才

「騒がしいところで申し訳ありません、フェイト」テストロッサさん。」

「!？」

名を名乗らずに名を言い当てられた際。人はどのような表情をするのだろうか。まさにその回答がフェイトと呼ばれた女性の顔にあった。

「すみません、急に呼ばれると驚きますよね。しかしアナタは有名な人だ、こういうことは初めてではないでしょう、元管理局空戦魔導師にして、元RTN幹部、…そして現NGB副代表のフェイト」テストロッサさん？」

「…全てはご存知だということですね。いえ、逆に隠し事をせずに済んで良かったともいえますね。」

フェイトは少し微笑みながらウォースに返す。このやり取りでようやく空気が軽くなったのか、他のなけなしメンバーにも再起動がかり、レノリアは新たなユーザーデータをパソコンへ入力し始め、黒子は客人へのお茶の用意に向かう。そして自己紹介も済んだところでウォースは漸く今の状況を噛み砕く。

(原作キャラとのファーストコンタクト、ってやつですか。もう色々あってどうでもいいですが、これってやっぱりリアルなのは世界なんよね、ようやく実感。そして感動。)

本当に今更である。

「さて、フェイトさん本日は如何様で来られたのでしょうか。」

何はともあれ、何がどうあれ、今はお仕事中。切り替えの早いウォースは真面目モードでフェイトに疑問事項を投げかける。

「えと、私達は、NGBでは、今とあるロストロギアを探しています。そのロストロギアを追っていくとこのロスメラージェにぶつかり、この件に関してはココが最も詳しいとの情報入手してここに来ました。」

「…ロストロギアの名前は？」

「魔眼リーディング」シユタイナー。」

「ふふふ、恥ずかしい名前ですね。このロストロギアについて貴方がたの持つ情報を聞かせていただきましょう。その後、何をどうするかを判断します。…それで宜しければ。」

「…その条件をお願いします。」

条件は劣悪。『何をどうするか』なんて、何がどうなるかが分からない、何もしないかもしれない、それでもフェイトは承諾した。目の前の少年、自分の半分くらいの歳の少年に話の主導権を完全に握られていることは十分承知していたが、不思議とそれが自然であるように感じられた。そしてこれまでの経験で今日の交渉は良い結果を得られることを、何の根拠もなくフェイトは確信をしていた。

フェイトの話は簡潔だがよく纏められており、恐らくは出し惜しみをしてないことをウォースは感じ取れた。自分が山田太郎時代のと、リリカル勢ではお気に入りキャラであったフェイトがここでも良い人間であったことは、彼を若干程だが機嫌を良くさせたことは間違いなかった。

「オーケー、オーケー。うん、良きかな良きかな、と。全て我々が

掴んでいた情報とかぶり、何のプラスにもなりませんでしたが、よくも初対面の私にそこまで話してくれました。有難うございます。では、どうしましょうかねえ。その『誠意』に私は報いねばならない、うん、これは難解だ。」

ニヤニヤまでは行かないがそれに近い表情で口ばかりが滑らかに動くウォースは、機嫌が良い状態ということを行なひの二人は良く知っていた。だが何も突っ込みを入れない。商談に関して二人は背景になることが暗黙の了解であったからだ。だがそんなことを知らない人間がこの場にはいらっしやる。

「この情報で足りないでしたら、他に何かをお支払いします。なのでどうか、魔眼の情報をいただけないでしょうか。」

フェイトにとってはこのロストロギアの重要度は高いのだろう。彼女には似合わない食いつき方に更に嗜虐心が擦られたが、明らかに背景からの重圧が秒ごとに重くなっていくことに気付いていたウォースは、惜しみつつもこの三文芝居を終わりとした。

「いえいえ、フェイトさん結構です。我々が必要としているのは『誠意』以上のものではありません。必死な貴方を見て少し悪戯心が芽生えてしまいました。すみません。・・・それにしても良い表情をされた、フェイトさん、貴方組織の中ではいじられキャラを確立されてま

「ウォー、それは仕事上大事な内容でしょうか。」

「失礼しました!!!」

レノリアさんのどす声突っ込みマジぱねえッス…。背筋がぞくつとなった。

「さて、追加の情報だけど、・・・タメ口でも良いですか、なんか肩が凝ってきた。」

「…ええ、別に良いけれども。」

「流っ石あ、フエイトさん話せるぜ。そんじゃま、仕切りなおして追加情報はぶっちゃけそこまで知ってたらあんまり無いのよ、実際。だって、効果、製造時期、製作者、大まかな存在箇所、まつわる工ピソードを持つてるんでしょ、後残るは今の具体的な存在箇所ぐらいじゃん。それ知ってたら俺取りにいくさ。だってそれ目的で俺ココにいるようなもんだもん、色々この星にパイプ張り巡らせてさあ。なんであまり力になれないわ、残念ながら。」

かなりぶっちゃけた男、トレイル「デイン」ウォース。決してかっこよくは無い。

「そうですか、ならば仕方

「ってそうは問屋がおろすかー！ー！！！」

扉を右手で開け放ち、馬岱さんも真つ青な合いの手を入れながら新キヤラ登場。このノリの人間にはめんど臭いヤツしかいないということを上司を見て学んだとあるお二人は頭を抱えた。

「なんだお前は！いきなり入ってきてこの狼藉！私がこの事務所の一国の主と知りながらの行為か！？」

「ふっふっふ、ならばココの主に問うでえ。フエイトちゃんから一方的に情報を絞りだし、その報いが何もありませんは、そら人としてどうなんや？ん？」

「くっ、確かにそれは俺の落ち度や。素直に謝ろう。しかし名乗りもせず、土足で踏み込む理由にはならんよな、お嬢さん？」

「むむむ、…ふう。そこであやまんのは卑怯やないか？」

「まあ、許してくれや。…で、一応聞きますが貴方は誰でしょう？」

「ホンマ一応やな。まあええわ。私はフェイトちゃんと同じ組織のNGBで代表をやってる、八神はやてや。ついノリの良い坊やがいたから乗ってしもうたわ。そして負けたし。どう、名前も知らんアンタ、うちにこーへん？」

「坊やて…。まあええわ。で、話がそれまくりやけど、結局何が欲しいん？」

「スルーか！…うーん、何にしようかな。」

ココで一息。長いウォースとはやてのやり取りは見る人が見るとたわいも無い掛け合い。息が合ったその道に通じるものだけが共有できる愉快的空間。だが価値観の異なる外野にとってはただの五月蠅い空間。終わったことに息をつけるが、切り替えの良さに呆れながら感心もしていた。どちらにせよ両外野にとっては見慣れた光景だった。

「ならなあ…。」

はやての『お願い』はウォースとしては出来れば断りたかったが、美人二人のお願いを避けられるほど前世を含め功夫を積んでおらず、軽く撃墜した。その姿は彼の部下には当然良いものに写らず、後で何かしらかのペナルティが与えられることとなったようだ。

「あーあー、全く、派手にやりやがって。…この始末書は…、って、まあいいか。任務は達成できているからな。」

遺失物管理部機動六課課長ファンシエノアスは、任務先として赴いた現場の有様を見て呟いた。彼は野暮用があり部下に先行をさせ

ていたのだが、到着してみると全てが終わっていた。任務の内容は、反管理局組織RTNの支部の制圧。巧みに偽装され隠蔽されていた支部であり、RTNが作戦に失敗した際の避難場所となっていたらしく、『その守りは鉄壁を通り抜けて攻略不可である』、と任務依頼書には記載があった。実際、Sランク魔導師が数人掛りで攻略を試みたらしいが、半数が屍となつたらしい。恐らくは六課に泥を塗るつもりでどつかのへそ曲がりがまわして来たのだろうが、目の前の光景が『六課』というところを全て物語っていた。

様々な結界・魔法陣が織り成す芸術品のような支部は、そこには僅かな姿形すら存在していなかった。在るのはただの瓦礫。恐らくは『支部』であつたものである。そして頭を天に向け両足で立つ人間が四名。そのうちの一人霧雨魔理沙がファノンの姿を確認し振り向いた。

「かちよー、制圧完了しました。またアーウェットが独断専行してめちゃくちゃにしゃがったけど、私も一発ぶち込んでやったから無問題だぜ！」

「何が無問題なんか良く分かんが、結界とやらはどうしたんだ、確かアーウェットはそういうの苦手だろ。」

そう。無敵の一番槍にも弱点はある。ストレートが好きなバッターは総じてカーブに空振りをするのと同じく、力での制圧が得意なアーウェットは幻影や結界などの搦め手を苦手としていた。

「そこはオレ様、カミナ様の出番だ。先にオレ様が灼熱五指で露払いをしてからアーウェットを突っ込ませたのさ。」

「あと私もアーウェットに盾状魔法を張ってサポートをしましたよ。」

ファノンには驚きはしなかったが、学生時代の彼らを、特にアーウェット・ルーデンスを知るものがこの報告を聞いたらどれ程驚くだろうか。カミナが搦め手を飲み込み、アーウェットが制圧し、霊夢が守り、魔理沙が止めを刺す。なんという長所を生かした連携、そしてそれを受け入れるアーウェットには何があったのだろうか。そこには管理局を裏の裏まで暗躍しているファノン・エノアスの人心操作術があった。局の老人に比べればちよいと有能なだけのペーパーを操ることなぞ朝飯前のファノン、きつちり御した結果がそこにあった。

ただし、

「…確か俺は、『建物は残せ、構成員は拘束しろ』と言ったよな。

それがこの有様か。お前らにとつてはこの瓦礫の山が建物なのか？」

「…。」

勢い盛んな彼らを御すほどには躰は行き届いていなかったようだ。

「あと、だ。新人二人は何処に行った？」

「ええつと、多分あの辺に転がっていますよ。一応結界被せているんで、致命には至っていないとは思いますが…。」

霊夢が指を差すのはマスパの跡らしき爆心地の直ぐ傍。なるほど、血気盛んに敵さんの中心に突っ込んだ結果、味方の砲撃に巻き込まれたようだ。これには流石のファウンも頭を抱える。

「いや、あいつ等が押されてたからさ、ちよいつと援護射撃をと思つて、こうドカーンと打ち込んだのさ。霊夢には事前に目配せしたから、なんとかなるだろうと思つたし…。」

「…まーあ、アンタの目配せの前に結界は張つたけどね。実際魔理

沙のダメージは通していないけどあのダメージ負っていたから、魔理沙の判断は間違えてはないと思います。解決法は粗いですけどね。」

彼ら四人は何だかんだいっても学園時代も合わせると四年の付き合いとなり、入局後も同じ舞台で任務をこなすことが多かったらしい。六課に移ってからには更にだ。互いの能力を理解し、信じあい繰り広げられる連携の相乗作用は馬鹿にならないレベルに達している。現にSクラス数人のそれよりは良い結果をもたらしているといえる。だがそこに異物を含むとどうなるか。彼らの強靱なコミュニケーションに溶け込めるベテラン以外は弾き飛ばされるだろう。『連携』という暴風に単騎突っ込んでいくようなものだ。それを如実に新人共は示していた。ファウンはこの六課というチームに新人を入れることに迷いは無かったが、ここまでも閉鎖的な絆を困っているとは気付いてはいなかった。そこがこの四人の良いところでもあり悪いところであったので、ファウンとしては解消したい思いもあり新人を投入したのだが、未だ結果は芳しくは無かった。

「まあ良い。このレベルの任務なら最大戦力で臨むことが望ましい。…霊夢、二人を回収してこい。カミナ、お前はアーウェットだ。」

「ハイ！」

「オレはココにいる、余計なことはするな。」

異様に白い髪が目立つ六課のエース、アーウェット。ルーデンスがそこにいた。撃墜数は三桁をいくと想像出来る今日の任務であったが、外見は目立ったダメージは無い様に見えた。

「ご苦労だったな、だが少しは加減をしろ。お前なら出来ただろう。」

「その馬鹿に言ってくれ。いきなり馬鹿げたモン撃ちこみやがって…。アレが振って来るまでは屋根は残してやるつもりだったんだ。」

「……どつちもどつちだ……。ん、他に何か不満があったのか、少し苛立っているな。」

魔理沙の一撃は何時もの事、もう慣れていているアーウエットがここまです立っはずはないと踏んだファウンはア・ウエットに尋かける。

「……奴らの殆どは轉移しやがった。高位の魔導師を優先してだ。

そこら辺に転がってやがるのは棒にもならん末端共だろうよ。チッ、まだ奥に掃き溜めがあるようだ。」

「……フン、まあそうだろうな。」

避難場には次の避難場の扉があったということ。こういう事は当たり前のようにあることだが、やはりその結果を掴まされると肩を落としてしまう。

「だが今日の成果が無駄というわけではない。確実に一つ、奴らの重要な拠点を落としたのだ。これ無駄とはいわない。明らかなる前進だ。……さてと、霊夢も戻ってきたしお前等引き上げるぞ。後の処理は地元の奴らに引き継ぐからな。」

こうして七人は任務を完了した。いつもの結果であり、いつもの光景であり、予想通りであった。しかし、その『当然』は通常の『当然』とはかけ離れており、機動六課の存在を『当然』からまた一歩離れたモノとしてしまった。それが積み重なる先には何が待っているか、ファウンは気付いてはいたが、構成員は当然気にしていたモノはいなかった。

「第11避難支部は予定通り、機動六課に制圧を受けました。主要構成員の退避は全員完了しており、全ては想定内の被害です。」
「そうですか、ご苦勞様。通常任務へ、戻ってください。」
「は、ネリー様。」

蒼いポニーが目立つ少女は、傍らの部下の報告を受け安堵する。計画通りの撤退戦とはいえ相手は彼の機動六課、油断をしてはならない。被害者ゼロとはいかないが、主要戦力を失うことは避けたい。ネリーとしてはこんな作戦は反対しかかったのだが、全体を見たときの影響力を説かれては首を縦に振らざるを得ない。

今回の作戦は、ネリー「ティアンカートの右腕と呼べるヘリオン」ティアンカートが立案した。ティアンカートの姓は、神の導きに引き取られた子供を現し、団体は彼等彼女等を兄弟姉妹としている。ネリーはティアンカートの中でも出世頭であり、その次がヘリオンであった。ネリーは単騎での戦闘では右に出るものはそうそういない天才だったが、大局を見る能力には恵まれなかった。そこを補佐していたのがヘリオンであり、彼女はその方面に關してはずば抜けた能力があった。それが無くともヘリオンとは姉妹の中でも特に仲の良いネリーには、同意しないという選択肢は最初から無かった。

「ネリー様は、止めてよ。ヘリオン。」
「しかし、ネリー様は私の上官ですし、部下への示しも付きませんから。」

「ここには、私と、ヘリオンしか、いないよ。」
「……はあ、分かったわ、姉さん。これでいいでしょ。」
「うん！」

ヘリオン「ティアンカート。魔法の腕は大したことは無いが、その

政治力の才の一端に目を付けたノヴァ「ホルナー」により英才教育を受けた、神の導き内でも突出した秀才。今回の、『11避難支部開放作戦』を成功に導いたのは偏に彼女の手腕といえる。内容はというと、管理局内で注目を集めている機動六課にRTNの主要拠点を攻略させることで、その成果を大々的に取り上げさせ、さもRTNが大打撃を与えられたかのように思わせるといったものだ。これによりRTNへの風当たりを若干ながら緩めることが出来るはず、それを狙ったの作戦だった。この作戦を成功させるには、？管理局内の調整、？RTN内の調整、？一般民衆の調整が必要となっていく。？と？は言わずもがなだが、？は何故必要かということ、情報が広まるという事は民衆にも情報が流れやすいということであり、RTNが弱いといった印象は団体運営にはマイナスを与えるからである。なので？は必ず必要。これら三点をきちんと抑え、ヘリオンは作戦を成功へと導いたのであった。

とまあ、今更過ぎるが、反管理局組織Return The Natural、略してRTNは慈善団体神の導きが大きく関与をしていた。少なくとも構成員の一割、幹部の四割は神の導き警備部等よりの出向人員が占めていたのだ。『実戦に勝る経験は無し』の団体訓示に則り、ノヴァが代表へ進言、承認へと相成ったのだ。神の導きから提案をもちかけられた当時は、RTNとすれば丁度幹部構成員が抜けたところだったので渡りに船だっただろう。幹部の大部分を団体メンバーで占められ、設立メンバーの発言力が低下した今はどうだか知らないが…。それにより警備部でもトップクラスの才覚を持つネリーとヘリオンもRTNに属することとなり、現在は幹部として日夜アンチ管理局として動き回っていたのだ。

「次は、私も、出たいかな。」

「ええ、今計画している作戦では姉さんにいい役を用意しているから、頑張ってもらおうよ。」

「うん。」

端から聞くとただの仲の良い姉妹にしか見えない二人であったが、
実質は片や神の導き最強の剣士で、片や号令一つで数万を動かせる
策士であった。戦乱の世は若き天才を生みやすいとはいえ異常な二
人であったことは疑うべくも無かった。

2・3話 天才と秀才（後書き）

ちなみに今日はわし誕生日。

おめでたいことは更新が出来たこと！！

他は無かった（泣

2 - 4 話 ロストロギアは魔眼

「まさか、こんな訳分からん組織に入ることになるとはな。人生とは何が起こるか分からんわ。」

「訳分からんって…。中々酷い台詞やな。ちゃんと説明したやる？ 私の組織の目的とかは。」

「まあ、そうだけだな。使ってた言葉・言い回しはカッコよかったけど、要するには反管理局活動だろ。」

「うぐ、そう言われるとつらいわ。」

「まあまあ、ウォー、あんまりはやてさんを攻めないで。貴方も同意してのことじゃないですか。」

「ちえっ、分かりましたよ、レノリア。…くっそー何で頷いてしまったんだろ…。」

ある程度話は纏まったようだ。トレイル・ディン・ウォースは納得はしていなさそうだが。ここは、八神はやて・フェイト・テストアツサの所属する組織のNGBの本拠地、の廊下である。状況描写の絵柄としては、はやてが他の者を牽引しながら会話をしており、ウォース 不満吐き、レノリア それを嗜め、フェイト おろおろ、という並びとなる。なんにせよ、ウォース達がNGBに支払ったものは『労働』であったことは間違いがないようだ。ちなみに黒子はココにはいない。流石にバイトを反管理局活動に加えるのは両者代表方はためらい、なけなし屋主要メンバーのいない事務所での待機要員で折り合いが付いた。本人は参加したさそうであったが、レノリアのスマイル+説得の前では無力であった。それを見たフェイトが若干びくってたのは仕方があるまい。そう仕方がない。

「確かにさー、信用してもらって情報開示してもらってその返しが何も無いって、客観的に見たらさー、何か糞野郎のすることだよな

「でもオレ言ったよなー、何も与えんかもしれんって。それなのにこの仕打ちは酷いよなー、よなー。」

「ウォー、うざい。」

「がーん。」

ぐちぐちと呟きながら歩く人間へははつきり『うざい』と言ってもいいと思う。そしてそれにどれだけショックを受けたとしても罪はならないと思う。

「…さて、若干一名白くなってる気もするけど、ここがNGBの中心や!」

はやてはそう言い、今まで歩いてきた廊下の突き当りである扉を開け放つ。そこには数名の女性と一人の男性が鍋を囲んでいた。そう、『鍋』といっても空鍋ではないよ、鍋にはきちんとはかほかの湯と、食材が入っている。

「って、突っ込むとこそこじゃないよね!反管理局組織の本拠地の中心で鍋を囲む、て!しかも今まで突っ込まなかつたけど、ここ普通のアパートの一室だよな?!オレ、騙されてる?実はただの仲良しメンバーのたまり場とかじゃねーの??」

「…私は猛烈に感動している…。ついに我が組織に突っ込みが入ったんや!」

「しかも、代表さんがキラキラしてるし、もう意味分からん!」

ウォースの突っ込みは仕方ない。そう。ここは、ちょいセレブチックなマンションの15階。眺めは上々、部屋の広さも中々の上の清流家族用の一室である。決してここにいかかわしい組織が間借りしているとは思わないだろう。

「っと、あまりに嬉しくてトリップしてたわ。まあ、こんなのはほんとした場所やけど、一応秘密組織やから、場所には気にせんといて、って何、先に鍋始めてんの！！私も入れて！！」

はやては鍋を先に始めている、恐らくNGBのメンバーの輪に飛び込む。そしてそのまま食事に加わる。そう、なけなしメンバー二人はこの流れに着いていていないのだ。

「ごめんね二人とも。私の組織はいつもコンナだから。今日が特別ってことじゃないよ。」

フェイトのフォローは二人を、いやウオースの頭を更に痛くさせた。

(いつも、なんかよ。でも鍋囲んでいるやつは流石にオリキャラが多いな。リッター4名とちびリン、ハラウン親子と嫁、そしてアルフか。おお、アリサとすずかもいやがる。これはクロノはハレムだな。そして、うん、確かに説明通り、奴がいないわ……。)

奴とは、リリカルストーリーの主人公にして最強キャラ、皆の魔王様、高町なのは閣下である。はやての説明では、NGBは『Nanoha Get Back』の略であり、なのはの奪還を主目的としているらしい。今から8年前、なのはとフェイト、はやてが入局して1年ほど経った時に、とある事件が発生し、高町家族はこの世から姿を消したのだ。どこの千尋や！、と突っ込んだら皆首を傾げていた。まあしゃあない。ともかく、そこには管理局が絡んでるっばいから管理局を集団で抜けてRTNに入る、が、考え方の相違により独立し、NGBを作ったんやと。まあ人生色々ある。

ここで問題なのは、『管理局が絡んでいるっばい』の『っばい』だ。これだけ抜き出すと変だが、まあ良い。『っばい』とは不確かさを

表す。要は真実を掴みきれていないとのことだ。なのに管理局を抜けた上にアンチ組織まで作り上げている。

(まあ、そのための魔眼でしような。必死になるわけだ。)

魔眼リーディングシユタイナー。形状は眼鏡で使用方法も眼鏡と同じく、鼻と耳で固定をし、レンズを眼にかぶせる。するとするとこれはびっくり、これだけでは何も起こらない。このロストロギアの製作者は少し変なのだ。眼鏡の形状をしているのに眼鏡の使用法とは異なる。全くへそ曲がりなヤツだ。正しい使用法は、レンズを一枚外してから開いた穴に魔力を通す。すると外したレンズに映像が浮かび上がる。この映像は魔力を通した本人がその時最も知りたい過去の画像となる、らしい。なんともおかしなロストロギアであるが、その利用法は多岐にわたる。殺人事件を捜査している警官がコレを使えば殺人風景を映し出し、戦争で恋人を亡くした者がコレを使えば恋人との楽しかった日々を映し出すだろう。また、昨日見忘れたテレビや、見損ねたパンチラ、はたまた気になるあの子の着替えシーンなど、あくまでも、『使用時最も見たい過去の画像』に該当すれば何でもありだ。人の興味関心事は移ろい易いので結構使用機会は多いであろうロストロギアなのである。

『彼女らは、なのはが消えた理由を魔眼を使って割り出す気だろう。或いは現在する場所とかか。……ま、少しは協力する気にはなっただかな、1週間限定だが。』

そう、約束は『1週間組織の手伝いをする事』であったのだ。ウオースはまだまだ鍋と格闘を続けるリリカルメンバーを眺めようやく決心をした。

「よし、レノリア。まずは奴らが手古摺っている彼の『鍋』の掃討を行う。俺に続け!!」

「って、なに割り込んできてんだい、このちびっ子は!」

「あ、それはあたしが育てていた肉…。ガキとはいえ、許さねえぞ!」

「おい、ヴィータ子供相手に暑くなるな、って、それは私の…。」

「あらあら、また賑やかになるわねえ。」

「子供とはいえ、ようやく男が…。」

「何?クロノ君、このメンバーに不満でもあったの?なんと贅沢な。」

「ふふふふ。」

「何?しずか?急に、って、眼が眼が怖い、あ、貴方ってまざか、シヨtt…。」

こんだけ騒いだら隣から苦情も来そうだが、そこは秘密組織の拠点きちっとした防音結界が張られている。用途がおかしい気もするが気にしてはいけない。

「これだから子供はいけないのです、…ん、はやてちゃんどうしたんです、嬉しそうですけど?」

「ん?ああ、気にせんというてリイン。最近何も無かったけど、ちょっとこれからは慌しくなるなて思うたらうれしーて。」

「????慌しいのが嬉しいなんて、変なはやてちゃん。」

「はやて…。」

はやての台詞と笑顔の意味をフェイトは理解していた。事件から8年、NGB設立から3年が経ち、時間の経過ほどの成果が上がっているかというところでもない。個人としての戦闘能力は文句の付け所のない彼女らだが、事件の捜査には他の要素も必要となってくる。局で華々しい活躍を見せていたリンディ「ハラオウンもそれは局の

バックアップがあつてのこと、個人が組織を上回るなんて事はまず在り得ない。最近の活動指針が資金繰りへずれていつている事を感じていたフェイトにははやての無念さがよく分かつていた。

『かねかねこんなことをやっている場合ではない』が、先立つものがなければ捜査も出来ないのも事実。そんなNGBにはやてはウォース達を招いた。これははやての独断であつた。トレイル^{II}ディン^{II}ウォース、惑星1つを手玉に取る政治力、軍隊に正面から喧嘩を吹っかけ勝利をもぎ取る戦闘力、そしてそれは齡9歳のスモールボディに詰まっているのだ。こんな存在を入れられた組織が何も変わらない筈がない、はやてはそう踏んだのだ。志の緩やかな死より、変幻自在^{ランダム}の投入を。そして次のステージへ進めば良い、それがどんな結果を生もうとも。

「ふふふ、皆、子供と思つて手え抜いたら食われるよー。なんだつて、その子、私等の誰よりも強いからねえー。」

「^{!!!}!!!?????」

その台詞に一齐に皆のウォースを見る目が変わる。特に戦闘凶と呼^{バトルマニア}ばれる人物が。

「げ、なんちゅー事言ってるんじゃ、アンタは!!--」

「アンタつて、まあええわ。」

はやては少し口の悪い少年を見つめる。その視線に乗せる想いには期待と後悔とが混ざっていたが、どちらの比率が大きかったかは言うまでもない。

「ウォース君、レノリアちゃん、NGBにようこそ!短い期間やけど一緒に頑張ろうな。」

その輝くような明るい笑顔が『後悔』している人間が浮べられるはずがないのだから。

2 - 4 話 ロストログアは魔眼（後書き）

かなり遅れました。

17日にも投稿するので許してください。

2 - 5話 土下座は文化

「で、だ。結局何やりゃあいいんだよ。」

鍋の殲滅を完了し寛ぐNGBメンバーにウォースは問い掛ける。普段は適当なヤツだが仕事に関しては真面目なところがつける、BY黒子。

「そつやね、今日は一日目やからお互いを知るために、模擬戦はどうやるか。お約束やしね。」

「何を言っただかよく分からんが、場所はどする？」

「ふふふふ。良くぞ聞いてくれました！！やったで、リン！ついに自慢できるわ！！」

「ん??」

「聞いて驚きなや。私等の組織は拠点や人員にはお金掛けてないけど、兵装、特に移動手段にはごっつい掛けとんのや。」

「…人員には掛けてないのね。頑張れ、皆さん。」

「そこに引つ掛からんとして!…そう、移動手段よ。その移動手段には当然、最先端技術が搭載された模擬戦場が盛り込まれてんのや」

「ほう。」

後ろから、「アイスが減った」だの、「お化粧が」だの、「食材が」だの聞こえるが大きな騒ぎにはなっていないのは、その必要性が高いからなのだろう。また巨大な足は拠点にも成り得る。そう、そこが本当の意味での本拠地なのである。

「で、オレ等は通してもらえますね？次こそは。」

腐っても非社会組織、ココまで本拠地らしくない場所が本拠地のはずがないだろう。そして幾ら代表とはいえ、メンバーを、一時的とは言えども、既存員との話無しに強行することは避けるべきである。要は仮初めの本拠の役割は『面接』であつたのだ。

「…話がよーて嬉しいわ。そういう事や。じゃあ皆、行くよ！」

次はこちらの番。足元に広がる転移魔法の行き先は、彼女等を信用するしかない。信用できなければトンスラこけばいい事、決して契約書も無い案件だ、逃げ出す事に躊躇いはない。でも、

「ウォー。」

「…、約束は、守らねえとな。」

観念した様子でウォースは転移を受け入れる。ほっとした表情を浮べたのはレノリアだけではないはずだ。

そして彼らは、真なるNGB本拠へ飛ぶこととなる。

「やるとなると早いな。良いぞ、さつさと実行に移すのは。」

「おーきに。でもホンマにええん？私等10人もおんのよ。」

「はやてさん、ウォーは一度決めたことはあまり覆しませんので良いかと思います。」

「なら、ええわ。じゃあ始めようか。」

転移先は本拠地である戦艦アースラ改。ぱくつて魔改造したらしい、色々。で、直ぐ模擬戦場に移動して2対10をウォースは提案し

たのだ。『2』はウォースとレノリア。『10』は、はやて、ヴォルケンス4名とリイン、フェイト、その使い魔、ハラオウン親子である。

「先に言っとくけど、手加減はしないからな。」

ウォースのその言葉が戦闘開始の合図となる。そう、挑発に乗った2名が文字通りウォース目掛けてぶっ飛んできた。

「てめえ、良い度胸だ。このアイゼンで消し炭にしてやるよー!」

紅の鉄騎、鉄槌の騎士、ヴィータ。彼女自体は小柄ではあるが、得物はハンマー型のグラーフアイゼン。完全にパワー重視、近接重視の騎士である。

「我等を甘く見たことを後悔させてくれる!」

烈火の将、剣の騎士、シグナム。ヴォルケンスのリーダー的存在で常に中心にいるべきなのだが、バトルマニア戦闘凶であるところが玉に瑕。得物は剣型、炎の魔剣レヴァンティン。

それを待ち構えるのは、トレイル「ディン」ウォース。構えもなく、緊張感も皆無、当然恐れで表情を影すことなど有りうるはずも無い。

「喰らいやがれ!」

「ハアアア!」

2人の刃がウォースに到達せんとする。その威力とていうと、岩なら粉碎、宝玉なら玉砕、オーディエンスは大喝采の二撃である。だが、

「その二撃、謹んで、蒐集致す。」

「「な、んだと!?!」」

何者であろうと吹き飛ばさんとする暴風はウォースに触れたとたん消滅した。そしてバランスを崩した二名は転びそうになるが体勢を直し、ウォースを見やる。

「お、おい、てめえ、何をやった。あと蒐集って何だ!」

『蒐集』というワードは闇の書事件に関わったこの場の人間からすると聞き逃せないものであろう。詳細はGoogle先生に聞いてください。

「ああ、悪い悪い。蒐集には深い意味はない。意味は只のデータ取りってやつかな。」

「データ取り、だと?」

同じく勢いを殺されたシグナムはウォースに問い掛ける。ちなみにさっきのはヴィータね。

「御二人方はオレの能力知ってるん?魔法反射マジックって言われてるけど、ホントは一方通行アクセラレータ。演算可能な領域に関してのベクトルをコントロール出来るのよ。そう、飽くまでも、演算可能な領域だけであって不可能なものもある。それが魔法。ただ、一回味見して解析が出来ちゃうと、可能領域に移せるのよ。なので『蒐集』って訳。随分色々とやってきたから結構な経験はたまってたけど、御二人の魔法属性は初めてだったわ。せんきゅー!」

解説文が要らなくなるほどの解説台詞。これには一同の口が塞がら

ない。恐らくはその内容が理由であろうが。

「じゃあ、なんで一発目からきっちり相殺が出来たんだよ。分からない魔法は無理なんだろ。」

「ああ、その通り、一発目はコントロールできない。なので、薄いシールドを張ることで味見できる層を増設し、肌で触れるときにはコントロールできるようになっていくという訳。ただ、所詮は味見だからベクトルの拡散ぐらいしか出来ないけどね。」

「なんだよそのチート能力は…。じゃあもうアタシ等の攻撃はオマエには届かないのか？」

「試してみれば？」

「「?!?!」」

あからさまな挑発だが乗らざるを得ない。ココで乗らねば敗北を認めめたことになる。いや、もっと屈辱的な降伏になってしまう。それを許せるほどヴォルケンリッターズのプライドは安くない。

「お望みならば、」

レヴァンティンを再び構えなおす。そこに込められる魔力は先程の比ではない。試しの一撃ではなく、誇りを込めた一撃となる。

「オメエの言うとおりになんのは癪に障るが、」

騎士が誇り高きものなら、その獲物が辿ってきた軌跡も同等だろう。なので彼女のデバイスは伯爵と呼ばれる。勿論、その誇りを妨げようとする敵には容赦のない一撃が向かう。

「「「吹き飛ばす（んで）（でや）!?!?!」」」。

騎士等の後方には彼らを補助する弓兵が存在する。原則的に近接戦闘を良しとする彼等の戦闘に水を指す無粋な輩を引つ立てるのは決まってバツクに控える彼等なのである。謂わば誇りを守護するものたちといえる。今回の件、色々突つ込みどころはあるが、局所的に見ればその様に見えなくもない。

それはそうと騎士×2と、弓兵（遠距離魔導師）×3の攻撃は、さすがは長年のパートナー達といえる見事な連携を見せ、目標へ到達、拡散、

「チィ!!!」

移動、騎士を各個撃破、

「な、なんて速さだ!!!」

スフィアを多数展開、

「二撃目行くしかないわ、」

「いや、まにあわな」

壊滅した。

色々な御話では戦闘シーンというもの是非常に長く描かれる。大概は主人公が劣勢の中物語は進み、最後に知恵と勇気ときっかけを味方につけ逆転するものだ。だが現実には有り得ない。強きものが弱きものを一瞬にて倒すことが普通だ。想像してほしい。1秒で攻撃を相手に到達できる者と、1・2秒で出来る者が戦う。5回やりあつたら1回の差異が出てきて勝負は終わる。いや、恐らくは2回でバランスを崩し、3回目まで止めをさせるだろう。強者が弱所を甘く

見て手を抜くことなど、一定レベル以上ではまず有り得ない。だから勇者は雑魚との戦いなども負けないのだ、いくらやっても。ウォースとリリカル勢の戦いも同じ。軍隊に正面から挑みアツサリと勝利を掴み取れるウォースに勝てるはずがないのだ。

「ちよつと待つてーな。まだ終わつたらんよ。」

「そつだ、僕達を甘く見ないで貰いたいな。」

流石に近距離から攻撃を反転された上に一撃を貰った近距離組みは立ち上がれなかったが、遠距離組みは盾状魔法が間に合ったのだから、まだ余裕の表情を浮べていた。流石は歴戦の戦士といったところか。

「ザフィーラさんとリンデイさんが間に合ったんですね。：甘く見たわ。」

但し被害は甚大。ザフィーラは一身に攻撃を受けて戦闘続行不能。リンデイも盾状魔法シールドの高速展開による反動を受けており、次はもたないだろう。

「攻撃は拡散され、防御ももたない。絶対絶命だね。」

「ここまで完成された魔導師は初めて見たわ。」

「流石は、ダークメアの英雄、魔法反射ミラー、そして、突撃前衛ストームハンガードとその歳で有名な二つ名が多いだけはある。」

「ふふん、褒められても何もでないぜ。」

突撃前衛ストームハンガードとはある場所でウォースが意図的に名乗っていた二つ名だがその説明はまた後ほど。

「ならもう一人を狙うしかない。一射撃魔法《Stinger》R

ay》!!」

クロノのほぼ無詠唱に近い魔法は、(傍目では)ぼーっとしていた
テイルへ向かう。凡そ5本の矢は、彼女の体に突き刺さる!!

「こっちは、幻影か。攻撃を貰ってくれない子達だな。」

「なんたって、痛いですからね。」

錯覚。塵気楼とでも言えば分かりやすいのだろうか。要するには。
見えるがそこに存在しない、存在していなければそこに攻撃をして
も無駄ということだ。

(アカンなあ。からめ手には私等めっぽう弱いからなあ。防げても
攻められんわ。こつなつたら…。)

「さて、此方から攻撃を、」

「参りましたー!!」

「ん!??」

「ちよ、はやて!!」

追撃を行わんとするウォースを止めたのは、はやての見事すぎる空
中土下座。これには外様、同僚共々びっくり。

「いやあー、キミら強いなあ。私等の真正面からの攻撃では突破
できひんわ。」

「……。まあ、妥当な判断かな。」

「じゃあ、負けたから美味しいご飯を奢るわ。私等の行きつけの店
があるんよ。そこで正式に歓迎会もせなな!」

と言って、はやては模擬戦場を後にする。彼女の変わり身の早さに

は慣れていたNGBメンバーもあっけに取られていたが、何故かウォースが真つ先に彼女に続く。頭を使うタイプの人間達には共感できるところもあつたのだらう。多分。

その日は負け戦の鬱憤もあつたのだらう、酔いつぶれた大人共が子供二人に絡むという、最悪な光景がとある飲み屋で形成されていた。最早コイツ等、この優秀すぎて大人びている子供を、子供とは思っていないかつたようだ。最終的にはレノリアが『ちよい』とキレて収まった。年端も行かない女の子に大人12人(戦闘面子+すずか、アリサ)が土下座している様子は、驚きを通り越して情けなかつた、BYウォース。

なんにしる、短期間限定だが、ウォースとレノリアという大戦力が組織に加わることとなつた。これは諸方面に大きな影響を与えることとなる。

2 - 6話 死神

「……そうか、分かった。引き続き監視を継続、目立った動きは直ぐに連絡しろ。……おとなしくはしてくれんとは分かっていたが、実際動かれるとめんどくさいな……。」

ファノンⅡ エノアス。遺失物管理部機動6課のトップ。常に眠そうなシャキつとしない顔でそこらをふらついているが、今日この時この瞬間は少なくともそう表現の出来ない表情を浮べていた。秘匿無線の相手は、第8管理世界に張り付かせている自分の側近。そこからの緊急連絡の内容がそうさせたことは間違いない。通常、只の情報取りに側近を配置させないことから、そこには重大な案件が燻っていた事は疑うべくもなく、今回ははずれを引いてしまったのだろうか、いや当たりなのかもしれないが。

「オイ、何かあったのか。」

この部屋にいる人間であるという事はトップのファノンの部下であるろう。ソレなのにこの言葉遣い。……将来は大物になるだろう。

「ああ、あつたね。それもオマエ等がたいそう喜びそうな内容だ。

……でも機密だから教えられねえわ、残念。」

「……そうか、ヤツが動いたか。」

「オレはなんとも言うてはいないんだがな、まあ良い。」

0073年入局組の中で最速で尉官に到達した戦闘狂はかつての同級生を思い出す。一足先に管理局へ入局し、華々しい戦果を上げ、スチームバンガード突撃前衛の二つ名を得た彼を、アーウエットは無意識の内に意識していた。『今の自分は彼に及ぶだろうか』、なぞ何度考えたか数え

られない。だが、負ける気はさらさら無かった。

「我進む道の上に障害あらば叩き潰すのみ。……疼くぜ。」

「ふふん、頼もしいこせ。」

『機動6課、機動6課、応答願います。』

管理局は暇な武官に飯を食べさせる程暇な組織ではない。常に指令が飛んでくることを覚悟しなければならない。例えこの日が7日間不眠不休任務の終わった翌日の休日であったとしてもだ。

「あいよ、了解した。すぐにうちの奴らを送り込む。指揮はレガシにやらせる、俺は緊急に備えココに陣取る、良いかな?……:良し、ならばバイバイだ。:おい、アーウエットちよいと面倒な匂いのする任務だ、詳細は後でデータを送り込む、オマエは先に現場へ向かえ。場所はエネアーク第三の都市フィリーズだ。」

「分かった丁度いいぜ。直ぐに向かう。奴等が来る前に片付けておいてやるよ。」

自信満々に出て行くアーウエットを見送りながらファノンはあることにふと気付く。

「……オレもだが、折角の長期任務明けの待機時間を職場で過ごすとはな……。アイツ、もしかしてプライベートは暇人なのか??」

その呟きに対する反応としてくしゃみのようなベタなモノをアーウエットは誘発させることはなかったらしい。

第4管理世界エネアーク。管理局が他世界に介入を始めた比較的初期に発見された星であり、今ではミッドチルダとさほど大きな差異は見受けられない。デバイスを作成する際に必ず必要となる素材、『クリファガゼア』の最大産出地として非常に有名であり、この素材の採掘、加工が主産業の一つとなっている。そのせいか優秀なデバイス職人も多く、管理局にもエネアーク出身の技師は非常に多かった。そんなエネアークの大都市の一つであるフィリーズは、クリファガゼアの鉱山近くに位置し、巨大な技師学校を持つ、エネアークの特徴を体現したような場所であった。

アーウェットは局の特別艇でエネアークに到着し、フィリーズの管理局施設内のある会議室にいた。そして目の前にはこの施設の長であるう人が座っていた。

「機動六課のアーウェット・リールデンス二尉だ。レポートは読んだ。色々言いたいことはあるが、何故俺らを呼んだんだ？」

彼の話し方は身内内に留まらないらしい。だが少年にこの物言いをぶつけられると普通は良い顔をしないだろう。

「はっはっは、噂通りだな、キミは。流星に彼のファウン中将の部下だけのことはある。ウチの奴らにも見習わせなければな。」

アーウェットはかなり有名なようだ。……上司含めて。

「いやはや、すまない。私はレガシー・ウェーベン、階級は少佐だ。ここで第141部隊を纏めている。で、君らを呼んだ理由は幾つかあるがそれは後だ。まさか来てくれるとは思わなかったのもあるが、まずは時間がない、先に仕事をしてもらおうぞ。」

「ああ、分かった、内容を聞かせる。」

乗り気ではあったが休日任務に駆り出された事情ぐらいは知りたかったアーウェットだが、緊急度が高いなら頷かざるを得ない。

内容は至極簡潔だった。とある武装勢力が鉷山を襲撃、クリファガゼアを持ち出そうとしているらしい。丁度今は月末であり、納品一步手前の時期で、倉庫には従来より多くの鉷石が保管されていた。当然鉷山はかなりのセキュリティシステムが張り巡らされていたが、そこは軽く突破されていたらしい。具体的には備われ魔道士が10数名。

「アンタの部隊はどうしたんだ。」

「最初のアラムで10名を向かわせたのだがノイズしか返ってこなくなってしまった。他の部隊は別任務中だったが、最少人数を残して呼び寄せて、派遣。結果は同じだ。ちなみに今は最初のアラムから1時間が経過している。」

「犯人ども、もう逃げだしているんじゃないのか。」

「いや、それはない。通常クリファガゼア鉷山に張り巡らされている、多重結界が全て割られた信号を出していない。何枚かは割られているようだかな。」

レガシーは先端が宝石でできた筒状のものを見せながら言った。おそらく何かの変化があるのだろう。

「分かった、なら急いで現場へ急行する。場所を送れ、……、うん、近いな。よし、バックアップはその結界関連だけで良い。あとは邪魔だからな。」

そう言うと、というか言いながらアーウェットは飛び出していった。

「アレが『弾丸』^{バレット}か。ホントに聞いたままの奴だな。さて、実力も噂通りであるよう頼むぜ。」

レガシー「ウエーベン。あまり戦闘は得意でない分、情報をつかむ能力に秀で、この地位を得た将校であつた。でもそういう人間も組織には必要とされており、上部からはそろそろ本局へ戻るよう話も来ている逸材ではあつた。事実、本局の人間をこの世界へ呼ぶことができるだけのコネはあつたようだ。」

所変わつて、ここは上空5メートル、大して『上空』ではない位置を高速移動しているアーウエット「ルーデンス。飛行魔法を目一杯『強化』し、とんでもないスピードで駆け抜けていつていた。それはまるで旋風。通つた後はキチンと跡ができるほどであつた。要するには、低空の高速飛行は止めましようということ。同僚、特に霊夢からは何度も注意を受けていたが本人はどこ吹く風であつた。本人はこの高さが最も飛行に適しているとのこと。……彼の感性はよく分からない。」

ほんの数分の移動でアーウエットは現場を目視できる位置へ到達していた。クリファガゼア鉱山である、ホープ山。エネアークでも有数の鉱山である。ここで取れたクリファガゼアが全管理世界へ飛び散り、デバイスとなり、魔法文明を支えるのだと思うと、ココがどれだけ管理局にとって重要施設か分かるだろう。そしてその重要度に見合うセキュリティが巡らされており、通常問題は起こるはずのない場所となっている。なのに起こつてしまい、派遣された数十人の武装局員が音信不通。明らかに大事件である。

「なのに、俺らだけしか呼ばれていないようだ。他の奴らはどこに行きやがったんだよ。まあ、どうでもいいが。……、ン、アソコに

誰かがいやがる。」

アーウェットは目的地近くにヒトを確認し、急速にスピードを緩め、現場に近づくが、

「……一人じゃねえ、十人はいるか…、クソツ。」

そこに居たのはもう既に事切れた人たちであった。恐らくは元傭兵、周りも同様の人たちであろう。全員が顔面か胸に大きな刀による傷を負っていた。間違いなく武装勢力にはそこそこの腕をもった剣士がいるようだ。アーウェットは再度一瞥し、飛行に戻る。今の優先事項は死者を慈しむことではなく、敵対勢力の壊滅だからだ。

アーウェットは鉱山の入り口箇所まで到達した。セキュリティの問題もあり鉱石は鉱山の深部にあるとのこと。また、魔法結界は山全体に深部に至るほど厚く何層もかけられており、局員の要請により第5層までは解除したとのことであった。なので武装組織は少なくともそこまでは自力で解除をしたのだろう。どういう手段を用いたのかは分からないが。

鉱山中に入って幾つかの広間を抜け、アーウェットは管理局員であったろう存在を幾つか見つけた。管理局員は全滅しているとみていいだろう。発見できた死骸は傭兵のときと同じく、恐らくはひと振りによる傷が致命傷となっていた。非殺傷が基本である魔導士には慣れない血痕。だが殺傷設定を許された任務も何度か経験しているアーウェットはあまり大きな衝撃は感じていなかった。悪党が殺傷設定にするのは当たり前、そして対する管理局の力が足りなければ死が降りかかるのも当然であると考えていたからだ。あまり他人と議論をする機会は少ないアーウェットだが、管理局というものに

関して色々な矛盾や疑問点、不信点があるものの、力強い管理者としての役割を果たせる組織は今のところ管理局にしかできないと思いい、自分の力を奮っていた。薄っぺらい考え方であったかもしれないが、その考え方にアーウエット自身として嘘偽りはなかった。だから、純粹に、同じ考えではないかもしれないが、それでもココを守るう救おうとして駆け付けたであろう同僚を、亡き物とした何者へ、怒りを感じていた。そして、

「あらん、あらららん？ 次の生贄君は随分とちっちゃいわねえ？」
「……………」

アーウエットは怒りをぶつける対象を確認する。一人はウザったい話し方をする年齢20辺りの女性。黄色の髪はパーマが掛けられており腰までの長さで、成人男子の90%以上が『グレート！』と叫ぶようなスタイル、ルックスも申し分ない。要するにイイ女。もう一人は年齢が10歳ちょっとで髪型はポニーで青髪、ついでに青眼。こっちなかなかのルックス、将来はスレンダー美人になるだろう。

「おい、テメエ等、難しいことは何一つ聞かねえ。一つだけ答える。……………殺つたのはテメエ等か??」

アーウエットは怒気100%を迷いなく彼女らにぶつけた。美女美少女であったのに。そしてその怒気は例え無罪の人間が、誤ってイエスと言ったのだとしてもまず間違いなく殺されると錯覚できるほどのモノ。先を予想できる人間ならNOと言うだろう、例え『殺つて』いたとしても。

「うふん、うふふふ。私たちはごみをごみの形に変えただけよん。殺すだなんて、もったいない言葉ㄗ」

「喚くな死ね。」

『弾丸』の二つ名に相応しい速さで、相手の話を聞き終わる前に、アーウエットは距離を詰め、拳をめりこませ

『ギユン』

られなかった。彼の拳は青髪ポニーの少女の剣閃に遮られ、アーウエットは後ろに下がった。

「タイチヨイすいません、この子、駄目だわ。ささつと殺ちゃってください。ワタシ作業に移るんで。」

「分かった。」

彼女等でやり取りが終了し、黄髪パーマは後方の、恐らくは次の結界が展開されている場所へ向かった。青髪ポニーは無表情をアーウエットに向け、短刀二本を両手に構えた。

「殺つたのはテメエのようだな。オレの一撃も止めてくれやがったし実力には問題は無さそうだ、…じゃあ、死ねよ！」

アーウエットはそう呟くと彼女に飛び掛かった、先程よりもより強化を重ねて。非殺傷も完全に解いてある。相手が自分より年下だろうが、性別が異なるうが、社会的弱者であろうが、何か特別な事情があるうが、ヒトを殺せば殺される事を理不尽とってはいけない、こうアーウエットは思っていた。なので躊躇わない。何時もの様に『処刑』するのだ、この『腕』^{パレット}をもって。

「ぐっ！！」

だが一撃を受けたのは青髪の少女ではなかった。絶対の自信を持って繰り出したアーウエツトの一撃は、先程と同じく少女の短刀にて塞がれた、いや、切り落とされた。指が何本か地に落ちる。短く見えた短刀であったが魔力を籠めその間合いを広げているようだ。しかしこれはよくある事象。特筆すべきことは彼の強化された拳の装甲をあつさりと破り、ダメージを与えていることであった。アーウエツトは一旦距離をとり少女を睨みつける。

「てめえ、まさかそれは……。」

アーウエツトはその効果に該当する例を知っていた。『魔力霧消』^{ディフュージョン}。名の通り魔力を拡散させる存在。元々そういう能力をもつ材料であったり、希少技能^{レアスキル}であったり、秘伝の処方であったりと源泉の種類は多く確認されてはいるが、世の中には殆ど流通しない。理由は、管理局による強烈なる規制だ。魔法が当たり前の社会の中での『魔力霧消』^{ディフュージョン}は大規模事件に直接繋がりがかねない危険なものだからだ。魔法世界では各種インフラの管理は勿論、家庭に送られる動力^{ディフュー}（魔力^{イジョン}）も当然魔法が絡んだ施設によって行われている。そこに『魔力霧消』^{イジョン}を投入すれば、都市部は壊滅状態となるだろう。それだけではない。次元航空艦や通常の航空艦、車に至るまでも魔法の恩恵を受けている。それらの運行中に動力である魔力を拡散させてしまえばどうなるだろうか。恐ろしい被害が出ることだけは間違いない。

（ド畜生、『魔力霧消』^{ディフュージョン}持ちか。効果発動のタイミングから、短剣から延びてやがる魔法刀部分が一番怪しい。……厄介だがやるしかねえ。そう、やるしかねえんだ。）

アーウエツトはこう見えても幾つもの危機を乗り越えており、弱点は把握していた。『弾丸』^{バレット}の二つ名が表すのは、真つ直ぐ飛んでいくこと。つまりは相手が真つ直ぐ当たってくれるなら相性が良いと

いうことだ。だがそういう相手だけではない。なので彼はもう一つの『弾丸』を用意した。

「!?!」

アーウェットが取り出したのは、この世界では殆ど見かけない、質量兵器の筆頭格である『銃』であった。彼は色々は無茶を言い、特例として認可を受けたのだった。

「生身ではしんどいが、これならどうだあ!?!ちゃんと止めてみやがれ!?!」

アーウェットは少女を狙い発砲する。当然強化を施してだ。

(魔力は消せても、運動量は消せまい。オレの強化弾丸の威力は並みじゃあねえぞ!)

重量と速度の強化。弾丸は重く速くなることでとてつもない運動量を持つようになる。その威力はビルをも貫くだろう。

「ふっ。」

そこで漸く少女が反応を見せる。これまでアーウェットの攻撃を受ける、対応するのみでなにも返さなかった少女が、薄く口を緩める。

『ギーン』

ただ一瞬の剣の閃きが起き、弾丸が砕けた。

「何だと!?!」

その一瞬で何が起こったのかアーウエットには全く知覚ができなかった。ただ、目の前の少女が何かを行った結果自分の放った弾丸は弾けた、ということのみが理解できた。

「次は、わたし。」

少女が消え、

「チィー!!」

アーウエットを切り伏せる、が、

「!!!?」

「そう、簡単にやられてやるか!!」

一撃を貰いながらも一撃を繰り返す。

「クソツ、ちょこちょこ跳ねやがって、クソ野郎が!!」

バックで逃げる少女をアーウエットが追う。そして少女はこれを受けが一瞬で異変に気付き受け流す。

「対応が速え、大したもんだ!!」

アーウエットの強化増強サブリッコは通常魔法を対象に行われるが、それ以外の箇所にも出来るよう日々地味な努力を重ねていた(こっぴどい影の努力をアーウエットは幅広く行っており、課員は凡そ掴んでいるが、知らないふりをしている)。そのひとつの結果が『存在強化』だ。『存在している』という概念の強化、そこには様々な応用が考えら

れる。少女に放った一撃には拳の存在を高める強化がなされており、これにより拳の耐久力向上が魔法無しでも実現していた。当然、その前の一撃を受けた際も同様の処置が施されていた。そして拳が魔法無しでもタフになる事により、魔法を打ち消された拳へのダメージを気にすることなく正面から莫大な運動量の乗った一撃を叩き込めるようになったのである。しかし敵も然る者、刀先で拳への触感に異変を感じるや否や、力を受け流し、正面からのぶつかり合いを避けてきたのである。

その後二人は数十秒間拮抗状態が続く。アーウェットの雨霰のような波状攻撃は悉く二本の短剣によりいなされ、少女の攻撃はアーウェットが耐え続けた。どう見てもアーウェット劣勢であった。なんとか圧倒的な手数で相手の攻撃を出させないようにするだけ。彼の勝利条件は最早一つだけ、仲間の到着まで時間を稼ぐことしかなかったのだ。だが、

「クスッ」

二度目の少女の笑みを見たアーウェットは直感的にこの勝負の敗北を悟った。まだこんなに可愛い笑みを浮かべられる余裕があるのか、ならココが節目で次のステージへ移ってしまうのだと。

「がはあ!？」

笑みの直後正体不明のダメージを受ける。いやこの一撃は本当に彼女が放った一撃なのか。アーウェットには全く関知できなかった一撃であった。そして予想だにもしなかった一撃で完全に体制を崩す。今までようやくの思いで保ってきた均衡が崩れる。後はあつけないもので、易々と左の短刀で二撃目を、一撃目と十字を為す形で胸にいれられ、最後に、

「ぐふっ!!」

長く刃を伸ばした右手の短刀で心臓を貫通された。そこに殺人における遠慮や戸惑いは一切無く、彼女も命のやり取りをする者の心得については理解しているのだと、アーウェットは地面へ放り出されながら思った。……少し穿った笑みを浮かべながら。

アーウェットはルーデンス。その異常ともいえる戦闘センスとそれを十分に発揮させられる希少技能レアスキルにより最強を体現してきたが、ココで敗れる。相手は蒼髪を棚引かせる二刀流の少女。名を、ネリー・ティアンカート、RTN幹部にして、神の導き内では最強の剣士として恐れられる存在であった。そしてこの事件後、鉦山内のカメラに残った映像から広域次元手配を掛けられることとなる。二つ名を『死神』として……。

2・7話 大半の事件は玉突きにより発生する

フリーズ鉱山襲撃事件の1週間前、ネリー・ティアンカートは慈善団体神の導きの本部のとある会議室にいた。現在彼女は反管理局組織Return The Natural (RTN) に出向している。この場所に存在することは珍しい。この場にいるのは彼女の意思ではなく、上官からの呼び出しにより態々世界を移動して参上したのだった。通常の連絡であれば画面越しが専らであったので、通常ではないことであろうとは薄々気付いていた、と思う。

「それにしても質素な建物ですね。サイズは大きいですが。」

隣からネリーに話しかけている、黒髪ツインテールの少女は、彼女の義理の妹のヘリオン・ティアンカート。ヘリオンも神の導きよりRTNへ出向の身分であったがネリー共々呼び出しを受けていた。……ただ『呼び出し』といっても悪事を行ったわけではない。

「華やかな装飾は、イメージ的に、良くないって、ノヴァ様が。」

「へー、そうなのですか。確かに慈善団体で煌びやかな内装は変な疑いを持ってしまいますね。……でもこのサイズだから意味がないのかもかもしれません。」

「ふふふふ、確かに貴方のいう事は最もだけど、逆に会員数が多いのに小さい建物っていうのもおかしいわよん。」

「!?!?……どなたでしょうか?」

急に話割り込んできたのは、二人の見知らぬ女性。黄色の髪は腰まで美しく伸び、中頃から先端に渡ってウェーブが掛けられている。ルックスは可愛い・綺麗よりも蠱惑的であり、それに合った凹凸のあるスタイルを持つ、要するには一度見たらまず忘れないような眼

の蕩けるさせる様な女性であつた。扉の開く気配を察していたネリーは無表情と沈黙を貫き、全く気付いていなかったヘリオンはその存在に気後れをしながらも言葉を返す。

「ワタシ

「ノヴァ様!!」

何か聞こえたかもしれないが、その音はネリーにしては珍しい大きな声に阻まれてしまった。ネリーは扉を開けた対象へ向けて飛び込んだ。ネリーの高速ボディープレスをまともに受けたのはノヴァ「ホールナー、団体副代表兼ほぼ全ての決裁者でもある。もうオマエが代表やればいいじゃんってほど権力集中してる方。ちなみにノーダメ、大したもんである。眼鏡っ娘といったらドジが相場なのに、もう娘でないか r (r y 。

「おととつと、……って久しぶりですね、ネリー。元気にしてましたか。」

「はい、ネリー、元気にしてました」

「うっ、…そうですか、それは良かったです（笑顔が眩し過ぎる、そして可愛い……）。」

「はい!!」

その様子を若干落ち込み（？）ながら眺める二人。

（うふふふふ、ふう、まあ良いですけどねえ。）

（……何でしょうね、この良く分からない怒りは……。）

ノヴァの登場と共に色々とベクトルが乱立したが回収は本人が行った。つかノヴァしか無理。

「皆さん、忙しいところ呼び出してすみません。本日はとある計画の上申書が上がっていたので、その件についての打ち合わせの為に集まっていたきました。尚発信源は、アナタ、ヘリオンです。」
「……ああ!? アレですか、でもアレはRTN内の人員で出来ませんが……。」

ヘリオンは少し疑問を呈し、見知らぬ黄髪女性を見やる。暗にコイツ要らないと言っていた。

「そういえばアナタ方は初対面ですよ。ならまず紹介をしましょう。こちらの二人は、団体内では警備部第三課に所属しているネリー・ティアンカート課長とヘリオン・ティアンカート課長補佐です。今はRTNに出向をもらっています。」

「あらららら、アナタが彼の、……ヘー、そうですね。」

黄色はネリー：ヘリオンを8：2位の割合で見つめ、何かに感心し何かを納得した。

「そしてこちらが、技術部第一課のモモ・エネンベク課長です。」

「モモ……。」

「何よ? 似合わないって!? 可愛すぎるって!? そんなこと私が一番わかってるわよ!!」

「モモさん、誰も言ってませんよ、そんなこと。落ち着いてくださいな。」

「……失礼しました。」

言っではない。ただ『目は口ほどにものを言う』という言葉通りなら、『目』で言っていることにもなるかもしれない。もう少し大人っぽい名前の方が本人は良かったのだろう。だが生まれた直後の赤ん坊には命名に冠しての拒否権などは勿論ないのだ、残念ながら

……。出来んじ。

あと、どうでも良いが超上司であるノヴァはモモのことは『モモさん』と呼んでいるようだ。……ええ会社(?)や。

「技術一課って、確かデバイス関連の部署ですよ。何故その方が?しかも課長さんが出てこられるとなると……。」

ヘリオンは再度自分が立てた計画の内容を反芻しようと頭の中の引き出しをひっくり返すが良く分からない。

「今回のアナタ方に行っていた計画の骨子はヘリオンのモノを使いますが、細かいところは所々修正を掛けています。その部分を実行するには必ずモモさんが必要なのです。詳細は今からデータを送ります。5分で暗記してください。」

「……了解。」

団体メンバーには専用のエレメンツが配布されており、色々な指示や連絡はそこに入る。携帯電話とよう似た機能だが、基本プログラム以上を作成・使用出来るところが大きく異なる。必要な機能だけ実行できる機器となるのだ。当然一般面子と彼女等管理職レベルでは搭載機能に大きな差異がある。特に戦闘員であるネリーのエレメンツには様々なリーダー機能や、何らかの妨害下でも受信・発信出来るようカスタマイズされたプログラムなどが組み込まれていた。使いこなせているかどうかは別としてかなり高機能なのである。しかし彼女等はデバイスも所持している。なら何故そちらに載せないのか。回答は明確。デバイスは専門プログラム、エレメンツは汎用プログラム用と使い分けられる方が何かと効率が良いからだ。無駄なプログラムを載せてその分鈍くなる専門機器などは何の意味がない。

「さて、概要は理解したかしら。ネリーとモモさんが実行部隊、ヘリオンはバックアップです。作戦趣旨は二つ。一つは第4世界エネアークのホープ山に襲撃を掛けクリファガゼアを手に入れる。二つ目は、……トラウマ、でしょうか、それを植えつけることです。」

「トラウマ？」

「実は同時刻に別の作戦も行います。ソチラとの関連性に行き着くと、あまり宜しくない考え方を生み出すことが出来るのです。」

「宜しくない、考え方……。」

「それは置いといて良いでしょう。具体的に行っていたくことですが、ネリーは反抗をするものへの鉄槌、そして必ず強者が計画遂行中にやってくるのでソチラの方にも鉄槌を与えるように。あと結界の破壊をお願いします。モモさんは監視プログラムの書き換えを。そうですね、顔はばれたくはないので白面でも被せちゃってください。」

「……白面、ね。了解しました。」

ヘリオンはノヴァの発言に対して思案する。自分の出した計画とは似ている、だが似ているのだ。全く別の、何か大きな流れに飲まれてしまっている感じがしていた。元案はクリファガゼアの奪取のみ。防御プログラムが薄く、近くに詰めている局員の錬度が低く、クリファガゼアの生産量が多いポイントを見つけだし、陽動を用い奪取する。最近理解できぬ存在との戦闘により軍需物資の相場の高まりが洒落にならない段階に達しており、特にデバイスに必須となるクリファガゼアの価格は暴騰状態にあった。加えてに最高級品、純度の高い、通称『ピュアガゼア』の価格は世界のどの物質よりも高く、優秀な魔導師を多く抱える、神の導き及びRTNでは死活問題となっていた。

『陽動』は『別の作戦』なのだろう。だが、何だろう、この、得も

言われぬ、気持ちの悪さは……。何か引つ掛かる、いや何もかも引つ掛かる。

？『何か』との関連性を持たせるサインである『白面』が思いつきで決められた。しかも詳細の打ち合わせはないのでデザインは一致しない、いや、もう一つの作戦では使用しないのか。なら、『何か』とは何だ？

？『強者』の来襲が決まっている。もう既に何か根回しでもあったのか？

？一番の疑問点、団体について良くない噂が流れるのを避けるためにこういう荒事は全て別組織にやらせていたはず。なのに今回は、私が知り得る中では始めての、団体の肩書きしかない人間であるモモさんを使う。……何か大きな流れを予感せざるを得ない。その第一歩のような……。

「では以上です。計画の成功を祈っています。」

ノヴァは少しも隙のない笑顔を皆に浮かべ今日のミーティングを終了させた。ヘリオンの疑問の答えを間違いなく持っている数少ないであろう人間の退出であったが、彼女に問う勇氣はなかった。

ノヴァ「ホールナー。二つ名、『幻夢の天使』。空間支配のスペシヤリスト。彼女は何処までを握れるのだろうか……。これ以上深入りして、これ以上握られるのがヘリオンは怖かった。

そして作戦完了1時間後、ヘリオンは何時もの司令室にて情報の整

理・分類・構築を行い、1週間前に抱いていた疑問の大半を解消させていた。

「……………？と？の半分と？は解消かな。残りは、……………ちよつと危険なところに踏み込む必要があるそうですね。」

彼女は少し強張った笑みを浮かべながら何時もは触れない場所への突貫を行っていった。

『可愛い子には旅をさせよ』。何事も親がやってしまうのではなく子供にも経験をさせろ、とでも訳せばよいだろう。優秀な子供は総じて何でも自分の力でやってしまおうとする。素晴らしい。だが、何事にも限界というもある。これを知らぬのが子供である。良い点でもあるが、悪い点でもある。ヘリオンⅡティアンカート、彼女は優秀な子供であった。ただ、少なからず自分の才に驕る節があったことは間違いない。さて彼女は限界を見据えることが出来たのであろうか……………。

同時刻、神の導き関連施設にネリーはいた。様々な計器とコンピュータが溢れる部屋、その中でも最も大きい計器の上にアーウェットを貫いたデバイスが二本乗っていた。何やらデバイスの状況の確認を行っているようであった。

「ネリーちゃん、前も言っただろう、君の大きすぎる力を用いての魔力霧消ディフュージョンの多用は危険だつて……………。しかも今回はアレ、使ったですよ。スゴイ酷い状況だ。……………まあ、君は団体最強の剣士だから許されるだろうけど、コンナに普通は贅沢できないよ。」

ネリーにヤレヤレといった表情を向けるおっさんは、デバイス工学の専門家の中でも超エリートなおっさん。そう、要はあっさん、いや、おっさん。

おっさんは消耗している魔力霧消機能を補充するべく機器を動かす。どうやら消耗を補うためには、超高価な機器の使用と多大な魔力、そしてピュアガゼアが必要であったようだ。うん、贅沢品。

「でも、コレ使わなきゃ、負けていた。アイツ、強かった。」

「……ふーん、珍しいね、ネリーちゃんがそんな感想を持つたなんて。でも殺しちゃったんだろ、もったいないなー、ライバルが出来たかもしれないのに。」

「らいばる……??？」

「ん？ライバル知らないの!?……まあ、キミに追いつけるやつなんて早々いないからな、仕方ないか。ん、仕方ないのか？いやいや仕方ないだろう。……まあどうでもいいけど。……ライバルつてのは、特別意識して互いに競い合う相手のことをいうんだよ。近しい実力がなきゃライバルにはなれんし、聞くと歳も近いんだろ、丁度良かったんだけどな。」

「らいばる……。」

団体が預かる子供に付けられた性、『ティアンカート』。ミッドチルドの土着宗教であるルルト教に登場する、母を冠する神『リアンカー』を文字つて代表が付けたそうだ。実の母の愛情を受けることの出来ない子達に、名前というその身に一番近い場所から加護があるように、という願いがあるらしい。

まあそんなトレビアは置いておいて、そんなティアンカート姓を持つ子等は団体に協力することを希望者のみ受け付けており（ほぼ100%なのだが）、持つ素質により教育方針を決められる。当然戦

闘能力も測られ、ネリーはそこに引つ掛かった。その後素質のランクにあわせたプログラムを受けるのだが、ネリーは特別のプログラムを用意された。あまりにも才があったので。理解アンソウできぬ存在の存在により団体が引き取る子供はかなり多かったが、その中でもネリーは特別だった。たった二月でティアンカート内最強となり、半年で代表の御側付きとなつてしまつたのだ。ライバルなどいるはずもなかつた。そして当然今後も……。

事件発生より二日後。所変わつて、管理局遺失物捜査機動6課領有スペース内にあるファウン「エノアスの部屋。というのも、彼は局内の様々な場所に部屋を持っていた、何故だか知らんが……。彼は部下より提出された報告書を熟読していたようだ。コーヒー片手に

「……………」

彼が眺める文書は部下からの報告書だけでなく、最近起きた大事件についての局内文書や、丸秘のタグが付いたモノ、彼の放っている諜報員からの報告書などもあった。

「……………」

エレメンツの電子画面を何枚も展開していたものを全て閉じ、コーヒーを飲み、背もたれに身を預ける。

……何分か経つただろうか、ガバツと起き上がり、彼は上着をとり、真剣な表情で部屋を後にした。

その後、彼は消息を絶った。

ほぼ同時刻、情報統制から漏れ出す、または意図的に漏れていった二つの事件についての情報がとあるコンピュータにてキャッチされた。

「何よコレ……。何なの……。」

「どうしたのよしずか、……。って何よこれ……。」

キャッチしたのは八神はやて率いる反管理局団体NGB。キャッチした情報は、クリファガゼア強奪事件と、

「第3管理世界ヴァイゼンのアールズシティに……。旅団規模の理解できぬ存在が空間転移ですって……。！？ちよつと皆に伝えなきゃ

！」

「う、うん！」

「……。死者59名、負傷者1名、被害総額7,000億ミッド）日本円とイコール）、敵対勢力の逃亡は確認、具体的な外見は添付の写真を参照。後者は、死者凡そ4,000名、負傷者50,000名、被害総額7兆ミッド。理解できぬ存在は出現固体の70%を撃破、現在も戦闘は継続中、被害の増加が見込まれる。……」

彼の眺めるスクリーンには、今ミッドチルダ及び管理世界で最もホ

ツトなニュースについて表示されていた。閲覧にはある程度の技術を必要とはするが……。

「良かったの？そこまでしてしまっても……。」

何も存在しない場所に存在する少女が彼に問い掛ける。

「元々あの場所は局と癒着している組織城下町だったんですよ、色々手広く悪さをする……。少し悪い運命が訪れたとしても、神の裁きとして受け入れられるんじゃないでしょうか。」

「ふふふ、まあ私はどうでもいいのだけでも。」

「この度はご協力頂き有難うございました。まさかこんなに早く彼が動くとは思わなかったのですが、どうせなら有効利用したほうが良いと思ひましてね。急いで足場を整えたんですよ。」

彼は誇らしげに彼女に言う。随分と興奮をしているようだ。

「そこで一番の問題はアナタとどのようにコンタクトを取るかです。アナタは何時でもココにいるわけではないのですから……。そこで私は彼女のことを思い出したのですよ。いやはや、私も彼女の口トについてはもう自然に接するようになっていて彼女がホントはどういう存在なのかを忘れてしまっていたのですよ。ソレを思い出せたから良かった。本当に良かったです。」

「そう、それは良かったわね。」

少女はどうでも良いことに合わせるかのような気力の無い受け答えをする。実際どうでも良かったのだろう。

「あとはアナタに運命をいじっていたただけです。それで、理^{アンソウン}解できぬ存在が降り注ぐ。また理解できぬ存在^{アンソウン}に対しての関心が高

まる。恐怖もだ。皆が理解できぬ存在を無視できなくなる。当然彼も！……失礼、ヒートアップしてしまいました。」

「どうでもいいけど、それで何時仕上げるのかしら。」

少女はようやく言葉に熱を込める。

「団体設立から約5年。第一次計画は既に3年前に成功。今は第二次に移行しており、それも今年中に完了の見込みです。ならば最終計画は来年中にでも。」

「そう。あと、私の前ではソレ、脱いでいいわよ。」

少女は彼を指差す。彼は自分を見やる。そしてゆっくりと顔を上げ、少し表情を崩し、少女を見る。

「あははは、そうですね。……そうですが、もう、このままでいいかと思っっているんですよ。……もう、脱げませんよ。」

「そう。」

若干曇った表情を浮べる彼に少女は視線を向ける。その視線には熱はこもってはいなかった。少女は最初から最後まで彼に対して関心が薄かった。

「……ということなんよ。皆、ごめん！！」

はやてが謝った理由は長い。すずかとアリサが事件についてはやてに報告後、なんとはやては管理局へ通信、援軍の申し出を行ったのだ。近くにいたフェイトは驚いていたがすぐに意図を理解し、はや

てに合わせた。二人の交渉で纏まった戦力が喉から手が出るほど欲しい管理局はNGBでなく、構成員のそれぞれを『傭兵』として雇うこととなった。当然ながらこの契約に関してははやての指定した第三者機関を介して行われたので、局が契約を破りNGBのメンバーを拿捕した場合はソレ相応の被害を被ることとなった、主に風評的な部分で。

局としては指名手配犯ではあるが凶悪事件には関わりのないNGBについてよりも、今の重大事件を収めたい腹があった。加えて管理局の面子として単独での解決を図りたいという願望もあったので、金だけで動く少数精鋭の傭兵を使うことは都合が良かった。その為の情報統制だったが、果たしてコノ陰謀も何処まで想定どおり動くやら。NGBとしてはがっばり儲けて尚且つ、人助けが出来る且つ、局へ恩を売れるという一石三鳥なので良いトコ尽くめ。何？悪どい？いやいや、持たざるものが持つものに相対する場合、弱り目を叩くことしか手段はありません、贅沢は言えません。贅沢は敵。

「……………なんで、出来れば皆に来て欲しいんやけど、……………どうやる？」

んな訳で、はやてさん、メンバーに説明及び承諾を得ずに突っ走ってしまった訳です。理解アンソウできぬ存在との戦闘も碌にやったこともない、というかやったことのあるのはウォースとレノリアだけなのに……………。そんなしんどいミッションで今回の契約は個人的に行うのでNGB代表のはやてがサインを出来ない。でも人員の提供を条件に入ってしまった。最低（！？）全員個人的に契約を結んでもらえないと、第三者機関にお仕置きを喰らうのはNGBになつてしまうのだ。でもやっぱり強制は出来ない。さてどうなる？

「はやて！…！」

「はい！ごめんなさ

……なんて心配、

「僕達がNoと言うはずがないだろ！！」
「い？」

無駄だろうね、この組織なら！！偶にはカッコいいクロノ君でした。

「ウォース君、レノリアちゃん、一緒に来てくれる？」

そして、一時的メンバーである二人に再びおどおど状態で話しかける、可愛い生物。

「……突込みどころは満載だが期限内だししゃーない、……おっし、
ストームバンガード
突撃前衛の力を見せてやるわ！」

「だそつです。」

「……二人とも、ありがとなー！！じゃあ皆、15分後ココに再集合。解散！」

そしてNGBが動き出す。目標は第3管理世界ヴァイゼンのアールズシティ。理解できぬ存在蠢く都市に彼等は何を感じるだろうか。

そして、NGB内で最も理解できぬ存在戦闘に慣れし秀でし人物であるトレイル「ディン」ウォースは自分の世界に飛んでいつまっていた。

「理解できぬ存在……。3年ぶりか……。」

そう彼は3年前、管理局の理解でアンソウきぬ存在殲滅軍に在籍していた。
そしてソコで衝撃的な事件と出会いがあったのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4223k/>

一方通行でリリカルIN

2011年1月18日02時06分発行